

---

# 世界最強の落ちこぼれ

いふじ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界最強の落ちこぼれ

### 【Nコード】

N8776J

### 【作者名】

いふじ

### 【あらすじ】

総合PV100万突破！！ 総合ユニーク9万突破！！ 読んでくださっている皆さん、本当にありがとうございます！！

魔法というファンタジーが当たり前のように存在するようになって既に五年。産まれたての赤ん坊だって癩癧を起して、微弱ながらも魔法を使えるというのに、俺こと藤堂竜也はこの世でたった一人、魔法が使えない落ちこぼれ。そんな俺でも人並の幸せを追い求めることは罪じゃないはずだよな？それなのに・・・俺が受験した天満

南高校の合格発表を見に行くと、「君は不合格だ」と、校長先生直々に宣告されました。あれ？俺、何か悪いことしましたか？そんなとき、今までお目にかかったこともない美女が、強面の筋骨隆々とした男を連れて俺の下へとやってきた。彼女は俺の手を取りこう言った。「さあ、お姉さんと一緒に行きまちなうね」行き先は、魔法を教えていることで超有名である陵聖学園。世界でも三校しか存在しない、魔法を専門的に教える学校に、魔法を扱えない俺みたいな落ちこぼれがどうして入学出来るんだ！

## プロローグ（前書き）

気軽に読んで頂けたら幸いです。

## プロローグ

我が一陵聖学園　りょうせいがかくえん　新聞部は話題のカップル、  
一柊美紀　ひいらぎみき　さんと一藤堂竜也　とうどうりゅうや  
くんのインタビューに成功した。

が、ここではあえて記事を控えさせてもらうことにする。

しかし、それでは読者の方々にご納得いただけないだろう！

なので、いまはこの言葉だけで了承してもらいたい。

「お幸せに！」

後に彼と彼女はこう語る。

『あゝ！　いま思い出しても感動だわ！　あの出会いは運命！　そう！　運命だったのよ！　神様に感謝しなくちゃねっ！』

『あー！　いま思い出しても最高ですね！　あの出会いは！　ただ、俺は平凡な生活を望んでいたんだけどな……。でもまあ最後のアレがなければもっと……。す、すいません！　思い出したらちよっと……。もうこれでいいですか？　先輩？』

担当記者、一陵聖学園二年、一美水　よしみず　すもも。

## プロローグ（後書き）

感想お待ちしております。

第一話…さようなら、夢の高校生活（前書き）

あの・・・実は・・・その・・・えーとですね・・・

何と言っています・・・

まあ、あとがきで言います。

## 第一話：さようなら、夢の高校生活

魔法が一般常識じゃん？

などという不思議世界に変化したのは五年前のこと。

原因は不明だが魔法は五年前、確実に世界中の人間がその存在を突如認知した。

誰に教えられたわけでもなく、人々は魔法を扱えるようになった。

その利用方法は様々で、炊事洗濯から戦争まで幅広く、使用または研究されている。

魔法が世界中で浸透してきた中、二年前に日本、イギリス、アメリカ、この三国に世界初の試みとなる魔法学校が設立された。

まあ、魔法なんて非現実的なものの存在を信じていない、というか信じたくない俺にとってはどうでもいいことなんだが・・・。

だいたい魔法が使えたからなんだっていうんだ？

みんなどうかしてる。

毎日毎日魔法の話ばかりだ！

今日はどんな魔法が使えたとか、明日はあの魔法に挑戦してみようとか。



魔法なんて使えなくて困るなんてことはない！

あってもなくても同じだよ！

ま、まあ、使えるに越したことはないだろうが・・・。

はあ、どうしてなんだ？

どうして世界中で俺だけが魔法を使えないんだ？

俺はいわゆる落ちこぼれという存在なのだろうか？

腐った蜜柑なのか？　しかし、そんな憂鬱な気持ちを宇宙の彼方まで追いやる出来事が起こった。

それは、いままで魔法とは本当にこれっぽっちも無関係だった俺にとって不思議発見だった。

そんな俺が魔法世界に足を踏み込んでしまったのは忘れもしない三月十七日のこと。

この日は全国の受験に悩める中学三年生にとって自由を得るか、はたまた地獄行きの切符を問答無用に叩きつけられるかの運命の分かれ道。

そんな公立高校合格発表日だった。

俺が受験した高校は俺の住んでいる千代木市内にある天満南という学校だ。

南というからには他に北、東、西があるのかといえばそうではなく、ただ南にあるというだけだ。

天満南高校はどこにでもいる普通の教師がどこにでもいる普通の生徒にどこにでもある普通の教室で授業をする、普通すぎて欠伸が出そうな学校である。

そして俺は普通すぎて欠伸が出そうな学校から地獄行きの切符を渡されてしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

言葉が出なかった。

いや、ショックだからじゃない。

合格発表の掲示板に自分の受験番号がなかったのなら、まだ諦めがついた。

自分の努力が足りなかったのだと。

しかし、俺は今回の受験に確かな手ごたえを感じていたし、自信もあつた。

それなのに……。

「あつ！ 君つ！」

合格発表を見に校門を渡ろうとした俺をバーコード頭の頼りなさそうな顔をした男が声をかけてきた。

年はすでに五十を過ぎているであろう小太りなその男は、バーコード頭にねちゃねちゃと嫌な音が聞こえてきそうになるほどの汗をかいていた。

よく見れば顔も青ざめていた。

「なんですか？」

「ひっ！」

厚意で声をかけてやったのにバーコード頭のおっさんは恐怖に顔を引きつらせ、数歩後ずさった。

これは俺の顔がヤクザも顔を背けてしまう怖い顔の持ち主だからではない。

と、思う。

「あの・・・」

と、意を決したように男は言った。

「はい？」

「ひいっ！」

こめかみがひくついた。

「あの・・・き、君は・・・」

「はい？」

用があるなら早く言えよ！

こっちは合格してるかしてないかを早く確認したくてわざわざ慣れない早起きをしたんだぞ！

本当は緊張して眠れなかったただけだが。

そんな考えを頭の中で叫ぶ俺に、男はごくりと喉を鳴らせて、

「き、君は、その、藤堂竜也くん・・・かな？」

「はい、そうですけど・・・俺がなにか？」

何故このおっさんは俺の名前を知っている？

それに何故鼻息が荒くなってるんだ。

マジでキモイです。

「本当に君は藤堂竜也くん本人で間違いないんだね？」

「そうですよ」

「そ、そうか・・・」

おっさんはそれきり黙ってしまった。

俺の進行方向を遮ったまま。

「あの・・・」

「うん？」

「俺、合格発表を見に行きたいんでそこ退いてもらえますか？」

「駄目だ！」

おっさんは大声で、しかも短い腕を精一杯横に伸ばして俺の行く手を阻んだ。

なに？

これはなにかの試練なのか？

「アンタさつきからなに言ってるんだ？ つーかなんでそんなことするんだよ？ 受験生が合格発表を見に行くのは当然だろ？」

いい加減我慢の限界だったので思いっきりまくしたててやった。

「それは・・・そうだが・・・」

「それならそこ退いてくれよ」

「だ、駄目だ！」

「はあ？ だからどうして駄目なんだよ」

「そ、それは・・・」

俺とおっさんは周囲の注目の的だった。

当然だろう。

さっきからのやりとりを周囲の皆様は何事かと見ていたからだ。

「それは？」

俺はおっさんに聞き返した。

「それは・・・私がこの学校の校長だからだ！」

校長？

「君は・・・残念ながら不合格だ！」

「・・・・・・・・・・」

頭が真っ白になった。

次いで目の前が真っ暗になった。

なんだって？

不合格？

俺が？

はははっ！

馬鹿言っちゃいけないよ！

そんな・・・まさか！

じゃあ今までの俺の努力は意味がなかったってことか？

そんなの冗談じゃねー！

今まで一年間遊ぶのも我慢して必死で勉強してきたんだぞ？

しかも確実に合格するためにわざわざ学校のレベルを二つも下げた  
つてのに！

担任の先生も俺だったら絶対余裕だって言ってたじゃねーか！

つかやべーよ！

俺はここしか受験してねーよ！

俺の家は貧乏だ！

貧乏の中の貧乏の中の貧乏！

キングオブ貧乏だ！

私立なんてとてもじゃないけど受験できませんでした

どこかのテレビ番組では一ヶ月一万円生活なんてのをやってるみたいだけど、俺の家は一ヶ月三千円生活だ！

「おーい竜也！」

と、今後の人生お先真っ暗ルート突入決定な俺を呼ぶ声がした。

校門からは手を大きく振り小走りに俺の下へ走ってくる親友の山中桜子の姿があった。

桜子とは中学三年のときに知り合ったのだが、すぐに気が合い仲良くなった。

中性的アンド美形フェイスの桜子はボーイッシュな感じのショートヘアーに陸上で鍛えられた無駄のない体をしている。

しかし、鍛えられているとは言ってもそこは女の子であるからして、柔らかかそうな肌である。

スタイルも抜群だ。

桜子はいつも笑顔絶やさない元気の塊のような女の子で男女とも分け隔てなく人気がある。

だが、若干、女の子の人气が強かった。

そんな桜子とどうして親友にまでなったのかというと、こいつは最近の若い者（俺も一応最近の若い者だ）には珍しい儉約家なのだ。



しかし、ただの儉約家というわけではなく、桜子の家は金持ちなのだ。

それも大がつく金持ちだ。

そんな桜子は俺の長年の節約術の極意とも言える技の数々をどこから聞きつけて俺を師と崇めるようになった。

もちろん最初は疑ったさ。

大金持ちのお嬢様が何故に？

ってな。

でも、すぐに桜子が俺をからかっているのではないとわかった。

そして、俺は長年の節約生活で編み出した奥義を桜子に伝授した。

と、まあこれが俺と桜子の親友ヒストリーだ。

「ねえ竜也！」

はっ！

あまりのショックに楽しかった中学の日々を思い出していた。

そう、それは走馬灯のように。

まあ楽しかったのは学校だけで、家に帰れば勉強、勉強、また勉強だったけどな。

「竜也！ 聞いてるの？」

「あ、ああ・・・」

「どうかした？」

「いや、別に・・・」

はい、どうかしました。

たった今、目の前にいる校長と名乗る不審人物に俺は不合格だと告げられました。

って！ そんなこと言えるかー！

「そう？ ならいいけど。あつ！ それより合格発表見てきたよ！合格おめでとう！

それにしても竜也はすごいね！ トップの成績で合格だって！」

「ふえっ？」

なんだって？

「本当か！」

「え？ ああ、うん」

ママ、天使様が僕の目の前にいるよ。

あら本当ね。

うん！

ふふっ、きつと竜ちゃんがとってもいい子だから天使様が竜ちゃんにプレゼントを運んでくれたのね。

ぶれぜんとおー？

ええ、そうよ。

「天使様！」

俺は思わず桜子を抱きしめていた。

「！」

桜子は体をびくっ！とさせて驚いていた。

が、俺はそんな桜子には構いもせず、桜子の手をとり何度も礼を述べ、そしておっさんを睨みつけた。

今の俺はメドゥーサだって睨み殺せそうだ。

実際には無理だろうけど、それだけドスの効いた睨みってことだ。

「おっさん。冗談にしては本当に一ミリも笑えなかったよ。それにしてもどうして嘘なんて吐いたのかな？」俺、知りたいな」

「い、いや、その、それは・・・」

俺の怒りのボルテージがマックスになり、おっさんを抹殺するための必殺技入力コマンドが残り ボタンだけとなったちょうどそのとき、大して広くもない校門前に黒塗りの大きなリムジンが甲高い音を立てて止まった。

周囲の皆様もざわめいている。

身長二メートル近くありそうな男が降りてきた。

男は後部座席のドアを丁寧に開く。

開かれたドアの中から降りて姿を現したのは薄いピンク色をしたロングヘアーが印象的な超絶美女だった。

紅い瞳の超絶美女は背も高く、優しそうな微笑を浮かべている。

「お騒がせして申し訳ありません」

超絶美女は完璧な日本語で深々と頭を下げている。

周囲からは甘いため息が聞こえてきた。

もちろん俺からも。

超絶美女は誰かを探しているのか、キョロキョロと辺りを見回し、やがて俺と目が合った。

ニコッ。

太陽の輝きを思わせる微笑みを向けられた。

「さ、桜子・・・」

「え？」

「スナイパーの野郎、純真無垢なキューピッドちゃんに化けてやがった。くそう・・・俺はもう駄目だ！ うう、た、頼む！ 俺の代わりに、か、代わりに・・・・・・無念」

チーン。

藤堂竜也享年十五歳。

「ちょ、ちよつと！ 竜也？」

そんなコントを繰り広げていると、超絶美女は優雅な足取りですぐ近くまで来ていた。

やっぱり俺と目が合った。

「藤堂竜也くん？」

透き通るように綺麗な声がマイネームをコールした。何故所々英語なのかというと、超絶美女が異国の地の方だったからだ。

「イ、イエス！ マイネーム イズ リュウヤトウドウ！」

「ふふっ」

わ、笑われた！

「大丈夫。ちゃんと日本語を話せるから。それにさっきもいまも日本語だったでしょ？」

あー！

馬鹿か俺は！

さっき自分で完璧な日本語だって感心してたじゃないか！

恥ずかしさで段々顔が火照ってきた。

「ふふっ、かゝわいい」

キヤー！ ホント恥ずかしい！

「さっ、行きましょうか？」

「あっ、はい！」

そう言うつと超絶美女は校長に向き直り、

「急な申し入れを聞き届けていただき本当にありがとうございますとございまして。それでは失礼致します」

言ってペコリとお辞儀をした。

校長はこくこくと頷いているだけだった。

「さあ、お姉さんと一緒に行きましょね」

はい！

って、どこに！？

やばい！

さっきはわけもわからず返事をしてしまったけど、この人は一体俺をどこに連れて行くつもりなんだ？

「ちょっと待てっ！ 行くってどこにだよ！」

あまりの強引さについて乱暴な口調になってしまった。

すると・・・。

「ぐすっ・・・竜ちゃんは、お姉さんのことが嫌い？」

と、泣かれてしまった。これじゃ俺が悪者みたいじゃねーかよ！

「お姉さんが・・・嫌い？」

泣きながらそんなことを言われれば嫌いだなんて言えない。

むしろ好きです！

「いいえ〜！ とんでもない！」

「よかつた〜！ それじゃあ行きましようか〜！」

って、嘘鳴きかよっ！



## 第一話：さようなら、夢の高校生活（後書き）

読んでいただきました皆さまならばご理解いただけたと思うのですが、こんな内容のお話ですので、作者である私の、前書きあとがきも今後はもう少し軽い感じでいこうと思います。

あつ、感想お待ちしております！

第二話・美女マリンさん、そして薄情なお母様（前書き）

はい！

ということで第二話始めました〜！

## 第二話：美女マリンさん、そして薄情なお母様

車の中はとんでもなく広かった。

リムジンなんて乗ったことないので、いま俺が乗っているリムジンと比較することはできないが、それでも広すぎた。

普通の車の何倍あるんだ？

そういえば車に乗ったのなんていつ以来だったかな？

最後に乗ったのは・・・。

「なにか飲む？」

「い、いえ・・・」

「そんなに緊張しちゃってどうしたの？」

誘拐紛いなことをなさっている張本人が言う言葉ですか？

「あの、この車はどこに向かってるんですか？」

「陵聖学園」

言葉を失った。

そこは俺でも、否、誰もが知っている日本で唯一の魔法学校だ。

ついでにいうと魔法学校は現在世界で三校しかない。

日本の陵聖、イギリスのホリック、アメリカのキャッスル。

この三校はあまりにも有名だった。

「ど、どうして俺がそんな学校に！ それよりも俺が魔法を使えな  
いってこと知らないんですか？ お姉さんは・・・じゃない、ええ  
ーと・・・」

「マリン・ヘッケル」

「マリン・ヘッケルさんですか？」

「そうよう！ でも、竜ちゃんだったらマーちゃんでもいいわ  
よう？」

「はい？」

「お姉さんはね、気に入った子にはニックネームで呼んでもら  
いたいの」

「はあ・・・そうなんですか？」

「うん！ だから呼んでー！」

「え？」

ワクワク。

ドキドキ。

そんな期待に瞳を輝かせているマリンさん。

「あの、マリンさん」

「そっか、やっぱり竜ちゃんはお姉さんのことが嫌いなんだね。だからマーちゃんって呼んでくれないんだ。いいわいいわよ！ それならお姉さんだって、実力行使になっちゃうんだから！」

実力行使って・・・。

言って、マリンさんは虫も殺せない力でポコポコと俺の肩を叩いてきた。

「竜ちゃんの馬鹿！」

そんなマリンさんの心からの叫びを聞いた運転手さん（筋骨隆々とした男）が鬼のような形相で俺を睨みつけてきた。

（マリンさんをマーちゃんと呼ばなければお前どうなるかわかってんだろうな？ ああん？）

目がそう言っていた。

（わかりました。呼ばせていただきます）

（よし）

アイコンタクト終了。

ちなみに運転は前を見ていなかったのにもかかわらず少しのズレもなかった。

「マーちゃん」

そう呼ぶとマリンさんは子供のように顔を輝かせた。

「俺が魔法を使えないって知ってますよね？」

五年前に世界中で魔法が使えないただ一人の人間として、世界各国から取材と称して人が押し寄せてきたときのことを思い出していた。

あのときの俺はまるで珍獣扱いされていた。

まあ、そんなことがあったおかげで、いまや俺は世界的な有名人となった。

あまりよくない意味でだが。

「知ってるよ」

「それじゃあどうして俺が陵聖学園に連れて行かれるんですか？」

「どうしてって、それは、竜ちゃんが、これから三年間通う学校だからに決まってるじゃない！」

決まってるのか？

「いやいやいやいや、ちょっと待ってくださいよ！ 陵聖学園は魔法使いのエリート中のエリートが通う学校ですよね？ そんな所に俺みたいな落ちこぼれが通うなんてイースター島のモアイ像がどうやって作られたかのかつてくらい不可解なんですけど！？」

「あははは！ 竜ちゃんおもしろいこと言うね！」

笑い事じゃねーって！

本当になにがどうなってんだ！？

「答えは、竜ちゃんが言った通りの理由だよ！」

「え？」

「エリート中のエリートが通う学校だって竜ちゃん言ったですよ？」

「はい・・・」

「だから、竜ちゃんは陵聖学園に通うの！」

「俺がエリート？ なにかの間違いじゃないですか？ 例えば同姓同名のまったく違う誰かとか」

絶対にそうだと思ったがマリンさんはあっさりと否定した。

「ううん、君で間違いないよ！ お姉さんにはちゃんとか

「っちゃうんだから」

そう言うと、マリンさんは自身の豊満な胸に俺の顔を半ば無理矢理埋めさせた。

思わずドッキンコ！

苦しい！

でも・・・幸せ！

「あつ！ そうだ！」

と、重大な事実に気づいた俺は、大変名残惜しかったがマリンさんの胸から顔を退かした。

「陵聖学園つて、国立ですけど授業料が果てしなく高いですよね？俺の家にはそんな高い金が払えるほどの蓄えはありません！」

するとマリンさんにはっこり笑って、

「お金のことは気にしなくていいよ！ 陵聖学園が竜ちゃんの獲得権を契約金百億円で取得したから！ 年俸は、五億円つてことになったんだけど、お姉さんとしては最低その十倍は欲しかったよ！」

キヤーキヤー喜んだり、プrippり怒ったり忙しい人だな。

それよりも契約金？



年俸？

しかも破格の額だ。

俺はいつの間にアスリートに転向したんだ？

「あの・・・嘘ですよね？」

「ひつぐ・・・ぐすつ・・・竜ちゃんは、お姉さんが嘘つきだ  
って思ってるの？」

マッチョマン（運転手さん）に、

（テメー！ この野郎っ！）

と、再び睨めつけられた。

（いや、いまのは仕方ないでしょ？ いくらなんでも・・・）

（んだとごらあー！）

（ごめんなさい。マリンさんの仰るお言葉に間違いなどあるはず  
がありませんでした。どうか愚かで救いようのないわたくしを許し  
てください）

（よし）

アイコンタクト終了。

ちなみに運転は頭文 Dもびつくりのドライビングテクニクだった。

そんなとき、ダッダッダダン！　ダッダッダダン！　チャララ〜！

というどこかで聞き覚えのある音楽が流れてきた。

マリんさんは泣くのを中止して胸を弄り携帯電話を取り出した。

そして笑顔で俺に差し出す。

「どうぞ〜」

どうぞって……。

「もしもし？」

『あー竜也？　言い忘れてたけどアンタ天満南じゃなくて陵聖学園に入学することに決まったみたいだからよろしくね〜！』

「はっ！？　母さん？」

『それにしても、この親孝行者！　アンタは母さんの誇りよっ！』

「母さん？」

『あーそうそう！　後のことは全部マリんさんに任せてあるから

よろしくねー!』

「は?」

『そうだ、マリンさんに代わってくれない?』

「はあ?」

『いいから代われ!』

「わかったよ・・・」

俺は無言でマリンさんに携帯を渡した。

「ええ、はい。任せてください! 竜ちゃんは責任を持って預か  
らせていただきます。はい。わかりました、お伝えしておきます。  
それではよい旅を」

旅?

「竜ちゃんのお母様から伝言です」

そう言つとマリンさんは、おほんと一つ気合を入れて、

「『これから家族で世界一周豪華クルージングツアーに行つてき  
まーす!』だつて!」

俺は家族じゃないのかよ!

なんだか泣きたくなってきた。

## 第二話：美女マリンさん、そして薄情なお母様（後書き）

どうでしたか？

これからどんどんいきまっしょい！

あっ、同時連載している他の作品も良ければご一読を！

感想待ってまゝす！

幕間：その件につきましては・・・（前書き）

人生いろいろですね。

そうだそうだ！

まあ、何が言いたいのかというと・・・。

あつ、すみません。

ということ、本編スタート！

幕間：その件につきましては・・・

もう三日は走っていた。

一日ごとにホテルに泊まりながら車は目的地である陵聖学園へと向かう。

途中でアメリカにある自由の女神像やフランスの一凱旋門 がいせんもんのような建物が見えてしまったが、きっと目の錯覚に違いない。

一度だって船に乗っていないのだから車ごと海外に行くなんてできるわけがない。

何故なら日本は海に囲まれた島国なのだから！

そんなことを考えていると、いつのまにか今日も夕日が沈んでいった。

「マーちゃん、今日もホテルですか？」

「ううん、もうじき到着するよ」

やっとか。ここまでの旅路は長いようで短かったな。

「そういえば聞いてなかったですけど、俺の住む場所ってちゃんとあるんですね？」

「もちろんだよ」

「寮ですか？」

「うーん・・・そうね、寮と言えば寮ね」

「寮じゃないんですか？」

「ううん、寮だよ？でも違うと言われれば違うかな？」

謎かけか？

まあいいや、行けばわかることだし。

「そうだ聞いてよ！」

マリンさんはぷぷぷ、と目尻に涙をためて、笑うのを必死に堪えていた。

「はい？」

「陵聖学園は、魔法の使い方を教えていることで有名でしょ？まあ、一般の人でも軽い魔法くらいなら使えるだろうけど」

「そうですね。あとはすごく設備が充実していて綺麗な学校だつて噂ですね」

「まあそれもそうなんだけど、ぷぷぷ！もっとおもしろくて有名なことがあるんだから！」

おもしろくて有名なこと？

「先生方の中にね、モーガン・フリーン似の先生がいるのよ！　ぷぷぷ！　竜ちゃんも一牛丸普利男　うしまるふりお　先生と会ったら絶対に笑っちゃうんだから」

そんなに似てるのか？

っーか牛丸普利男って・・・

「あつ！　ああつ！　そういうことかつ！」

牛〓モー、丸〓ガン、普〓フ、利〓リ、男〓マン。

繋げてモーガン・フリーンか！

「あはは、おもしろいあだ名の先生ですね！」

しかしマリンさんは首をかしげて、

「あだ名？　はて？　なんのことやら？」

「いや、だから牛丸普利男って名前がおもしろいあだ名だって・・・」

「あだ名じゃなくて本名だよ？」

本名？

そんなおもしろい名前なんてありなの？



親は名前をつけるときになにも思わなかったのか？

モーガン・フリーンに似てなくても牛丸普利男って名前だけでも  
ーガン・フリーンって呼ばれるよ。

絶対。

幕間：その件につきましては・・・（後書き）

・・・。

次の話で・・・とうとうヤツが現れる！！

感想お待ちしております！

第三話・こんにちはファンタジー、こんにちはモーガン・フリーン（前書き）

フリートークのコーナー！

によによ市にお住まいの      さんからの便りです。

えゝ、さつさと本編始めろ？

あ、はい。

では、スタート。

### 第三話：こんにちははファンタジー、こんにちははモーガン・フリーン

辺りはもうすっかり暗くなっていた。

月が夜の闇を照らし出してくれている。

「もうすぐ着きまちゅからね」

そんな赤ちゃん言葉を使いながらマリリンさんはなでなでと俺の頭を撫でまくった。

かなり恥ずかしかった。

「あの、陵聖学園は日本のどこにあるんですか？」

「うふふ」

「えーと・・・」

「うふふ」

なんだこの笑みは？

「さあ到着よ」

そう言ってマリリンさんは車から降りた。

続いて俺も車から降りた（運転手さんに無理矢理降ろされた）。

着いたと言われた場所は閑散としたなにもない丘だった。

普通なら安全のために柵が設けられている場所にも柵がない。

街を一望できる高さだったし、実際に街を一望した。

夜の闇に輝くネオンの光が、人々の生活感を感じさせてくれた。

しかしここがどこなのかわからなかったので感動三割、不安七割だった。

そんな俺の心情を知ってか知らずか、マリんさんはニコニコと笑い、肩をポンと軽く叩いて言った。

「さあ、行きまちようねえ」

「は？」

「お姉さんね、実はもう大変疲れちゃったのです。だから、早く楽になりたいのよ」

言ってマリんさんは俺の手を取り微笑んだ。

「恥ずかしがらずにお姉さんと一緒に行ってくれるよね？」

言って、マリんさんはゆっくりと一歩ずつ歩き出す。

向かう先は安全柵のない切り立った丘の先だ。

「い、行くて・・・まさか・・・違いますよね？」

「うふふ、心配しないでね。怖いのは初めだけだから」

行くてのは、逝くてのことか！

「ちょっと待って！ 考え直そうよ！ 人生長いんだしこれから先にきつといいことがあるよ！」

「うーん・・・竜ちゃんに言ってるの？」

「だから・・・」

「お姉さん疲れたから早く楽になりたいんだけどな」

逝くてたまるかつ！

「いいからちょっとこつち来て！」

「もう。竜ちゃんワガママさんね？ しょうがないな。お願いします」

「へっ？」

いつの間にか俺の背後にはさっきの運転手さんがいた。

（覚悟はよいな？）

（覚悟とはなんの覚悟でしょうか？）

(主をここから叩き落す)

(どんな命乞いをしても駄目ですか?)

(フツ・・・)

「それじゃあお姉さんは先に行ってるからね」

命は大事にー!

「嘘っ!」

本当に逝ってしまった。

思わず腰が抜けてその場にへたり込んだ俺の両脇を運転手さんが、  
がしっ! と、掴んで高らかに持ち上げる。

「へ?」

次いで猛り狂った咆哮を発して俺は投げ飛ばされた。

「おんどりゃー!!!!!!!!!!!!!! 死にさらせー!!!!!!!!!!!!!!」  
「!」

ええーっ! わたくしあなたさまになにか粗相を働いてしまいまし  
たかー!!  
!!!!!!!!!!!!!!

ああ・・・。





こえてきた。

俺は声の主を探そうと辺りを見渡してみたが誰もいなかった。

「なにをしていると聞いている」

おそらく女性であるだろう声の主は抑揚のない声で再度聞いてきた。

「答えないのなら敵とみなして排除する」

排除？

ええーと、この場合の排除というと、あなたを殺しますよってことなのかな？

いや、いくらなんでもまさか……。

「アイスダンス」

驚いた。

ソプラノボイスがそう言った瞬間、俺の周囲を踊り子の衣装を身に纏った五つの人影が現れた。

しかしそれは人ではなかった。

人のように見えるが、身体からは心まで凍て尽くされそんな冷気を放出している。

それらは一体一体が意思を持っているかのように俺を睨みつけた。

「警告だ」

また声が聞こえてきた。

「ここでなにをしていた。答えなければ容赦はしない」

これは魔法なのか？

こんな魔法見たことないぞ！

こんな・・・。

「答えないか・・・」

いまにも殺されそうだったのに俺は魔法で創られた氷の傀儡くぐつ たちにみとれていた。

殺されるかもしれないという恐怖よりも俺の心は美しい芸術を見たときのように感動していた。

「と、藤堂竜也！」

咄嗟に俺は言った。

「・・・・・・・・」

「十五歳で藤堂家の長男！ 家は超貧乏だ！ 家族構成は五人！

両親と妹が二人！ 親父が騙されて借金を作ったおかげでさらに貧乏になった！ あと俺は一切の魔法が使えない！ 以上自己紹介終わり！」

「キミが・・・藤堂竜也くん？」

あれ？ さっきまでと雰囲気が違う？

「ミラージュコートキャンセル」

その声とともに空間がズレた。

いや、少し違うな。

ズレたように見えた。

その空間から現れたのはとんでもない美少女だった。

「初めまして。 陵聖学園二年の柊美紀です」

柊美紀と名乗った女の子が手を差し出してきた。

白く柔らかそうな手を、俺は差し出されるままに握り返した。

黒く艶やかな髪が暗闇の中でもしっかりと映えて見えた。

キラッとした瞳の中にも優しさを感じられる。

そんな瞳の彼女に俺は心奪われた。

ゆっくりと手を握り返す俺に柊さんはにっこりと微笑む。

笑った顔が反則なまでに可愛い。

柊さんはスラリとした体に白いシャツと黒いミニスカートを着ていた。

誰もが羨むスタイルの持ち主だった。

一部を除いてだが。

この人は世の女性が望む全てのものを持っている。

一部を除いてだが。

しかし……。

「おいしい……」

どうしても目がそちらにいつてしまう。

「藤堂くん」

優しく声をかけられ、そして恐怖した。

それはもうさっきの魔法で殺されかかったときとは比べものにならないくらいに恐怖だ。

たとえるなら、買ったばかりのクレヨンが半分以上折れていたとき

のような恐怖だ。

「君の言いたいことは大体わかったわ。でもね、わたしは君の口から直接聞きたいな」

顔は笑っているが目が笑ってない。

言えるわけねーだろ！  
おしいっ！

胸があともう少しだけでも大きければよかったのにね！

それにしても本当に小さいな〜！

これはもう笑うっきゃないね！

あっはっはっはっは！

なんてことをさあ！

「さあ、言つて。ああ、遠慮なくていいよ？ わたし全然気にしてないから」

嘘つけ！ めちゃくちゃ気にしてるじゃねーか！

「アイスダンス」

いきなりさっきの魔法を発動させやがった！

相当気にしているじゃありませんかっ！

しかも、さっきより確実に数が多い。

これはやっぱり答えなければ殺す。

気に入らない答えでも殺す。

そういうことなのでしょうが？

柊さんは満面の笑みで「さあ」と促す。

その笑顔が逆に怖いです！

「その・・・」

「うん」

「あの・・・」

「うん」

駄目だ！

何も思い浮かばねー！

こーろーさーれーるー！

「どうしたの？」

じりじりと迫力のあるプレッシャーを放ちながら近寄りそんなことを言う柊さん。

「どうして逃げるのかな？」

死にたくないからです。

「ふふふ」

もう、だーめーだー！

とりあえずなにか言わないと！

なにか言え俺！

「胸が・・・」

ピクッ！

「胸が控えめで、それで・・・」

ピクピクッ！

「ふ、ふーん。それで？」

まだなにか俺に言えと？

既にあなたの中で俺は死刑確定でしょうに！

そんな俺にまだ罪を犯せと？

「そんな・・・」

「うん」

なにか違うことを言え！

胸のことを忘れさせるインパクトのあることを言え！

「そんな・・・」

「うん」

「そんなあなたが好きだー！」

「うん・・・えっ！？」

いまだ！

なんでもいいからこのままたたみかける！

「一目見て惚れた！ この世にこんな綺麗な女性がいたなんて知らなかった！ さっきまでは俺の中の世界ー美しい女性ランキングー位はぶっちぎりでマリンさんという女の人だったけど、柊さんはそれを遥かに上回る美しさだ！ それに可愛い！ 俺にとって胸の大ききさなんて関係ない！ むしろ柊さんの控えめな胸が俺の好みだ！」

だから許して殺さないで！



「あ．．．う．．．」

柊さんがなにか言っているが怖くて直視できない。

「ね、ねえ．．．」

「はい！」

「いまのは．．．こ、こ．．．」

うん？

どうも様子がおかしいな？

俺は勇気を振り絞ってチラッと柊さんを見た。

辺りはさつきよりも暗くなっていた。

しかし、それでもはつきりとわかるくらい、柊さんは顔を真っ赤に染めていた。

「告白なの？」

「こ、告白！？」

「違うの？」

そうだと言え！

違うと言えば確実に殺されそうな雰囲気だ！

「そ、そうです！ 俺の人生で初めての、そして恐らく最後になるであろう一世一代の告白です！」

「そ、そつか。私・・・告白されちゃったんだ」

うーん？

この乙女っばさは一体なんなんだ？

さっきまでとまるで違う。

そんなとき、

「あゝ、見つけたゝ！」

マリンさんののほほんとした声が聞こえてきた。

「竜ちゃんごめんねゝ！ やっぱりいっしょに行ったほうがよかったかなゝ？」

助かった！

「あれゝ？ みーちゃんもいっしょだったんだゝ！」

「・・・はい」

柊さんの顔はまだ真っ赤だった。

「どしたの〜?」

「いえ、なんでもありません」

そうは言っても真っ赤な顔の柊さんは俺と目が合うとすぐに顔を逸らしてしまうという大変な挙動不審ぶり。

絶対にどうかしたのだと態度が物語っている。

「本当にどうしたの〜? みーちゃん、お姉さんに話してみなさい!」

柊さんはマリンさんに全幅の信頼を寄せているのか、可愛らしくコクンと頷くとそっと耳元でなにかを話し出した。

たびたび俺をちらちら見ながらマリンさんはふんふんと頷いていた。

「も〜! みーちゃんは可愛いな〜!」

柊さんをおもいつきりハグするマリンさん。

羨ましい。

「きゃっ! ちょっと先生・・・」

「素直にいまの自分の気持ちを竜ちゃんに伝えなきゃ!」

と、文字通り背中を後押しされる柊さん。

「あの・・・」

胸の前で手をもじもじとさせながら、柊さんはご主人様におねだりをする子犬のように愛らしい瞳で俺を見る。

「私は、その・・・こ、告白なんてされたの初めてで、どう答えていいのかわからないし・・・」

それに、私たちはいま知り合ったばかりだから・・・」

あー、これはお友達から始めましょうパターンですな。

お友達から始めましょう。

ごめんなさい。あなたとはそういった関係になれないわ。

っーかさあ、あんたあたしの胸が控えめだって言っただわよね？

俺、天に召される。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

いやだー！！ 死にたくねーよ！

死にたくないという思いからとっさに出た言い訳が、俺の死亡ルートを確定させていたわけで。

「だから・・・」

だから・・・ね？

ここらで命の一つでも置いてってもらおうか！

やはり天に召される俺。

あゝ！ どうなろうとも俺の死は免れないってことか！？

「だからね！」

「はいー！」

殺さないで、殺さないで、殺さないで！

すみません！ すみません！ すみません！

「だから・・・これから付き合っていくなかで、私のことを知ってほしいの」

「ふえっ！？」

「私、付き合ったことなんて一度もないから自信がないんだけど、君が自慢できるような可愛い恋人になれるよう頑張るね！」

「え？ え？ ちょっと、えっ！？ いまのつて、もしかして・・・」

「んもっつ！ 告白の返事に決まってるじゃない！」

マリンさんに怒られた。

いや！

それよりもだ！

俺に！

この俺に！

可愛くて綺麗で美少女な彼女ができてしまった！

こゝこれはさすがに想定外だぞ???

「あの・・・藤堂くん」

「はい！」

「君のこと、これからは名前で呼んでもいいかな？」

柊さんはおずおずと上目遣いで言ってきた。

くうく！ 可愛すぎる！

「もちろんです！」

「竜也くん・・・」

「柊さん・・・」

見つめあう二人。

そんな二人を見つめるマリン。

ドキドキ、ドキドキ。

竜也と美紀の距離はお互いの息がかかるくらいに近づく。

そんなとき、

「おーい！ マリン先生！」

男の渋い声が聞こえてきた。

男は何故か息を切らしていた。

そして男は何故かモーガン・フリーンに似ていた。

「マリン先生、藤堂くんは見つかりましたか！？」

「あゝ！ 牛丸先生！ はい！ そこに！」

と、マリンさんが指差す先にいるのは、第三者の視点から見れば抱き合っているように見えなくもない俺と柊さんだ。

「つかこの人が牛丸普利男先生ですか！？」

似てるところじゃねーよ！

むしろ本物だろ!?

「これは・・・どういうことでしょうか?」

困惑するモーガン・フリーン。

「あのですね、実は・・・」

モーガン・フリーンの耳元でニツコリ顔のマリンさんが「ごによ」と楽しそうになにかを話している。

「ふむふむ。ほほう。おおっ! なんと! そんなことまで!?!」

そんなことってどんなこと!?

俺の心情そっちのけで楽しそうなモーガン・フリーンとマリンさん。

「竜ちゃんってすごいでしょ!」

モーガン・フリーンに俺をアピールするマリンさん。

なんだか自分のことのようにうれしそうだ。

「そ、そうですね」

と、何故か赤くなった頬に両手を添えてくねくねするモーガン・フリーン。



どうして頬を赤らめていらっしやるのですか!?

「竜也くん!」

喜色満面のモーガン・フリーンが近づいてくる。

「君はすごいな!」

なにがすごいのでしょうか?

と、思っているところをモーガン・フリーンが不意打ち気味に肩を叩いてきた。

「いやゝ、しかし柊さんを射止めるなんて、さすがはマリン先生が見込んだだけのことはある! 将来は世界を代表する魔法使いになるかもしれないねっ!」

「わたしもそう思います理事長先生!」

理事長?

誰が?

もしかしてこの人が?

あのハリウッドの名優モーガン・フリーンじゃなくて?

「あの・・・」

この人たちはなにかとんでもない勘違いをしていらっしやるので

は？

「竜也くん？」

「どうかしたかね？」

柊さんとモーガン・フリーンが二人同時に同じように首をかしげた。

「もしかしてですが、お二人とも俺のことを知らないんですか？」

「竜也くんのこと？」

「柊くんの恋人だろ？」

「り、理事長先生っ！」

「わっはっは！」

もしかしくなくても俺のことをご存知ない？

「あの、すごく言いにくいことなんですが・・・」

「なーに？」

柊さんのキリッとした意志の強い瞳が、デレデレに緩みきっている。

「俺、魔法なんて使えません」

「はっはっはっ！ なにを言い出すのかと思えば。いいかい  
竜也くん、謙遜するにしてもそれは言いすぎだよ」

と、再び肩をバンバン叩かれた。

「いえ、謙遜とかじゃなくて事実です」

俺の言葉に、モーガン・フリーンは肩を叩く手を止めて、いままで楽しそうに傍観していたマリンさんへ振り返った。

「マ、マリン先生。彼は一体なにを言っているんですか？」

「うーん」

と、考える仕草を見せたマリンさんは笑顔で答えた。

「あゝ、そういえばまだ言ってますでしたねゝ！　そうですねゝ、竜ちゃんは魔法が使えるいですよゝ！」

二人ともびっくり仰天なご様子。

「一つも使えないのですか？」

「はいゝ、魔法は一切使えませんゝ！　魔法に関してはもう無能もいいところですゝ」

そ、そこまで言わなくても。

わかってたことだけど改めて言われると無性に悲しい。

「ふ、ふざけないでっ！」

鼓膜が破れるかと思うほどの大声で抗議されてしまった。

裁判沙汰はご遠慮したい。

「この世界で魔法が使えないなんてそんなことあるはずないじゃないっ！ それに……」

「いや、本当に使えないんですよ」

「竜也くん、使えないといっても基礎魔法くらいはできるんだろっ？」

「基礎魔法ってなんですか？」

「なにつて……本当になにも使えないのかね？」

「だからさつきからそう言ってるじゃないですか」

「なんてことだ……」

頭を抱えて嘆くモーガン・フリーン。

ここだけ見たらまるで映画のワンシーンだ。

「マリン先生……」

「はいっ？」

この人はいつでもどこでものほほんとしているな。

「残念だが・・・竜也くんの入学を認めるわけにはいかないよ」

はあ！？

ちよつと待ってくれよ！！

それじゃあ俺はどうすればいいんだよ！！

本来入学するはずだった学校の校長直々に入学を拒否されて、拳句の果てにはこんなところまで拉致されてきて！

しかも家に帰ろうにも道はわからないし、仮に帰れたとしてもいま家には誰もいない。

今頃みんな楽しく世界一周豪華クルージングツアーの真っ最中だ！

「そうですか」

「すみません。竜也くんも本当にすまない。君の獲得権に支払ったお金はせめてもの謝罪金だと思って受け取ってほしい」

あの額を？

それはそれでなんというか・・・。

あれだけあれば一生遊んで暮らせるな！。

でも、その対価が青春の学生時代か。

いやしかし！ 来年受験しなおせばまだ俺の青春は終わっていないのでは？

そうだよ！

そうすりゃお金も貰えて青春も謳歌できるじゃないか！

いやっほーい！！

「わかりました！ そうですよ！ 魔法が使えないのに魔法を専門的に勉強する陵聖学園に入学できるはずないですよ！ あはは！ 仕方がないな！ 残念だけどスッパリ諦めます！」

心の中でモーガン・フリーンに敬礼をする俺。

「なによ・・・」

「えっ？」

かすれた声に振り返ると、柊さんが悔しそうな表情で俺を睨んでいた。

瞳には光るなにかが溜まっている。

涙・・・。

「魔法が使えないのに私に告白だなんて・・・。そうよ、コレは気の迷いだっただよ。ふんっ、勝手にすればいいわ。あなたは私よ

りお金を選んだんですものねっ！」

なにも言い返せなかった。

確かに、柊さんの言った通り俺は柊さんよりお金を選んだことになる。

だけど俺にとって、いや誰にとってもお金は大切なものだ。

それに俺はどんな人間よりもお金の大切さをわかっているつもりだ。

でも・・・悪いのは確実に俺だよな。

「あの・・・」

「マリン先生の推薦入学だからって変に期待した私が馬鹿だったわっ！ 所詮この『氷の女王』柊美紀にふさわしい相手ではなかったってことねっ！」

氷の女王？

「ふん・・・私ときめきを返してよ。本当に好きになりそうだったのに」

「い、いまなんて・・・」

「な、なんでもないっ！」

「でも・・・」

「もういいわ。この世界にはあなたなんかよりも私の恋人にふさわしい相手が山のようにいるでしょうから！」

それはそうだろう。

俺と柊さんではまったく釣り合わないからな。

まあ、主に俺のせいだけど。

「さよなら」

そう言つと柊さんは踵を返して帰っていった。

「彼女にも辛い思いをさせてしまったな」

はあ。

俺はなんてことをしてしまったんだ。

自分で自分が許せない。

お金に目がくらんで柊さんを泣かせてしまつたなんて・・・。

「さあ、家まで送っていこう」

家までつてかなり距離があると思つのですが？

「その必要はありません」



「マリン先生？」

「竜ちゃんは私が送っていきます」

いつもの雰囲気と違うマリンさん。

いまのマリンさんはなんだか少し怖い。

「マリン先生がですか？　しかし、溜まっている仕事があると言  
ってらしたじゃありませんか」

「ええ、でももういいんです」

「もういい？」

「はい。私も竜ちゃんと一緒にこの学園を去りますから」

「は？」

「たしか・・・イギリスのホリックが私と竜ちゃんを欲しがって  
いましたからそちらに向かうことにします」

「マ、マリン先生？」

なんだ？　どういうことだ？

「理事長先生、一年間お世話になりました。では・・・」

綺麗なお辞儀をするマリンさん。

日本人より日本人なマリンさん。

「待ってください！」

「なにか？」

「どうしてですか！？」

「どうしてですって？ どうしてもなににも竜ちゃんのいないこの学園にいても意味はありませんもの」

モーガン・フリーンの表情が凍りついた。

口を金魚のようにパクパクと開け閉めしている。

「理事長・・・いえ、牛丸普利男さん」

底冷えのする声で言い、不敵な笑みを浮かべるマリンさん。

あなた完全な悪役ですよ。

「言っておきますが、竜ちゃんはこの私が敵わないすごい子ですよ？」

「私がって・・・すごい自信ですね。マリンさ・・・じゃなかった、マーちゃんってそんなにすごい魔法使いだったんですか？」

「まあねー！ どう？ お姉さんってばすごい？」

あれ？いつものマリンさんだ。

いつの間に？

「へー、マーちゃんって若いのにすごいんですね」

「キヤー！お姉さん照れちゃうー！もうー！竜ちゃんはおだて上手ね！」

でも実際すごいことだよな。

マリンさんが学園を辞めるっただけでモーガン・フリーンがこんなに焦っているんだから。

「お姉さんってそんなに若く見える？」

あつ、そっちに照れてたのね。

「いくつくらいに見える？」

「えーと、そうですね。二十・・・」

「うんうん！-！」

「二十五、六歳かな？」

「・・・・・・・・」

しまった！実年齢よりも上だったか！？

「き・・・」

「き？」

「キヤー！　うれしいっ！！　ホントに！？　本当にそう見える  
！？」

「う、うん」

「もうやだー！」

そういう割にはうれしそうですね。

「違いましたか？」

「違うよー！　そんなに若くないよー！」

「じゃあ、何歳なんですか？」

ウフフ。

ニヤニヤ。

アハハ。

幸せそうな顔のマリンさんは俺の顔の前で人差し指を立てて、

「いい？」　女の子に年齢を聞くのは駄目よ？」

と、はぐらかされてしまった。

「そうなんですか？」

「そうなの」

プンプン！ という効果音が聞こえてきそうだ。

「わかりました！」

とはモーガン・フリーン。

「竜也くんを我が学園で受け入れます」

「本当ですか？」

「ええ！ ですから学園を去るだなんて言わないでください！」

必死に懇願するモーガン・フリーン。

「あれ？ ねえ竜ちゃん。お姉さんそんなこと言ったかな？」

ええ、言いましたとも。

「きつと理事長先生の聞き間違いですよ」

「そ、そうですか・・・」

「でも」

「はい？」

「今後、竜ちゃんが学園を追われるようなことがあったら、そのときは・・・わかっていますよね？」

「は、はい・・・」

かわいそうなモーガン・フリーン。

心底同情するよ。

「と、とりあえず竜也くん。君が住むことになる学生寮へ案内するよ」

寮か。

そういえば、車の中でマリンさんが気になることを言ってたよう  
な・・・。

「あゝ、理事長先生！ 竜ちゃんは、私の寮でお世話します  
からいいですよー！」

「マリン先生の？ しかしあそこは女子寮じゃないですか。女子  
寮に男の子を住まわせると  
いうのは・・・」

女子寮だって？

女子寮・・・そこは男にとって禁断の楽園。

可憐な乙女たちの園！

「はぁ・・・そうですか。理事長先生は竜ちゃんをここから追出す・・・と?」

味方ながら卑怯なマリンさん。

「い、いえ・・・そうですね・竜也くんはマリン先生のところでお世話になりなさい」

もうなんでもありなマリンさん。

「それに、そのほうがみーちゃんも喜ぶでしょう?」

それはないと思いますよ。

それどころか視界にさえ入れてもらえないと思うのは俺だけだろうか。

第三話・こんにちははファンタジー、こんにちははモーガン・フリーン（後書き）

ですね。

え？ 何が？

感想お待ちしてまゝす！



第四話：さようなら青春。主に恋愛方面で。（前書き）

正直、分からないことがあります。

この悩み・・・どうすれば・・・。

あつ、すいません。

では、本編スタート！

#### 第四話：さようなら青春。主に恋愛方面で。

マリンさんに案内されて連れてこられた女子寮は寮ではなかった。

ブルジョワ気分が味わえる超高級三十階建てホテルだった。

ただ、通常の高級ホテルと違うのは受付の人間がいなかった。

ちょうど降りてきたエレベーターに乗り、そして俺は我が目を疑ってしまった。

エレベーターの中は俺の家のリビングより広かった。

俺の家のリビング。

つまりは六畳以上だ！

無駄に大きいな。

それに大きいだけでなく、きらびやかで細部の造りもかなり凝られている。

一体このエレベーターだけでいくらくらいかかってるんだ？

「竜ちゃん」

「はい・・・」

金持ちと自分の家の懐の差を見せ付けられて沈んでいた俺に、マ

リンさんがさらなる追い討ちをかけてきた。

「竜ちゃんのお部屋は、お姉さんとみーちゃんのお部屋の間にしておいたから心配しないでねー！ これでさびしくないよねー！」

ぐっ！ と、親指を立ててみせるマリンさん。

ええい！ 余計なことを！

と、いうわけで俺の部屋は勝手に決められてしまった。

うう、かなり気まずい。

「竜ちゃん！ お隣さんに挨拶、挨拶ー！」

最上階に着いた途端、マリンさんは元氣一杯にそう言う。

「でも、ほら、さっきあんなことがあったばかりだし、少し時間を置いたほうが・・・」

「いいから行くのー！ それに早く謝んなきゃいけないでしょー？」

「それは・・・まあ・・・」

「そうでしょう？ それじゃあいいよねー？」

コンコン。

「みーちゃん！」

今はただアナタのその無邪気な笑顔が恨めしい。

「・・・・・・・・」

返事がない。

やはり相当怒っておいでだ。

「みーちゃん？」

「開いてます・・・」

「入るよ？」

「どうぞ・・・」

「おいで、竜ちゃん」

と、手招きしてくれるマリンさん。

「お邪魔します・・・」

マリンさんに促され入った柊さんの部屋。

女の子の部屋なんて初めて入ったよ。

すごく緊張してきました。

「うわぁー」

部屋に入った俺の目に映ったのは所狭しと並ぶたくさんのぬいぐるみたちだった。

うーむ、柊さんの部屋は小さな女の子たちにとっては宝の山なのではないだろうか？

ぬいぐるみたちは、ソファーに、テーブルに、机にベットに、テラスにと仲良く座っていた。

その光景は男の俺から見ても、それはそれは可愛らしかった。

柊さんと最初に出会ったときの印象はもっとキツそうだったけど、これは・・・なかなかどうして。

柊コレクションのぬいぐるみたちは数も多ければ種類も豊富で、イヌ、ネコ、クマ、ブタ、サル、キリン、イルカ、ニワトリ、パンダ、ウシ、モーガン・フリーン・・・ってモーガン・フリーン！？

「あれ〜？ どうして理事長先生がいるんですか〜？」

そもそも陵聖学園は国立なのにこの人が何故理事長と呼ばれているのかわからん。

「いやー、柊くんにいままでの話を聞いてもらっていたところなんです。それに・・・柊くん  
のことが気になってしまっただけね」

「そうですか〜。ありがとうございます。理事長先生」

「いえ、お礼なんてよしてください」

「優しいんですね」

「ははは、彼女は我が学園の可愛い生徒ですからね！ 竜也くん、もちろん君もだよ」

やはりここだけ見れば映画のワンシーンだ。

さすがはモーガン・フリーン。

「藤堂くん」

体育座りをしながら枕を抱いている柊さんにじろりと睨まれた。

呼び方が藤堂くんに戻っていたのはわかっていただけで、やっぱりちよつとシヨックだった。

まあ、無視されるよりよかったと思わないといけないな。

ああ・・・短すぎた青春。

涙で前が見えない。

「君のことはいま理事長先生から聞いてわかったし、私もマリン先生が学園からいなくなるなんて嫌だから、その・・・しょうがないけど、ここにすることは認めてあげる」

「あ・・・ありがとうございます!」

「でも、君のことを許したわけじゃないから！　だから・・・」

そうだよな。

柊さんはなんだかすごい魔法使いみたいだし、魔法が使えない俺みたいな落ちこぼれなんて付き合えるわけないよな。

わかつてはいましたよ・・・。

はあ・・・。

恋人と呼ぶにはおこがましすぎる時間だったけど、それでも一応は付き合っていたわけだし、別れ話は男の俺から切り出すしかないよな。

「わかつてます」

「え？　そ、そう？　わかつてくれるのなら・・・いいんだけど」

「はい。あの・・・本当にすいませんでした！」

「い、いいよ！　わかつてくれたなら・・・」

「いえ、でも・・・やっぱり柊さんの言う通りだと思います」

「え？」

「俺みたいな魔法も使えなければ何のとりえもない落ちこぼれ野

郎が柊さんの彼氏だなんて・・・」

「え？ いや、ちが・・・」

「柊さんの言う通り、俺よりいい男なんてそれこそ山ほどいます！ 絶対です！ 俺と柊さんじゃ完璧に釣り合いません！ あっ、釣り合わないのは俺が劣っているからで柊さんには何の落ち度もありません！ 俺が保証しますから！ でも俺の保証じゃ信頼できるかな？ あはは・・・」

「もういいっ」

俺の顔面めがけて放たれた枕が音速の壁を突き破った。

回避するという選択肢が脳に浮かぶ前に枕が顔面にクリーンヒット。

「何もわかってないじゃない！ もういいわよ！ 出て行って！」

なにを怒っているのかわからない。

しかし、マリンさんとモーガン・フリーンは理由がわかるのか、

「あっちゃー」

と、声を見事にシンクロさせて呆れていた。

「竜ちゃんのバカ」

マリンさんの罵倒する声が切なく聞こえた。



「あのねー竜ちゃん」

「はい」

「竜ちゃん、全然女の子のことわかってないよー」

だって、男の子だもん。

「はあー、かわいそうなみーちゃん」

しくしくと声を出して泣く真似までしだす始末。

柊さんに追い出された俺は、マリンさんに引きずられるようにして自分の部屋へと連れてこられた。

ここは俺がこれから三年間を過ごすことになる部屋。

調度品などが既にセッティングされており、あとはこの部屋をどう自分色に染めるかだ。

そんな希望に満ちた素晴らしい部屋で、幸先悪いことに俺はマリンさん発、俺行きの愛の説教を受けていた。

「でもー、過ぎたことは仕方がないよねー」

「はい・・・」

「そこでー、竜ちゃんにはこれからー、入学式までの間にやって

もらいたいことがあります！　これは修行だから、ぜったいに気を抜いてやらないように！　いい？」

主にアナタのせいで確実に気が抜けてしまいそうです。

「修行・・・ですか？」

「そうよ、修行よ」

「どんなことするんですか？　言っておきますけど魔法なんて一切使えませんよ？」

「そんなことわかってるよ！　竜ちゃんは、魔法に関しては死んで？　って感じかな？　うーん、違うな、お前なんて生きている価値がないんだからさっさとこの世から存在を消してくれ！　って感じ？　うーん、やっぱり違うな」

「マーちゃん」

「どうしたの？」

「俺が悪かったです。ですからそれ以上は許してください！　お願いします！」

「えーと、お姉さん竜ちゃんがどうして謝っているのかわからないな」

「どうか平に！　平にご容赦を！」

「よくわからないけど、お話を先に進めてもいいのね？」

「はい！」

マリンさんの意外な毒舌ぶりに俺の些細なプライドが木っ端微塵に砕け散った。

「それじゃあ続けるけど」

「はい」

「入学式までの間、この部屋から一步も外に出ないでね」

「は？」

「食事は毎日三食きっちりとお姉さんが届けてあげるからね」

待てよ！

待て待て待て！

一步も外に出るなだつて！？

そんなの嫌じゃ！

無理だつて！

「無理ですよ！ 無理無理っ！ そんなの・・・」

「もう、話は最後まで聞きなさい！ なにもするなどは言っていないでしょ？ 部屋の中であることを考えてほしいの！」

「あることってなんですか？」

そう言った俺にマリンさんは、

「はいっ！」

と、まるでアイドルの営業スマイルのような笑顔で一枚の白い紙を差し出した。

「読んでみて〜」

言われた通りに渡されたものに目を通す俺。

問一。

竜ちゃんが好きな食べ物は何？

問二。

竜ちゃんの好きな女の子のタイプは何？

問三。

竜ちゃんの好きな音楽は何？

問四。

竜ちゃんの好きな映画は何？

問五。

竜ちゃんはいままで誰かとお付き合いしたことがあるのかな？

「なんですかコレは？」

「なにつてそれが竜ちゃんの修行だよ！」

コレが修行？

「いや、でも、これは……」

「そんなに変なこと書いてある？」

そう言つとマリンさんは紙を覗き込み、そして奪い取つた。

「あはは〜！ これは違うの〜！ 気にしないでね〜！ 本当はこつち〜」

気にしないでねって……気になります。

「過去のことは忘れて〜、早く読んで〜」

いまのやり取りはマリンさんの中では既に過去の記憶のようだ。

素晴らしく自分に都合のいい脳みそ様だ。

まあ、他にも言いたいことはいろいろあつたが、キリがないので言われた通り取り替えられた紙に目を通す俺。

問一。

好きな武器は？

問二。

好きな動物は？

問三。

好きな空想上の生き物は？

問四。

これが最後の質問です。

『は？

なんだコレ？

「あの・・・」

「あつ、いますぐ答えなくていいよ！ それは本当に大事なことだから！ 入学式まではまだ時間があるからゆっくり考えてね！ それで、それぞれの質問で一番好きなものを頭の中で常にイメージしてちょうだいね」

「まあ・・・マーちゃんがそう言うならそうしますけど、この四つ目の質問はなにも書かれてないんですけどどうしたらいいんです

か？」

「いいえ、書かれていないんじゃないかと、竜ちゃんが読めないだけなの」

あつ、シリアスモードのマリンさんだ。

「頑張つて最後の質問を読めるようになってね！」

あつ、いつものほんマリンさんだ。

「それじゃあーねー！ 修行はもう始まつてるぞー！」

ボタン。

と、騒々しく出て行ったマリンさん。

「・・・・・・・・」

ふう……。

この質問にどんな意味があるんだ？ この質問のどこが修行？

「つて！ ちょっと待て！ 結局入学式まで俺は外に出れないんじゃないか！ ちくしょ

う！ はーかーらーれーたー！」

**第四話：さようなら青春。主に恋愛方面で。（後書き）**

あの、PVやら、ユニークといったものの見方が良くわかりません。

パソコンに強いというわけではない筆者ですので……。

うゝん……。

おっと失礼しました。

感想お待ちしてまゝす！



幕間：もやもやしてますが何か？（前書き）

えーと、現在めちゃくちゃ遊んでるゲームがあります。

もう本当に面白い！

あつ、すいません。

本編スタート！

幕間：もやもやしてますが何か？

「最低・・・」

どうして少しの間とはいえ藤堂くんのことを好きになっちゃたんだろ？

あんなに熱烈な告白をされたから？

ううん、違うな。

どんなに熱烈でも嫌なら断るもの。

顔だって・・・まあ、悪くはなかったな。

見方によっては綺麗に整った顔だったし。

目だけはハイエナみたいに鋭かったけど。

背は私より低かったな。

でも、そこがよかったのかな？

あっ！ あと髪はボサボサだったな。

ふふっ、なんだか寝起きみたいな髪型。

思い出したら笑えてきちゃった。

それも可愛かったな。

理事長先生が言うには藤堂くんの家はすごく貧しい家庭だって聞いたけど、それでなのかな？

それだったらあのことも仕方がないのかな？

「はあ・・・なに考えてるんだろ。これじゃあ私が振られたみたいじゃない。もう忘れよう」

どうせ終わったことだもの。

寮内でも極力会わないようにしよう。

でも・・・最初に失礼なことを言ったのは私だし。

あのことは・・・もしかしたら、うつん。

もしかしなくても悪気はなかったみたいだし。

もう少し、歩み寄ってみようかな？

そうね、私のほうが年上なんだし大人にならなきゃね。

それに・・・藤堂くんはマリン先生があんなに気に入ってる男の子なんだから、悪い子じゃないのかも。

やっぱり私にも悪い所があったってことだよね？

ああ、なんだか眠くなってきた。

いろいろな考えたいことはあるけど全部、明日・・・考え・・・よ  
う・・・かな・・・？

**幕間：もやもやしてますが何か？（後書き）**

別にゲームをやっているせいで、今回のお話の内容がいつもより薄くなっただけじゃないですよ？

こういう仕様です。

ホントですよ？

感想お待ちしてます！

## 第五話：エビフライはやっぱりタルタルソース（前書き）

こ、これは！

このコクと良い、旨味といい、申し分ない！  
素材の味を充分に引き立て・・・etc

サブタイトルを見て、料理小説と勘違いしてしまった方がいらした  
らすいません。

まったく料理とは関係ない、お話です。まあ、ね・・・。  
あつ、本編スタート！

## 第五話：エビフライはやっぱりタルタルソース

修行開始初日の夕方。

「ふふっ、夕日が目に染みるぜ」

コンコン。

誰かがドアをノックしている。

誰だ？

思い浮かぶのはマリンさんかモーガン・フリーンだ。

柊さんは昨日の今日でありえない。

「いま開けますから」

「あつ！ 開けちゃ駄目〜！ そのまま〜！」

こののほほんとした声はマリンさんか。

「どうしたんですか？」

「あのね〜、言い忘れてたんだけど、入学式までの間〜、竜ちゃんか外に出ることはもちろん駄目だけど、ドアを開けたり、誰かを部屋に入れたりしても駄目だよ〜？」

「駄目なんですか？」

「ぜっつたいに駄目〜！」

「どうして?」

「どうしても! い〜い? わかつた〜?」

「はあ・・・わかりましたよ。誰も入れなきゃいいんでしょう?」

「それだけじゃ駄目〜!」

「わかってますって。ドアも開けませんから」

「うん! 竜ちゃんはいいい子ね〜!」

ドア越しの会話ってのは変な気分だ。

相手がどんな顔をしてるかわからないのはちょっと不安だ。

「それじゃあね〜!」

言って、マリンさんは去って言った。

もう少し話し相手になってほしかった。

ゴーン、ゴーン。

備え付けてある時計が十八時を知らせてくれた。



「もうこんな時間か。そろそろかな？」

コトッ。

思ったとおりだった。

テーブルの上には本日の夕食が届けられていた。

これはマリンさんが魔法で届けてくれているらしい。

いやー、それにしても昨日は驚いた。

マリンさんから渡された紙に書いてある質問について考えていたところに、いきなりトレーに乗ったカレーが現れたんだもんな。

まあ、おいしかったからいいけど。

さて、今日のご飯はなにかな？

おおっ！　なんてことだ！

今日の晩飯はご馳走だ！

エビフライだと！？

しかもエビフライ本体にタルタルソースが惜しげもなくふんだんにかけられている！

ソース派や醤油派の方々には申し訳ないが、俺はタルタルソース派なので、感動にむせび泣きそうだ！

今日は誰かの誕生日なのか？

それともなにかめでたいことでもあったのか？

手を合わせて合掌。

まずはおいしく料理された海老に感謝の気持ちを。

次に料理してくださった人に感謝を。

最後は神様に感謝を。

別に信仰してる宗教があるわけじゃないけどなんとなくだ。

「さて、食べるとしますか！　いただきまー・・・」

コンコン。

無視無視。

せっかく俺に食べられるために料理された海老を前に席を立つなんて俺にはできない。

コンコン。

無視無視。

「あの、藤堂くん」

ひ、柊さん！？

昨日のことで収まりかけていた怒りが今日一日で爆発し、俺の息の根を止めにきた・・・と？

「すみません！　少し寝てました！」

俺は咄嗟に嘘をついてしまった。

「えっ？　あつ、ごめん。起こしちゃった？」

「いえ、滅相もございません！」

「そう・・・」

「柊さん？」

「あのさ、これからなにか予定ある？」

「いまから晩飯を食べるところです」

「そ、そうなんだ！　ちょうど私もいまからお夕飯にしようと思つてたの！　よかったら一緒に食べない？」

「一緒に？」

「食べに行こうってことか？」

「それとも俺の部屋で食うってことか？」

いや、俺の部屋ってことはないな。

でも、どっちにしてもドアを開けなくてはいけないじゃないか！

ここは非常に残念だが断るしかない！

「すみません」

「そ、そつか……。ねえ」

「なんですか？」

「中に入ってもいいかな？」

無理です！

「すみません。今日はちょっと……」

「そ、そう……。それじゃあ明日は？」

「明日もちょっと……」

「いつならいいの？」

「入学式っていつですか？」

「入学式？ 四月五日だけど？」

「じゃあその日まで無理です」

ピキッ。

なにかが崩壊した音が聞こえた。

「私と一緒にいるのが嫌ならはつきりそう言えればいいじゃない！」

「違うんです！　一緒にいたくないなんて、そんなわけないじゃないですか！」

「もういい！　私が馬鹿だった！　藤堂くんとはこれっきりね！  
別れましょう！」

別れるもなにも既に昨日で全て終わってたじゃないですか。

「わかりました……」

「さよならっ！」

不幸な俺。

多分俺は不幸な星の下に生まれたのだろう。

こんな幻想はどこかの誰かさんにぶっ壊して欲しい。

いやマジで。

「まあ、しょうがねーな」

こうなったら気持ちを切り替えてマリンさんに言いつけられた修

行に専念しよう！

っーかそれしかない。

軟禁状態な俺。

囚われのお姫様な俺。

籠の中の鳥な俺。

いまの俺にぴったり当てはまる言葉が次々と脳裏に浮かぶ。

はぁ・・・。

「問一の答えは出てる」

問一。

好きな武器は？

答え。

弓。

この前、桜子と見たファンタジー映画でエルフが弓を使っていてかっこよかったからだ。

もちろん映画は桜子のおごりだ。

俺に、というか我が家に映画を見に行くだけの大金はない。

「問二はなんとかかなりそうだけど、三は思い浮かばねー」

問二。

好きな動物は？

「好きな動物か・・・」

そっぴや桜子の家で飼ってた猫は可愛かったな。

「猫かな？」

あのキューティーな存在を思い出し、俺の深く傷ついた心が癒されていく。

「問題は三と、四だな」

問三。

好きな空想上の生き物は？

「そんなこと聞かれてもなー」

好きもなにも俺が知ってるのはドラゴンとペガサスぐらいだし・・・。

マリンさんには一番好きなものって言われたけど、正直どっちもどっちだからなー。

「ドラゴンはかっこいいと思うし、ペガサスは綺麗だもんな」

ズシン！！

ヒヒーン！！

「えっ？」

いま、なにかとてつもなく大きな音が聞こえたような。

そう、たしか・・・でかい何かの歩く音と馬の鳴き声みたいなものが・・・。

まあ気のせいだろう。

「問四は質問自体がわからないんだから、考えることなんてできないッス」

よし、ちょっとここらで一度まとめてみようか。

「俺の一番好きな武器は弓で、一番好きな動物は猫。そして、一番好きな空想上の生き物はドラゴンとペガサス。こんな感じでいいんだよね？ 問三は答えが二つになったけどいいよね？ あとはこれらを常に頭の中で想像しておく・・・っ」と

一時間くらい経った。

「もういいかな？」

そっぴや、腹減ったな！。



「あつ！　いろいろあつて俺まだ飯食ってねーよ！」

「ごめんなさい海老さん！」

「もういいや。今日は飯食って寝よう」

この日、俺は言葉通り夕食を食べてすぐに寝た。

余談だが、エビフライはとくに冷めていた。

その日の夢にエビフライになる前の海老が大量に押し寄せ、呪詛のように「早く食べろ」と、俺に訴えかけてくるという悪夢を見た。

## 第五話・エビフライはやっぱりタルタルソース（後書き）

ところで、私自身。エビフライにはタルタルソース派です。

感想待ってまゝす！

## 第六話：素敵な朝の断末魔（前書き）

最近、朝に寝ることが多い筆者。

もしかして駄目人間か？

あつ、本編スタート！

## 第六話：素敵な朝の断末魔

チチチツ。

小鳥のさえずりが聞こえてきた。

「うーん！」

俺は大きく背を伸ばした。

チュンチュン。

窓に寄り添う小鳥が可愛らしく小首をかしげた。

「おはよう小鳥さん。今日はいいい天気だな！ やっぱりこういう大事な日は今日みたいにいいい天気に限るな！」

今日は俺の軟禁生活が解かれる記念すべき日。

そう、今日は陵聖学園入学式なのだ！

今日までの日々はとても長く辛い日々だった！

来る日も来る日もマリンさんに言いつけられた修行を頭の中でイメージするだけの日々……。

「うう……辛かった。辛かったよお！」

マリンさんはドアを開けるな、誰も入れるな。と、告げにきて以

来面会にきてくれないし、柊さんは・・・問題外だし。

モーガン・フリーンだけはたまに話し相手になってくれたけど忙しいのか、来てもすぐに帰るし。

「だが、そんな惨めな日々とも今日でお別れだ！ 今日から俺は新しい人生の一步を踏み出すんだ！ この一步は人類にとっては小さな一步でも俺にとっては大きな一步なんだ！」

と、世界の偉人の名台詞を馬鹿みたいに言ってしまう俺。

それほどうれしいのだ。

俺はマリンさんに魔法で届けてもらった制服に腕を通した。

制服は紺のブレザーに灰色のズボンだった。

俺は制服を着た自分を鏡に映して見る。

鏡に映る自分を見て、自分が高校生になったのだという実感が改めてわいてきた。

「おっはよー！ 今日はいい天気だねー！ まさに快晴！ 今日と  
いう日に感謝をー！」

勢いよくドアを開けて入ってきたのはもちろんマリンさん。

今日も今日とて綺麗なマリンさんだった。

マリンさんはピンク色の長い髪を後ろで結って、ポニーテイルにし

ている。

純白のドレスをなんの違和感もなく着こなしているあたりがさすがだった。

幸せの権化と言っても過言ではない顔が、緩みきつてほにゃんとしている。

慈愛に満ちた紅い瞳が俺をじつくりと見て、さらに顔が緩む。

整った鼻はくんと俺の部屋の匂いをかく。

そしてまたもや顔が緩む。

普通の人間ならこれだけ顔が緩めばブサイクになること必至だが、マリンさんは普通ではなく超絶美女なのでブサイクになるところか、むしろ可愛さが倍増する。

「竜ぢゃ〜ん・・・ひっぐ、ぐずっ。うえ〜ん！」

突然泣き出したかと思えば、歩く屍、西洋風に言々とゾンビのような足取りでマリンさんは俺の部屋へと入ってきた。

「お姉さん寂しかったよ〜！ 竜ちゃんに会えない日々が寂しかったよ〜！」

「な、泣かないでくださいよ。それに誰も部屋に入れるな、ドアを開けるなって言ったのはマーちゃんじゃないですか」

「ぐずっ・・・そうだけど〜」

「でも話し相手ぐらいにはなつてほしかったな。毎日退屈でしたから。あつ、ちゃんと言われた通りに修行はしてましたよ？」

「だって・・・お話してたら絶対に竜ちゃんの顔が見たくなるからゝ！ だから自制してたのゝ！ 胸が張り裂けるほど辛かったけど、お姉さんはそれを我慢して頑張ったのゝ！ これも竜ちゃんのためだって自分に言い聞かせてお姉さん頑張ったのゝ！」

マリンさんは豊満な胸を上下にたぶんたぶんと揺らせながら俺に抱きついてきた。

朝の起きたてははややかな健全な思春期男子の俺にとって、マリンさんの行動は大変危険だった。

思わず下半身を両手で塞ぐ俺。

「ま、まあ、理事長先生がたまに話し相手になってくれたからよかったですけど」

「それホント？」

マリンさんは微妙にひきつった笑顔で聞いてきた。

「ホントです」

と、答えた俺は次の瞬間信じられない言葉を耳にした。

「ちつ！ あのくそじじい！ 私が竜ちゃんのためを思って、竜ちゃんに会いたいのを我慢して会わなかったというのに・・・そ

れをあの腐れじじいはことあるつか竜ちゃんと毎日毎日楽しくお話してただあゝ！ 許せねえゝ！ こいつはマジ許せねえ！」

マリンさんの豹変ぶりに俺は言葉を失った。

それにモーガン・フリーンはたまに話し相手になってくれたとは言ったが、マリンさんの中では俺とモーガン・フリーンが毎日楽しくドア越しにおしゃべりしていたことになっているらしかった。

「竜ちゃん！」

「はい！」

悪鬼と化したマリンさんは俺の両肩に手を優しく置いて言う。

「お姉さん急に用事を思い出しちゃった。それはそれはとって大事な用事なのゝ！ だから・・・今日の入学式、頑張ってね・・・」

今生の別れのような台詞を残し、マリンさんは弾丸のように走り去って行った。

まあ、マリンさんがなにをしに行ったのか想像できた。

想像できただけに俺の胸にはモーガン・フリーンに対しての罪悪感が・・・。

「やあマリン先生おはようございふあああつ！ な、なにを！？ マリン先生なにをぐしえっ！ お、落ちついたっ！」





俺が心の中でそう言つと、開けっ放しのドアからマリンさんが入ってきた。

にっこり笑っているマリンさん。

「今日は、竜ちゃんの大切な日なんだから目一杯おめかしして行くのよー！ お姉さんも影ながら応援してるからねー！」

と、言つた。

返り血にまみれた顔で。

せつかくの純白のドレスも返り血を浴びて真紅のドレスへと様変わりしていた。

「それじゃねー！」

言つてマリンさんは何かをやり遂げたように清清しく去って行った。

まあ、何かを殺り遂げたつてのは間違いないよな。

第六話：素敵な朝の断末魔（後書き）

ふふふ。

感想を待っておりますぞ。

あ、嘘です。

本当調子に乗ってますいません。

ああ、見捨てないで〜

第七話：テンションが高い先輩は好きですか？　そうですか。（前書き）

ダイエットに成功！

あ、それだけ言いたかったんです。  
では、本編スタート！

第七話：テンションが高い先輩は好きですか？　そうですか。

寮を出た俺は困った。

陵聖学園への道がわからなかったからだ。

いまの時刻は八時五分。

入学式が始まるのが九時ちょうど。

最低でも十分前には着いていたかった。

なのに道がわからない。

柊さんに道案内を頼もうにも部屋にいなかった。

他の女生徒も実家に帰っているらしく、実家から直接学園へ向かうのだとマリンさんに聞いていた。

そのマリンさんは殺害現場から逃走して行方不明だし、モーガン・フリーンはお亡くなりになられたし。

うーん、困った。

「おい！」

「困った・・・」

「おい！　その君ー！」

「うん？」

「君だよ！ きーみー！」

手をブンブンと大きく振っている女の子。

「君ってもしかして俺？」

「もしかなくても君のことだよー！」

ショートカットに赤い髪の少女が俺を呼んでいた。

綺麗な小麦色の肌をしている少女は桜色のシャツに紺のブレザー、縦にラインの入った赤と白のスカートを見事に着こなしていた。

そんな少女がにっこり笑って近づいてきた。

「君かな？」

俺を呼んでいた少女は中世的な顔立ちで桜子と雰囲気少し似ていて妙に懐かしかった。

そんな俺には気づかず、赤い髪の少女は空のように青く綺麗な瞳で俺をじーっと見つめてくる。

「うーん、やっぱり君で間違いないね！」

美少女はプルンとした柔らかかそうな唇でそう言った。

近づかれて気づいたが、少女は中世的な顔立ちをしているがかなりの美少女だ。

そんなところも桜子と似ていた。

「君が藤堂竜也くんでしょ？」

「どうして俺を知っているんですか？」

「ふっふっふー！ 私にわからないことはないのだよ！」

「はあ・・・」

「あー！ いまの冗談だから！ だからそんな容疑者Xを見るような目で見えてくれるなー！ ちなみにこの制服どう思う？ かわいいでしょ？ かわいいよね？ これが陵聖の女子の制服なのだよ！」

「はあ・・・」

ますます怪しい。

「えーと、本当はある人から事前に藤堂くんに関しての情報を提供していただいていたのよ！ 君の特徴やセールスポイントをねっ！」

そう言っ胸の前でVサインをする美少女。

俺のセールスポイント？

俺にそんなのあるのか？

「うん！ まったく情報通りだったわ！ ボサボサの黒髪にハイエナのように鋭い瞳。百七十センチという平均的男子高校生の身長。一見怖そうに見えるが総合的な印象は母性本能をくすぐるというこの矛盾！ あゝ！ この矛盾が可愛くもありかつこよくもある！ さすがは姐さんだわ！ 見る目があるわね！」

誰からの情報なのかわかった気がした。

「あー」

「おおっとそうだったわね！ 自己紹介がまだだったか！ 私は陵聖学園二年の美水すもも！ つまり君の先輩なのよ！ あー！ せ・ん・ぱ・いって言葉に欲情しちゃいやよ！ ちなみに陵聖学園新聞部の部長をやったんだよ！ まっ、それはさておき、すもも、すーちゃん、すももっち！ どれでも好きな呼び方を選びなあ！」

「それじゃあ美水先輩」

「うっ・・・ぐすっ、藤堂くんは、私のことが嫌いなのか？ だから名前で呼んでくれないの？」

「うっ・・・」

泣き落とし！？

こんなことで泣き落とし！？

「いや、あの、すもも・・・先輩」



「よしよし！ 最初からそう呼んでくれればいいのに！ 素直じゃないなー！ でもここまで情報通りだと逆におもしろいわね！」

すごいテンションの高いお人だ。

「あの、すもも先輩は俺になにか用事でもあるんですか？」

「・・・・・・・・・・」

「先輩？」

「うつ・・・・・・・・ぐすつ・・・・・・・・」

ええっ！？

何故このタイミングで泣かれますか！？

「私は・・・・・・・・ぐすつ、なにか用事がないと藤堂くんとお話ししちゃいけないの？」

「いや、誰もそんなことは一言も・・・・・・・・」

するとすもも先輩は泣きながら俺の胸にすがりついてきた。

「バカ！ どうしてわかってくれないのよぉ！ バカバカバカ  
」！  
」

なんて理不尽な！

わかるわけないでしょう。

あなたのテンションにはついていけません。

「バカバカバカバカバカゝ！！　びえゝゝゝゝゝゝゝん！」

「あー、すみません！　どうして泣いてるのかわかりませんがどすみません！」

「びっ・・・」

おいおい、また泣くのかよ。

「びやはははははっ！」

「え？」

なんだ？

もしか壊れてしまったのか？

「あー、笑った笑った！　藤堂くんはおもしろいね！」

なんだか馬鹿にされているような気がしてならない。

「さあ、じゃあ行こうか？」

笑い終えたと思ったら、今度は俺の手を引っ張ってそんなことを言い出した。

「ど、どこに行くんですか！？」

当然の疑問を俺が口にした途端、先輩の手が俺からそつと離された。

先輩は俺のほうに向き直ったかと思うと照れたように顔を地面に伏せる。

よく見ると先輩の顔は真つ赤だった。

軽く握られた右手は口元に置かれている。

余っている左手はスカートの前でギュツと握られていた。

先輩の体は緊張しているのか小刻みに震えている。

「そ、そんなの私に言わせないでよ……。ホントにバカ……。なんだから」

言つて、チラチラと窺うように俺を見てくる先輩。

「えーと……。先輩？」

「私、初めてなの」

「はい？」

「でも！ 相手が藤堂くんなら……。いいよ」

それって……。まさか……。

ほ、本当にいまからどこに行こうというのでしょうか？

「女の子にここまで言わせたんだから、ちゃんと責任とってよね・  
」

責任？

「は、早く行こう！」

再び俺の手を取り、走り出す先輩。

もしかして俺はこれから大人の階段を登ろうとしているのでしょうか？

ドキドキしてきました。

第七話：テンションが高い先輩は好きですか？　そうですか。（後書き）

ちなみに私の元の体重は90オーバー！。

でも今は・・・？

感想お待ちしております！

第八話：テンションが高過ぎる先輩はどうですか？　そうですね。（前書き）

うん・・・この作品は、感動する内容になっており、純文学的な・・・。

うん、何も考えないで読んで頂ければよろしいかと。

では、本編スタート！

第八話：テンションが高過ぎる先輩はどうですか？　そうですね。

「着いたよ」

どこをどう移動したのかわからなかった。

気が付くと俺は大きな扉の前に立っていた。

「藤堂くんから先に入って」

こくこくと頷く俺。

しかし、扉の重さときたら尋常じゃなかった。

「トビラ、アカナイ」

緊張のあまりカタコト語になってしまう俺。

「ああ、そうだったね。ちょっと待ってね」

するとすもも先輩は扉の前で両手をかざし、開けごまみたいな呪文を唱えた。

「リラック・アルム・ゼロス」

ゴゴゴゴッ！

鉄と鉄が擦れるような甲高い音を立てて扉が簡単に開いた。

「さあ、行こう?。」

そう促されて入った先には城があった。

その城は全体的に丸く、城の周りには円柱のような塔が間隔を空けて城を囲うように建っていた。

さらに、その城の遥か先には目の前にある城と似た形の城がぼやけて見えた。

ここからだとかかなりの距離があった。

「藤堂くんが行くのはあそこよ。」

唐突に遥か先にある城を指差すすもも先輩。

どうやってあんな遠い場所に行けっというんだ?

まさかとは思うが徒歩で?

いや無理です。

車があつてもかなりの距離だというのに徒歩でなんて無理無理!

「あーそうだ。言い忘れてたけど、藤堂くんだけは入学式が始まる九時までにあの場所に着かないと入学取り消しだから」

「は?。」

「だからね、入学式が始まる九時までにあの遥か先に見えるお城



みたいな体育館に着いてないと入学取り消しの」

同じような内容を笑顔で言ってくれるすもも先輩。

それよりもあの城が体育館？

それじゃあ目の前にあるこの城はなに？

「じゃあねー！」

「ちょ、ちょっと待って！」

「なに？」

「なに？ じゃないですよ！ ということですか！？ どうして俺だけが時間までにあの城に着いてないと入学取り消しになるんですか！？」

「そんなの私だって知らないよー」

「知らないって・・・」

「だってマリンの姐さんが『これも、竜ちゃんのためなの！ お姉さんもとっても辛いけど、仕方がないの！ くすんつ。だって、竜ちゃんって、すごいのにびり屋さんだから、お姉さんが、竜ちゃんのお尻に火をつけてあげないといけないかな？ なんて思っちゃったんだ！ きゃあ！ お姉さんいまお尻って言っちゃった！ もう！ あっ！ というわけだから、竜ちゃんをお願いね！ すーちゃん！』って、私は言われたただだからね」

なんつーことしてくれんだよマリンさん！

せっかく入学できると思ってたのに！

俺の本当に些細でちつばけな人生設計をここまで粉々に砕く必要がどこにあるっていうんだよ！

マリンさんのあほー！！！！

「あつ、そうそう！　いま八時十五分だから、あと四十五分ねー！」

「そんなの絶対無理ですよ！！　だって俺魔法が使えないんですよ！？　魔法もなしで四十五分であそこまでなんて・・・」

「大丈夫、大丈夫！」

そう言うтусも先輩は真剣な顔で俺の目の前に人差し指をピンと立てて言った。

「マリンの姐さん曰く『なんとかなるよー！　だつてねー、竜ちゃんはー、お姉さんの竜ちゃんだもーん！』だつて！」

なんの根拠にもなつてねーよ！

いまの話の中のどこに大丈夫な要素が入ってるって言われるんですか！

つーか誰もあんたの竜ちゃんじゃねーよ！

「ほら！ 早く行かないと時間無くなっちゃうよ？ 私もこんなこと初めてだったから緊張しちゃってさー！」

「なんだ、初めてってそういうことだったんですか。俺はてつきり……」

よかった。

俺がほつとしてそう言つと、すもも先輩はいじめっこ独特のオーラを発してにやにや笑い出した。

「あれ〜？ てつきり藤堂くんはなんだと思つてたの〜？ も・し・か・し・て〜、すぐエツチなことを想像していたのかな〜？ そうだったら期待させてごめんね〜！ そつかそつか！ やっぱり男の子はケダモノなんだね！」

「……………っ！」

声にならない声で叫ぶ俺。

わざとだ。

この人絶対わかっていてわざと勘違いするような言い方をしたんだ！

「あははははっ！ ごめんごめん。それにしても藤堂くんはホントかわいいね！ うんうん！ 私、個人的に君のこと応援してあげちゃうよ！ これから学園生活でもそれ以外でも困ったことがあったらなんでも相談してきなさい！ 特に、恋の悩みならいつでも相談に乗るよ！ それじゃあ私はこれにて御免！」

すもも先輩は忍者みたいな台詞を残して忍者みたいに消えていった。

最後までハイテンションな先輩だった。

第八話・テンションが高過ぎる先輩はどうですか？ そっですね。（後書き）

どうでしたでしょうか？

少しでも皆様の暇つぶしになれば幸いです！！

感想などお待ちしております！

第九話：遅刻してしまう！　そして俺は死んでしまう！（前書き）

ふう、連続投稿って疲れますね。

今後こんなペースで続けたらいいな．．．。

あつ、すいません。

では本編スタート！

第九話：遅刻してしまう！　そして俺は死んでしまう！

ただいまの時刻は八時十八分。

九時まで残り四十二分。

やばい。

激しくやばい。

絶対間に合わないって！

ミッションインポッシブルだって！

とにかく全力疾走で行けるとこまでいかないと！

そのとき少々混乱気味な俺の上空をなにかが通り過ぎた。

それは人だった。

「おい！　ちょっと待ってくれ！」

俺は自分の声の限界を超えた声で上空の人物に向かって叫んだ。

俺の声が聞こえたのか、その人物は怪訝な顔で俺の前に降り立った。

「君かい？　この僕を呼び止めたのは」

その人物は男だった。

しかもかなり美形な男だ。

身長も俺より高く、百八十はありそうだった。

男にしては長い髪にすらりとしたモデル体系。

俺は同じ男としてちょっとショックだった。

所詮俺の体系は中肉中背ですよ。

「品性のかけらもない声だったから、てっきり野生の熊かと思ったよ」

その言い方は俺にも野生の熊にも失礼だ！

妙に癪に障るやつだな。

「うん？　僕は君をどこかで見たことがあるぞ？　どこだったかな・・・」

「あの、悪いんだけどあの遙か先の城まで一緒に連れて行ってくれないかな？」

「嫌だね」

即答で断られた。

「どうしてこの僕が・・・ああ、そうか。どこかで見たことがあ



ると思えば君はあの有名な藤堂竜也くんではありませんか。どうして君のような落ちこぼれがここにいるのかは知らないけれど、自分で魔法を使って飛んでいけばいいじゃないか」

こいつ・・・俺だって魔法が使えるばお前みたいなやつに頼むわけないっての！

「フライ」

呪文を唱えると目の前のむかつく野郎は宙に浮かんで文字通り俺を見下ろしてきた。

ふん、と鼻で笑いやがった。

「さあ、早く君も飛びなよ。時間がないよ？」

「ぐっ・・・」

「ああそうか！ 君は魔法が使えないんだっけ？ これは失礼」

そいつは仰々しい態度で言うと、自分の長い髪を両手でかきあげて言う。

「それでは僕はこれで失礼させてもらうよ？ 入学式早々遅刻なんてしたくないからね。君は・・・まあ頑張つて走るといいさ」

言つて、男が走り去ろうとしたそのときだった。

ゴアアッ！

大気を切り裂くとてつもなく大きな獣の咆哮が聞こえてきた。

ズシンと地を這う大きな音が響く。

最近どこかで聞いたことがあるようなないような……。

その足音は一步步近づいてくる。

近づいてくるたびに地響きは激しさを増していく。

俺にもむかつく野郎にも戦慄が駆け巡る。

「なに！？　これなに！？」

「ぼ、僕が知りたいよ！？」

最初はこの近づいてくる謎の地響きの正体がなんなのかわからなかった。

だが、すぐにその謎の正体は判明した。

俺の目の前に黒い大木のようななにかが現れた。

先端には鋭く尖り、鈍く輝くものが光を発している。

黒い大木が腕で、鈍い光を発しているものが爪であるとわかるまでにそれほど時間はかからなかった。

「ド、ドラゴン！？」

むかつく野郎の声に合わせるかの如く、俺たちの前に姿を現したのは黒いドラゴンだった。

全長が見えないほど大きなその黒竜の瞳はルビーのようにどこまでも美しく輝いていた。

黒竜の牙と爪はこの世のありとあらゆるものを破壊することができそうだ。

巨大な体躯に生えた翼は、自分が大空を支配するものであると誇っているようだった。

グルルッ！

そんな唸り声を上げた黒竜の口が大きく開かれた。

「な、なあ」

「な、なんだい？」

「なんかさ、周囲がやたらと熱いのは俺の気のせいかな？ 気のせいだったらいんだけどさ」

「ははは・・・残念ながら気のせいじゃないよ。僕もさっきから熱気を感じていてね」

「あのドラゴンはどうして口を開けてるんだろうな」

「さ、さあ・・・？」

嫌な予感がした。

俺の経験上、嫌な予感というものは何故か的中するもので。

今回も例外ではなかった。

開け放たれたドラゴンの口から巨大な炎の塊が放たれた。

炎は俺たちの目の前の地を焼き尽くした。

その場所にはなにも残らず巨大なクレーターがあっという間に出来上がった。

「ど、どうしてドラゴンが・・・」

とか言いながら逃げようとするそいつにしがみつく俺。

そのまま空に浮かんでいく男二人。

なんともシニールな絵の出来上がりだ。

「は、放せ！」

「嫌だ！ 放したら喰われちまうよ！」

上空でそんなやりとりをしていると、そいつは俺に、にやりと不吉な笑みを見せて言った。

「誰かが囷になってアレに食べられる。その隙に一人は助かる。」

「この場合・・・」

「お、おい、ちょっと待てよ・・・まさか・・・」

「囧は君だあ！」

信じらんねえ。

こいつ・・・。

「あつ・・・」

俺はあっけなく蹴り落とされた。

「はははっ！ 僕はこんなところで死ぬわけにはいかないんだよ！ 君みたいな落ちこぼれがこの僕の囧になれるんだから光栄に思いたまえ！」

六階建てマンション並の高さから俺は落とされ死を覚悟した。

駄目だ、死ぬ。

まだ正式に高校生にもなっていないのに死ぬなんて。

やっぱり俺みたいな落ちこぼれが陵聖学園に入ろうってのが間違いだったんだ。

母さん、父さん、マイシスターズ、桜子、俺はここで死んでしまいます。

マリンさん、せっかく期待してもらってたのに裏切ってしまいすいません。

すもも先輩、応援むなく俺はここで散ります。

モーガン・フリーン……特に思い浮かぶことがなくですいません。

柊さん……ごめんなさい。

こんな俺が柊さんを悲しませたなんて……。

最後の瞬間を迎えるために静かに目を閉じた。

ああ、堕ちていく。ルルル、堕ちていく。

ここで一句。

「落ちていく、俺の人生、散々だ」

「竜也、季語が入ってないぞ？」

「季語？」

「俳句は季語がなければ俳句とは言えんぞ？」

「いいの、いいの。そんなこと気にしなくても。どうせ俺は死ぬだし」

「ふむ、そうなのか？」

「そつだよ。この高さだぞ？ 助かるほうがおかしいよ」

「この程度の高度に竜也は恐怖を感じるのか？」

「この程度つてあんたの神経どうなつて・・・つて!？」

「どうした？」

俺はさっきから誰と話してるんだ？

痛みもない。

落ちた気配もない。

「とりあえず下に降りるとしよう」

声がそう言うと、俺の体はふわふわと宙に浮いたような不思議な感覚に襲われた。

目を開けてびっくり。

俺は漆黒のドラゴンの背に座っていた。

ズシンッ！

轟音が鳴り響き、木々で小休止していた鳥たちは驚いて空に逃げた。ていった。

呆然とその光景を眺めている俺に巨大すぎる尻尾が滑らかな動きで

俺の体を包み込んだ。

こんな大きな尻尾に巻かれたら圧迫死……はしなかった。

尻尾は俺の体を優しく包んでくれていた。

俺は漆黒のドラゴンの目の前に降ろされる。

「竜也」

「ひゃいつ！」

「お前が私を恐れることはない」

「わかりました怖がりませんすいませんだから食べないでください！」

俺は必死に土下座を連発した。

「食べないと言っている。人間なぞちっばけな存在を喰ったところで私の腹は満たされない」

「そ、そう……ですか」

よかつたー！！

「だが……お前は別だ。藤堂竜也」

「うそづぎー！」



「えっ！？ ちょっと待て、どうして泣くんだ？」

「さっき食べないって言ったばかりじゃないツスカー！」

「あ、ああ、そうか。いまのは私が悪かった」

「へ？」

「違うというのはお前が他の人間たちとは格が違うという意味で言ったのだ」

「・・・それじゃあ食べない？」

「食べないと言っているだろう？ むう、なかなか話が先に進まないな。そんなに私の姿が恐ろしいか？」

その問いに俺は人間の首の運動の限界を完全に無視した勢いで首を激しく上下に振った。

「そうか・・・」

心なしか、しゅんとした様子の黒竜。

「わかった」

そう言うドラゴンは美しいルビーの瞳をすっと閉じた。

するとドラゴンの巨軀がみるみる縮小されていった。

「これでいいか？」

姿かたちはそのままに体だけが縮小されたミニマムサイズのドラゴンが首をかしげて言う。  
「なんだかわいかった。」

「大丈夫です。そのサイズなら怖くないです」

「そうか、なら話を続けるぞ？」

「お願いします」

「竜也、お前は魔力がなくて魔法が使えないのではない」

「え？」

いきなりな話に戸惑う俺。

「もともとお前には魔法の素養がないだけなのだ。だからお前は魔法が使えない」

「どういうことですか？」

「順を追って説明しよう」

ドラゴンはいろいろ教えてくれた。

世界には二種類の神秘があるということ。

一つはいまや世界中の人間が当然のように使っている魔法という神秘。  
秘。

そしてもう一つの神秘、それは・・・。

第九話：遅刻してしまう！　そして俺は死んでしまう！（後書き）

どうでしたか？

皆さまに楽しんで頂けたら、本当に幸いです。

感想などお待ちしております。

ではでは。

第十話・マジで照れちゃう。あ、それはくしゃみです (前書き)

前回までのあらすじ。

「ああああっ！」

ずしん！

うわゝ死んじゃうー！

あれ？

では、本編をどうぞ。

第十話：マジで照れちゃう。あ、それはくしゃみです

もう一つの神秘……。

それは・・・何？

何ですか？

「召喚術だ」

「召喚術？」

「召喚術というのは術者の魔力を行使してあらゆるものをこの世に呼び寄せる術のことだ。まあ、この召喚術は魔法使いたちでも使おうと思えばいくらかでも使えるのだが、その際に呼び出せるものといえば小石一粒程度だろう」

「あの、魔法と召喚術はどこが違うんですか？」

「うむ、魔法も自身の魔力を行使するという点では召喚術と一緒にだが、魔法は魔力を餌にして世界中に散らばる、火、風、水、雷、音、土、木、の七大元素を呼び寄せ使うものだ」

「釣りみたいなものですか？」

「まあ、似たようなものだな。そして召喚術だが、これはその場がないものや生き物を自身のもとへ呼び出す術だ」

むずかしい。むずかしすぎる。

「ん？ 呼び出すってことなら魔法も召喚術も同じじゃないですか？」

「それは違う。七大元素は常に我らと共にある。竜也の周りにも目に見えていないだけで七大元素はいつも存在しているのだぞ？」

「はあ、そうですか」

「そうなのだ。魔法と召喚術の違いは大体理解できたか？」

「まあ、大まかなところは理解できました」

「うむ、では次の段階の話に進むぞ。先ほど私は魔法使いでも召喚術を使えると言ったのを覚えているな？」

「はい。でも呼び出せるのは小石だけなんですよね？」

「ああ。だが高位の魔法使いともなれば我々を呼び出せる」

「そうなんですか」

「そうなのだ。さて、ここで突然だが竜也は私のような存在がこの世に存在すると思うか？」

なにを突然……いや、そう言われれば普通に考えてドラゴンなんて空想上の生物がこの世にいるわけないし。

でも……現実にはいま俺の目の前にいろいろなことを教えてくれてるわけだし、いるわけないって考えるのはどうもなー。

いやいや、でも……。

「ふつ、まあいい。答えは存在しないだ」

「え？ でも、こうやって実在しているじゃないですか」

「それは竜也が私たちを呼び出してくれたからだ」

「俺が？」

ドラゴンはゆっくりと頷いた。

「我らのような空想上の生物を人は幻想種という。我らは人間が暮らすこの世界のどこにも存在しない。我らが存在するのは精霊界という世界だ。精霊界とは竜也たちが暮らす人間界と隣り合う形で存在している世界だ。そこには人々が空想上の生物と呼ぶものたちがいる」

そんな世界があつたなんて知らなかった。

そもそも魔法を扱えない俺からすれば、いま聞かされた話だって寝耳に水なわけだし、俺の目の前にドラゴンがいなかったらいまの話だって信じてなかっただろうから。

「ここまででは理解できたか？」

「な、なんとか……」

「よし。では少し話を戻すが、高位の魔法使いは我々を呼び出せ



ると言ったが、それは七日七晩召喚術を唱え続けなければ我々幻想種をこの世に現界させることができない。そして、もし我々を呼び出せたとしても、我々が現界したと同時に魔法使いたちの命は奪われる」

「それは死ぬってことですか？」

「そうだ。仮にあの魔王マリン・ヘッケルであっても我々幻想種を呼び出すために魂の半分を代償に差し出さねばならない。そのような理由で今では召喚術を使う人間はこの世にいなかった。言うなれば、召喚術は失われた神秘なのだ」

「へー・・・え？　ちよつと待ってくれ、マリンさんが魔王？」

「知らぬのか？　彼女は何千年も昔から生きている世界最古の魔法使いだ。彼女は昔から実験が大好きでな、五年前にも新しい魔法の実験をしていたのだが、失敗して世界に魔法が知られてしまったと嘆いていたよ」

おいおい、それってまさか・・・。

「もしかしてそれが原因で世界中の人間が魔法を使えるようになったんですか？」

「そうだ。うん？　その反応からするとまさか知らなかったのか？」

「知りませんでした」

「他の人間たちもか？」

「はい、多分知らないと思います」

「マジで？」

「マジで」

静寂の中、ドラゴンは少し考えたあと、

「いまのなしで」

「できるかー！」

「けちくさいことを言うな。それでも私たちのマスターか？」

「マスター？」

「そうだ。竜也は私たちのマスターだ。我々幻想種は我々を呼び出した人物を主と認め、その人物に生涯の忠誠を誓う」

「あの、私たちって私の間違いじゃないですか？」

「いや、私たちでいいのだ」

うーん、一匹だけなのに私たち？

もしかして日本語をあまり知らないのかな？

まあいいか。

それよりも、いま問題なのはマスターという言葉だ。

ゲームだとこのあと・・・

さて、ではいくぞ。

我を見事打ち倒し貴様の力を我に示せ！

ガブツ！

俺、死亡。

ひいいつ！ そんな強制イベント望んでないよ！

「どうした竜也、顔色が悪いぞ？」

「あー」

「なんだ？」

「これから『私のマスターならば見事私を打ち倒しお前の力を私に見せてみるー！』っていう展開にはなりませんよね？ もしそういう展開があるんだったら、謹んで辞退させていただきたいのですが・・・」

俺とドラゴンの視線が重なり合う。

ドラゴンは可愛らしく首をかしげて言った。

「なんだそれは？」

「いえ！ なんでもありません！ 本当になんでもないんで気にしないでください」

「そうか」

「はい！」

よかったよー！

これで俺の命の心配はとりあえずしなくていいんだ！

あー、生きてるって素晴らしい！

ああ、今ならなんでもないようなことがとてもうれしく思えそうだ！

「竜也」

「はい！ なんですか？」

「うむ。私はお前が好きだ」

え？

いきなりのカミングアウト？

好きだって言ってくれるのはうれしいけど男、いやオスかな？ に告白されてもな〜。

（ここまでの思考時間0・三秒）

「な、なんですか突然？」

「私は竜也が気に入った。竜也の心はとても澄んでいる。竜也とこうして話をしているだけで癒される。マリリンが竜也に惚れたのもいまならわかる」

照れるな。

真顔で言っただもん。

ドラゴンは笑顔でそう言うと、ちょこんと俺の肩に乗ってきた。

「いいか？」

「いいですよ。あつ、それじゃあさつき俺があなたのことを怖いって言ったのは・・・」

「正直かなりショックだった。泣きそうになった」

「ごめんなさいっ！でも、アレはあなたがいきなり俺たちの前にあんなに大きな炎を吐くから・・・」

「私は竜也を傷つけるようなことはしないぞ？」

「でもさつきは・・・」

「さつき？ 竜也はなんのことを言っているのだ？ 私はなにもしない。ああ、もしかしてアレか？ アレはくしゃみだ」

「へ？」

アレがくしゃみ？

村を丸ごと焼いてしまいそんな大きな炎がただのくしゃみ？

「あのときは急に鼻がむずむずしてな。確かにアレは私が悪かった」

「は、はあ・・・」

「これで謎は解決したな。よし、では行くぞ」

「はい？」

「時間を確認してみろ」

そう言われて腕時計に目を移してみると時刻は九時三十九分だった。

俺の入学は三十九分前に取り消しになっていた。

「ああああああああっ！」

「騒ぐな」

「だって、だって、俺の青春が・・・」

「大丈夫だ」

「えっ？」

「我に秘策あり」

笑顔でぐつと親指を立ててみせるドラゴン。

「秘策って？」

「それは見てのお楽しみだ。話している時間がもったいないな。急いで竜也を送ろう」

「ありがとうドラゴン！」

「グリシーヌだ」

「グリシーヌ？」

「私の名前だ」

「女の子みたいな名前ですね」

「なんとでも言え。私がつけた名前ではないから気にしないよ。この名前をつけたのはマリンド」

ああ納得。

「グリシーヌと名乗らないとマリンドが号泣するので仕方なく・・・だ」

その光景を想像して俺は苦笑した。

グリシーヌも苦労してるんだな。

頑張れグリシーヌ。

「では行くぞ。竜也すっかりつかまっている」

グリシーヌはそう言うのと巨大な漆黒のドラゴンへと姿を戻した。

両翼を激しく振り回すと、すぐに高度は上昇していった。

雲の上の世界なんて始めて見たよ。

でも……。

「できれば低空飛行でお願い。俺高いところすっごく苦手なんです」

「そうか。だがこれ以上低く飛ぶことは無理だ」

「えー！？ どうして!？」

「これ以上低く飛ぶと下に被害が及ぶ」

「そ、その被害はいかほど？」

もしそんなに酷くなければ是非降下していただきたい。

「そうだな……。大型台風が上陸したあとの街の様子を想像してくれ」

うーん、テレビで見たことあるけど台風の被害って酷いよな。



そこまでして高度を下げてもらわなくてもいいかな？

「想像できたか？」

「うん。やっぱり・・・」

「高度を下げたときの被害は竜也の想像した被害のざっと十倍だな。どうする？ それでも私はマスターが下げろというなら・・・」

「ごめんなさい・・・」

「そうか？」

俺は危うくこの土地を根絶やしにしてしまうところだったらしい。

「見えた。あそこだな」

グリシーヌが見つめるその先には、すもも先輩に案内してもらった城にそっくりな城があった。

あそこはすもも先輩曰く体育館だという。

「なあグリシーヌ、秘策ってなにかそろそろ教えてくれない？」

「ふふ、まあ見ておけ」

第十話：マジで照れちゃう。あ、それはくしゃみです（後書き）

皆さまいかがでしたでしょうか？

少しでもおもしろいと思っていただけたなら幸いです！

うん。

あと、感想などございましたら是非に。

お待ちしております！

第十一話：入学式はニヒルで閉める。それがモーガンクオリティ（前書き）

前回までのあらすじ。

まかせんしゃい。

それでは本編をどうぞー！

第十一話：入学式は二ヒルで閉める。それがモーガンクオリティ

新入生の名前が次々と呼ばれている。

式が始まってからもう五十分は経過しようとしていた。

だというのに、藤堂くんの名前が呼ばれないのはどうしてだろう？

もうすぐで式が終わるのにどうして？

「いないな」

はあー、どうして私ったら藤堂くんにあんなこと言っちゃったんだろ？

今日は、その、もう恋人でもなんでもないけれど、上級生として藤堂くんをここまで案内してあげたかったのに。

それなのにマリン先生が『竜ちゃんなら大丈夫だから、みーちゃんはお姉さんと一緒に行くの！』みーちゃんが一緒に行ってくれないと、お姉さん悲しいな！悲しくて、悲しくて、お姉さん泣いちゃうかもしれないよ！』なんて言っ私をここまで連れてくるんだもん。

これでもう藤堂くんと話をする機会が無くなってしまったわ。

「矢吹虎之助」

「はい」

矢吹？

あの子も陵聖に来たんだ。

まあ、あの子なら当然か。

「以上、百二十名の生徒が今年の新入生です。二年生の皆さんは新入生が快適なスクールライフを送れるように助けてあげてください。新入生の皆さんもわからないことがあれば、私たちや先輩に遠慮なく訊ねてください」

ちょっと待って！

以上ってどういうこと？

まだ藤堂くんの名前が呼ばれていないわ！

「新入生の皆さん。これで、一応入学式は終わりです」

理事長先生・・・終わってないですよ。

まだ藤堂くんの名前が呼ばれていません。

魔法が使えないとわかっていたから私が藤堂くんを連れて来ようと思っていたのに。

そもそも魔法もなく、寮からここまで来れるわけがないじゃない！

マリン先生はなにを考えていたのかしら。

新入生たちは緊張の糸が切れたのかホッとしたようにあちこちで話しをしている。

「えー、一応式は終わりなのですが、少々事情がありまして皆さんにはもう少しその場で待機していただきます。くつろいでいて構わないのでもう少しだけ付き合ってください」

よ、よかった……。やっぱり理事長先生は優しい人だわ。

「くつくつく……美紀」

赤いショートカットに綺麗な小麦色の肌の私の親友が声をかけてきた。

「なに？」

「さっきから誰を探しているのかな？」

「べ、別に誰も探してなんかいいわよ！」

「へー、そう。あっ、そういえば藤堂くんの名前呼ばれなかったね。どうしてだろ？」

「す、すももがどうして藤堂くんの名前を……」

「えへへー、マリンの姐さんから聞かされてねー！」

「もう、マリン先生ってば……」

ズシンッ！

とんでもない音が体育館中に響き渡った。

「えっ！？　今の音はなに！？」

ギョオオッ！

巨人の悲鳴のような音を上げてなにかが壊された。

そのなにかは天井から射す太陽の光のおかげで壊されたのが体育館の屋根であるということに気づけた。

「お、おいっ！　なにやってんだよ！」

「なにとは？」

「どうして屋根を壊してんだよ！　これがグリシーヌの言ってた秘策なのか！？　もつと穩便に・・・」

「すまない竜也。しかし、どうしても先に始末しておかなければならない人間が一人いるのだ。それさえすめば穩便に事を運ぼう」

「ちょっと待てー！　今、始末って言わなかったか！？」

「言ったがそれがどうかしたか？」

「そんな物騒な言葉使っちゃいけません！！」

「むう・・・それは命令か？」

「お願いだ!!」

藤堂くん・・・よね？

どうして藤堂くんがドラゴンなんて空想上の生き物というの？

これは夢？

「びやはははっ!」

夢じゃないみたい。

それにしてもすももはこの事態によくいつものバカ笑いができるわね。

みんな天井から顔をのぞかせている黒いドラゴンに震えているのに。

「ひいっ! アイツはあのときのドラゴン!! どうしてあの男と一緒にいるんだ!? ま、まさか僕を・・・」

どこからかそんな声が聞こえてきた。

誰？

「見つけたぞ!!」

「ひいっ!」



「貴様！　よくも竜也にあのような危険な真似をしてくれたな！　貴様の罪は万死に値する！　しかも貴様は竜也に対して数々の屈辱的な暴言を吐いてしまった！　もはや生かしてはおけぬ！　魂まで消し炭にしてくれる！」

「ゆ、許してください！！！」

「許さん！！！」

グリシーヌの目が完璧に殺る気だった。

「グリシーヌ！　人殺しは駄目だって！」

「一人なら問題あるまい？」

「数の問題じゃないの！」

「むう・・・そうなのか？」

「当たり前だろ！」

俺がグリシーヌにそう言い聞かせていると、体育館の壇上からマリンさんが声をかけてきた。

「竜ちゃん遅い〜！」

そうだった！

俺の入学取り消されてたんだった！

「グリシーヌ！ 秘策ってやつで俺の入学取り消しをなんとかしてくれ！」

「よし」

グリシーヌはそう言つとルビーの瞳を体育館にいる生徒たちに向けて言った。

「聞け。竜也の入学を認める。さもなくばこの場の全員・・・いや、マリン・ヘッケル以外の人間を殺す。さあ、どうする？」

「バカー！ だから人殺しなんて駄目だって言つたでしょ！？」

「グーちゃん！ 竜ちゃんの入学取り消しなんて嘘だから、そんな怖いこと言っちゃ駄目だよ？」

「う、嘘・・・？」

「うん！ 嘘なの！ 竜ちゃんごめんね！ こうでもないところ、竜ちゃんのホントを見れないから」

俺のホント？

「竜ちゃんは、今日から陵聖学園の一年生だよ！」

「藤堂竜也くん」

モーガン・フリーンが俺の名前を呼んだ。

「以上百二一名。これで今年の新生が全員揃いました。それではこれで第二回陵聖学園入学式を終了します」

言って、ニヒルな笑みを浮かべるモーガン・フリーンは少しかっこよかった。

第十一話：入学式はニヒルで閉める。それがモーガンクオリティ（後書き）

ふう。

なんかかんとか、二話続けてお届けすることが出来ました！！

読んでくださっている皆様、本当にありがとうございます！！

感想などございましたら是非に！！

では、これにてご免！！！！

第十二話：友達ひゃつくに〜んできるかな！ さあ？（前書き）

この世界における現実とは一体何なのでしょう？

いや、そもそも現実の定義とは何なのか？

この世に、幽霊、怪獣、神、天使、悪魔、宇宙人が存在しないとか  
故言いきれるのでしょうか？

存在しない証拠はどこにもない。

では、その存在を否定することも

あ、はい？

前置きが長い？

あー、おほん。

失礼しました。

では、本編をどうぞ！

## 第十二話：友達ひゃつくにゝんできるかな！ さあ？

入学式が無事に？ 終わり、マリンさんの転送魔法で教室に連れてきてもらった俺だったが、かなり居心地が悪かった。

みんな直接的ではないが、ちらちらと俺を見ながらぼそぼそと呟いている。

心細いことにマリンさんは『お姉さん少し用事があるから、ホルムルームはちょっと遅くなるね！ その間に、友達百人できるかな？ あはは！』とか言っでどこかに行かれた。

そんなマリンさんの言葉とは裏腹に俺の耳には、

「落ちこぼれのくせに・・・」

「魔法が使えない落ちこぼれが・・・」

などといった声が聞こえてくる。

だがそのたびにグリシーヌの睨みが炸裂する。

みんな自分が第二のむかつく野郎（名前がわからない）になりたくないという思いからすぐに口を閉ざした。

孤立無援。

こんなんじゃ友達の一人すらできないよ。

だがそんな中、陽気な声で俺に声をかけてきた男子がいた。

「よう！ お前おもしろいな！」

関西弁の少年は俺と同じような体格で、短い黒髪にあほ毛が一本ぴよこんと立っていた。

笑顔を向けてくる少年の顔はどこかいたずら小僧チックだった。

「お前あれやろ？ 魔法使えへんのやろ？ それやのになんで陵聖に入学できたん？」

みんながみんな気にしていることを、十年来の親友と話すような気さくさで訊いてくる少年。

「貴様……」

俺の肩に乗っているグリシーヌが関西弁の少年を睨みつける。

グリシーヌの凶悪な睨みを間近で受けた少年は両手を大きく振り慌てて言う。

「ちゃうで！？ 馬鹿にしてんのやないねん！ 純粹に興味あんねん！ なんでなん？ まあ、さっきのアレな出来事は置いとくとしてもめっちゃ不思議やん」

「俺に聞かれてもな……マーちゃんに訊いてくれ」

「マーちゃん？ 誰？ もしかして竜也の彼女か？ あっ、これからお前のこと名前で呼ぶけどええか？」

「いいよ」

「おしっ！ そんなら俺のことも虎之助って呼んでくれ！ 俺は矢吹虎之助や！ 竜と虎で今日から俺とお前はライバルと書いて親友な！ もうそう決めたから！ おーけー？」

「ううっ・・・」

やばい、涙が出てきた。

「ど、どうした竜也？ なんで泣いてんねん？」

この学園に来てからこんなに人に親切にしてもらったのは初めてだ。唯一優しくしてくれたのはモーガン・フリーンだけど、あの人はなにかと忙しそうだし。

同年代の男からなんてのは初めてだ。

しかも俺のことを親友だって言ってくれましたよ！

これが泣かずにいられますか？

「なんでもないから気にしないでくれ」

「そうか？ そんならええねんけど・・・。それで、マーちゃんって誰なん？ やっぱり竜也の彼女なんか？」

「えゝ！！ お、お、お姉さんが竜ちゃんの彼女！？ そうだっ



たの〜！？ 竜ちゃんは〜、お姉さんとみーちゃんに二股かけてたの〜？ うっ、竜ちゃんひどい！！」

声の主は先ほど用事があるとか何とか言っただけでどこかへ行っていたマリンさんだった。

そんなマリンさんは出席簿を抱えたまま俺と虎之助の会話に割り込んできた。

「この人がマーちゃん。あと彼女じゃないから」

「な〜んだ、ちえ〜！」

「嘘やろ・・・」

「えっ？」

「竜也、お前・・・魔王と知り合いやったんか？」

虎之助は驚いた顔で俺とマリンさんを交互に見て言った。

「違うよ〜！ お姉さんと竜ちゃんは〜、知り合いなんてかる〜い関係じゃないよ〜！ お姉さんたちは〜、それはそれはふか〜い関係だも〜ん！ お姉さんたちの関係は〜、肉体関係だよ〜！」

一気に教室の温度が氷点下まで下がった。

「ちよっ、なに言ってるんですか！？ 「冗談でも言っていないことと悪いことが・・・」」

「え〜！ だって〜、お姉さんは竜ちゃんに何度も抱きついたことがあるよ〜？」

「あ〜、そ、そうですね……。あはははは」

そういう意味か。

まったく、マリンさんといいすもも先輩といい、誤解を受けるような言い方をしないでもらいたい。

「竜也つてすげーな。いろんな意味で。竜也つて一体何者？ それにそのドラゴンといい……」

「はいはい！ その質問にはお姉さんが答えてあげるよ〜！ 実はね〜、竜ちゃんは〜」

キンコーンカーンコーン。

始業開始の鐘が鳴った。

「ぷう〜、これからがいいところなのに〜」

と、駄々っ子のように不満を体全体で表現するマリンさん。

そんなことをしてもマリンさんの美しさは少しも色あせなかった。

「はあ……。しょうがないね〜。それじゃあ今から出席を取りま〜す」

いつでもどこでもマイペースなマリンさんだ。

「朝比奈きぬさん」

「はい」

朝比奈さんという女の子は優しく大人しそうな外見だったが、どこかのファッション雑誌の表紙を飾っていてもおかしくないほどの綺麗な女の子だった。

黒いセミロングの髪がさらさらとしていて綺麗だ。

くりっとした大きな瞳がまたなんとも愛らしかった。

そんな朝比奈さんと偶然目が合いにつこり微笑まれ、胸の鼓動が激しく高鳴った。

「黒崎マリアさん」

「……はい」

黒崎さんという女の子は見事な金髪の髪を目元すれまで無造作に伸ばしていた。

きちんと髪型を整えればかわくなる要素をふんだんに秘めているのにもつたいない。

碧眼の瞳はどこか虚ろでこの世の全てに無関心といった印象だった。

そんなことを思いながら黒崎さんを見てみると、黒崎さんはいきなり俺とグリシーヌをじーっと見つめてきた。

やがて興味を失ったのか、黒崎さんはふいつと顔を背けた。

ふう〜、焦った・・・。

「竜ちゃん！ 藤堂竜也くん！ お姉さんのかわいいかわいい竜ちゃん！」

「はい・・・」

こんな恥辱いままで受けたことなかった。

これじゃあまるで拷問だ。

酷すぎる・・・。

「矢吹虎之助くん」

「はいはい！」

虎之助は俺の顔を見てにかつと笑い手を上げてみせた。

「はい、出席も取ったことだし、これでホームルームを終わります！」

マリンさんがそう言った瞬間教室がざわめきだした。

俺も驚いた。

教室にはまだ三十人近くの生徒が残っていたからだ。

「先生！」

一人の男子生徒が手を高々と伸ばし抗議の声を上げた。

「どういうことですか！？　まだ出席を取っていない生徒が三十人はいます！」

今まさに抗議しているのはあのむかつく野郎だった。

同じクラスだったのか。

全く気づかなかった。

「あいつ誰だったかな？　えーと・・・」

「五十嵐孝太郎や」

と、教えてくれたのはいつのまにか俺の隣に来ていた虎之助だった。

「そうそうそんな名前だったな！　つーか、立ち歩いていいのかよ？　まだホームルーム中だろ？」

「なに言ーてんねん。さっき先生がホームルーム終わりって言ってたやないか」

そういえば・・・。

「な？　だからええねん」

「そっか」

「ふんっ」

「どうしたグリシーヌ？」

俺の肩の上でグリシーヌは腕を組んで言う。

「竜也を侮辱した罪深き男に名など必要ない」

「おいおい、さすがにそれは言いすぎやろ？ 俺もアイツは気に入らんけどせめて村人Aくらいにはしたらな」

「村人・・・？」

「そうや」

「ははは！ それはいい！ 傑作だ！ あの男にはお似合いの名だ！ 虎之助、私はお前のことが気に入ったぞ！ これからも竜也と仲良くしてやってくれ！」

「もちろんや！ 俺と竜也は親友同士！ かたゝい絆で結ばれてるんやで！」

「そうか！ よかったな竜也！」

非常に大きな声で話されるお二人。

本人を目の前になんて度胸のあることを・・・。

当の本人はというと、マリンさんに抗議したままの姿勢で、ぴくぴくと体を震わせている。

「き、君たちは、この僕を怒らせてしまったね・・・」

ふふふ、と意味深な笑みを浮かべて五十嵐は言う。

「魔法界の貴族にして五十嵐家が嫡男、この五十嵐孝太郎を君たちは完全に怒らせてしまったね！」

そう言った五十嵐の言葉に教室中の生徒が口々に話し出した。

「嘘っ！ あの大貴族の五十嵐家！」

「マジかよ・・・」

「本物の貴族だ・・・」

そんな言葉を聞いて満足そうに笑う五十嵐。

「なあ虎之助、魔法界の貴族ってなに？」

「そうやなー、一般人に魔法が知れ渡ったのが五年前やろ？ けどな、それ以前からも魔法使いはおってん。それでな、昔から日本の魔法使いたちを支えてきた四つの家があって、俺ら魔法使いの間ではその四つの家のことを四大貴族って呼んでんねん。そのうちの一つが五十嵐っちゅーねん。だからあいつは偉そうにしとんねんけどな。まあ実力もないくせにあそこまで偉ぶる度胸は俺にはないからそこだけは評価したらなあかな」

「なんだと！ 失敬な！ なにを根拠に僕に実力が無いと言うんだ！」

「ふふん、『ひいっ！ 許してください！』と、私に鼻水を垂れ流しながら懇願していたのはどのどいつだったかな？」

と、グリシーヌが馬鹿にしたような笑みを五十嵐に向けて言う。

「くっ、あ、あれは・・・違う。あれはいま関係ないじゃないか！ そうだ！ いま僕が話しているのは藤堂くんじゃない！ 藤堂くんの隣にいる君だ！」

言つて、虎之助を指差し、「名を名乗れ！」と、現代日本では決して聞くことができない台詞を恥ずかしげもなく言ってくれる五十嵐孝太郎くん推定十五歳。

「名を名乗れって言われてもなー」

「さっき出席取ってたよな？」

「なあ？ あいつ聞いてなかったんか？ アホちゃうか？」

「な、な！ この僕に向かってアホだと！ もう許せない！ 名を名乗れ！」

虎之助は呆れたようにため息をついた。

「矢吹や」



「え？」

「お前風に名乗ると、四大貴族矢吹宗家の長男、矢吹虎之助や」

「嘘・・・」

「嘘ついてどうすんねん。はあ・・・だから俺あいつが気に入らんねん。わかるやる？」

と、同意を求めてくる虎之助。

わかるよ。

「す、すみませんでした・・・」

蚊の鳴くような声でそう言う五十嵐。

「なんやて？」

「すみませんでした！」

「ああー、もうええわ。気にしてへんから」

「本当にすみませんでした！」

「だからもうええって！ しつこい奴やな」

こいつはどうして手のひらを返したような態度をとってるんだ？

という俺の気持ちを超能力でも使って悟ったのか虎之助は答えてく

れた。

「五十嵐家は矢吹家の弟子やねん。まあ昔の話やけどな。そんなしょーもない理由で未だにうちには頭が上がりらしいで？　うちは気にすんなって言ーてんねんけどな」

「へー」

魔法の世界もいろいろ大変なんだなー。

もつとメルヘン街道まっしぐらだと思ってたよ。

「はいはーい！　みんな注目ー！」

パンパンと手を叩き、のほほんとした声で言うマリンさん。

「どーでもいいけど、そろそろお姉さんのお話を聞いてねー」

マリンさんは可愛らしく胸の前でお祈りポーズをして言う。

そう思うならいままでのやり取りを楽しそうに見てないで、もつと早くしてくれればよかったのに。

「とりあえず、竜ちゃん、虎ちゃん、きーちゃん、まーちゃんは、先生についてきてねー？　あつ、虎ちゃんは矢吹くんで、きーちゃんは朝比奈さん、まーちゃんは黒崎さんのことだよー！　竜ちゃんは、まーちゃんを呼ぶときは、マーちゃんとまーちゃんの発音を間違えないようにしてねー！」

ややこしい。

「いえ、黒崎さんのことは普通に呼びますから」

「えっ・・・」

途端にマリンさんの顔は落胆の色に染まる。

「だ、駄目だよ！ そんなことしちゃまーちゃんがかわいそうだよ！ まーちゃんも悲しいよね？」

「別に・・・」

黒崎さん本人に否定されて、マリンさんはその場に力なく崩れ落ちた。

そして・・・。

「うつ・・・ぐすつ・・・まーちゃんは、お姉さんのことが嫌いなのかな？」

もはや必殺技となったマリンさんの泣き落とし攻撃。

「うつ・・・」

黒崎さんも以前の俺と同じような罪悪感を感じてしまっているようだ。

「そんなことは・・・ないです」

「嘘だ！ まーちゃんはお姉さんのことが嫌いなんだよ！

お姉さんはまーちゃんのこと大好きなのに！　びええ〜ん！」

泣き出したマリンさんを見ておろおろと辺りを見渡す黒崎さん。

助けを求めているのは明白だった。

しかしこの騒ぎに巻き込まれたくないというのか誰も黒崎さんと目を合わせようとしない。

仕方ないな。

ここは同じ痛みを知るものとして助けなくては。

「まーちゃん」

「え？」

と、驚いたように俺を見る黒崎さん。

「いいから俺をマリンさんと同じ呼び方で呼んでくれ」

黒崎さんの耳元で俺がそう告げると黒崎さんは困ったように考えていたが「竜ちゃん」と、恥ずかしそうにぼそつと言った。

俺と黒崎さんは何故か無性に恥ずかしくなりマリンさんを見た。

マリンさんのバックには薔薇が咲き乱れていた。

いや、咲き乱れていると錯覚を起こさせるほど、顔を輝かせていた。

「もう！ 最初から素直にそう呼べばよかったのに！ 二人とも恥ずかしがり屋さんね！」

うふふ、と満面の笑みで笑うマリンさん。

やはりこの人の考えは理解できません。

「あゝ、そうだった！ みんなに、伝えておかなきゃいけないことがあるの！」

いつも通りのほほんと言つマリンさん。

「あのね、お姉さんはね、このクラスの先生じゃないの。お姉さんは、二つ名を与えられた子たちに、魔法を教える先生として、理事長先生に呼ばれたの！」

二つ名？

なんだそりゃ？

意味不明だ。

しかし、言葉の意味がわかるのか俺を除くクラスの生徒全員が、

「ええー！！！！！！！！！！！！！！」

と、驚いていた。

あつ、訂正です。

朝比奈さんと黒崎さんは驚いてなかったです。

朝比奈さんはにこにここと笑みを絶やさず、黒崎さんはぼーっとして  
いた。

「虎之助、二つ名ってなに？」

「お前二つ名の意味も知らんのか？」

「うん」

「はあ・・・一般教養くらい知つとけよ。魔法使いの常識やぞ？」

「あいにく俺は魔法が使えないので魔法使いではありません」

「あーそうやったな。ええか、二つ名ってのはな、選ばれた魔法  
使いに与えられる称号みたいなもんやねん」

「称号？」

「ああ。でもな、二つ名を持つてる魔法使いなんか世界中でも数  
えられるほどしかいーひんねん。だからみんなも驚いてんねんけど・  
・・」

「へえー」

「へえー、ってな！ 竜也わかってんのか！？ 先生はその二つ  
名を俺らに与える言ーとんねんで！」

「えー！！ そうなのか！？」

「そうみたいや」

「藤堂くん、矢吹くん」

唄えば小鳥たちが集まりそうな、そんな優しい声が俺たちを呼んだ。

「朝比奈さん」

「先生が呼んでるよ？」

「え？」

「竜ちゃん！ 虎ちゃん！ こっち！」

教卓の横で腕をブンブン振っているマリンさん。

「いまから、竜ちゃんたちに、ある人たちを紹介したいと思っています！ その人たちは、氷の女王と炎の女王の二つ名を持っている先輩です！」

氷の女王って・・・まさか・・・。

「氷の女王、炎の女王って、柊美紀先輩と美水ずもも先輩ですよね！？ うわー！ 本物に会えるんですか！？ 私ずっと憧れてたんですよ！」

と、朝比奈さんは憧れの人物に会えるのが嬉しいのか目を輝かせて言った。

「あのね、柊先輩も美水先輩も、魔力の高さが世界でも十指に入るほどの实力を持っていて、そのうえさらにその美しさと高貴な雰囲気から氷の女王、炎の女王の二つ名で呼ばれているの！ はあ・・素敵だわ！」

聞いてもないのにいろいろ情報を教えてくれた朝比奈さん。

「っーか高貴・・かなー？」

美しいってのは、まあ認めるけど、うーん・・・。

「こらー！ー！」

教室のドアが激しく開かれた瞬間、そんな怒声が聞こえてきた。

「うわあっ！ー！」

あまりに突然の怒声に驚いてしまう俺。

これにはさすがのグリシーもぎょつとしていた。

「藤堂くん！ いますっごく失礼なこと考えてたでしょ！」

仁王立ちでふんぞり返りながら言ったのは噂のすもも先輩だ。

「べ、別に失礼なことなんて考えてませんよ」

だって本当のことだもん。



「本当かな？」

「ちよつとすもも」

言ったのはすもも先輩の横で恥ずかしそうに顔を赤らめている柊さんだった。

柊さんとすもも先輩という意外な組み合わせにちよつと驚いた。

二人とも知り合いだったのか？

「つか柊さんが氷の女王ということは、もしかしてすもも先輩が炎の女王なのか？」

「いやー、まさかそんなはずは・・・。」

「はい、みんな！ 私がいま巷で噂の『炎の女王』こと美水すももだよーん！ そんでこっちの胸ぺちやが氷の女王こと柊美紀ね！」

「胸ぺちや言うなっ！」

柊さんは両手で胸を隠すようにして声を張り上げる。

「つか誰も巷で噂なんかしてませんよ。」

しかしマリンさんの紹介とはいえどうしてこの二人がここにいるんだ？

と俺を含むクラス中の全員が疑問に思っていると、

「おおつと皆さんなんて熱い眼差しで私らを見てるんだ！　しょうがねえ、教えてやるよ。いいかい？　こいつはトップシークレットだぜ？」

と言い、どこから取り出した黒いハットとサングラスを装着し人差し指を口元に当てる。

「あれは入学式が終わってすぐのことだった・・・」

遠い目で語り始めたすもも先輩。

というわけで回想スタート。

第十二話：友達ひゃっくに〜んできるかな！ さあ？（後書き）

はあ、はあ・・・。

なんとか本日中に本編をお届けすることが出来ました・・・。

・・・。

感想などがございましたら、お待ちしております。

いやゝ、今日は本当イベント盛りだくさんで大変だった。

第十二・五話：奥さんお供しやすぜ！（前書き）

第十二話の補足のお話です。

・・・ごめんなさい。

では、本編をどうぞ！

## 第十二・五話：奥さんお供しやすぜ！

というわけで回想スタート。

「今日は私らこれで終わりだよねー？」

「そうね」

「なーんか暇じゃない？　ぶつちゃけ式に立ち会っただけって私ら  
必要ないよね？　あー暇だー！　暇で暇で発狂しそうだー！」

「なに言ってるのよ。あつ、そうだ、私ちよつとこれから寄りた  
いところがあるからすももは先に寮に戻っていてくれる？」

「寄るところ？　どこ？　へへー、奥さん私もお供しやすぜ？」

「ど、どこでもいいでしょ！　いいからすももは先に寮に戻つて  
よー！」

「ん〜？　怪しいな〜？　あー！　さては愛しの彼の教室をこつ  
そり覗こうつてのかい？　いかな〜、それはいかなよ！　そんな  
死地に友をたつた一人で行かせるわけにはいけませんな〜！　よし  
っ！　ここは私も一緒に行こうじゃないの！」

「ち、違うわよ！　誰が藤堂くんの教室に行くつて言ったのよ！」

「あれ〜？　私は藤堂くんなんて一言も言ってないよ？　い・  
と・し・の・彼つて言っただけなのにな〜」

「あっ・・・」

「んもっ！ 美紀はかわいいなっ！」

「みーちゃん、すーちゃん見つけたっ！」

「マリン先生？」

「どったの？ マリンの姐さん？」

「あのね、これから二人とも時間あるかな？」

「くっ。すいやせん・・・マリンの姐さん。いまからあっしらは極道の道に進もうという人

生のはみ出し者です。そんなあっしらにマリンの姐さんを巻き込むわけにはいきやせん！」

「どっいうこと？」

「まあ簡単に言えば、美紀と二人で藤堂くんのクラスを覗き見しようってことです。ちなみに主犯格は美紀で、被害者は藤堂くんです」

「ちよっ、変なこと言わないでよ！」

「なっんだっ！ それならちよっどいいやっ！ あのね、いまからお姉さんと一緒に来てくれるかな？ 竜ちゃんたちに、みーちゃんと、すーちゃんを、紹介しようかなっと思ってたりするんだっ！ 二つ名を持っている先輩としてねっ！」

「やったじゃん美紀！ これで直接会っ口実ができたね！」

「だから違っってば！」

回想終了。

第十二・五話：奥さんお供しやすぜ！（後書き）

短いだって？

思い出してください。

世界最強の落ちこぼれ史上、最も短かったのはプロローグです！

プロローグよりも長いはずです。

・・・たぶん。

まあ、これも一応仕様・・・のつもりなのですが。

感想などございましたら、喜んで受け付けます！

では！



第十三話：愛ゆえに……。え？でも、それって犯罪だよね？（前書き）

前回までのあらすじ。

回想終わったよー！

では、本編をどうぞ！

第十三話：愛ゆえに……。え？ でも、それって犯罪だよな？

「まあそついうわけです！」

「はぁ……」

「ち、違うわよ！　いまの話は嘘よ！　もうホント真っ赤な嘘だから！」

柊さんは頭と両手をブンブンと猛スピードで振り回し否定する。

「えゝ、本当だよ！　お姉さん嘘つかないよゝ！」

「うつ……」

マリンさんの思わぬ反撃に声を詰まらせた柊さんがちらっと俺を見た。

え？

それじゃあ愛しの彼ってやっぱり俺のこと？

マジかよ？

ははは、こいつは困ったなー。

はい、自惚れですよ。

「美紀さんー！」

「えっ!？」

突然名前を呼ばれてびっくりな様子の柊さん。

声の主は五十嵐だった。

五十嵐は自信たっぷりな様子。

ビバ俺! とかいまにも言い出しそうな雰囲気だった。

「僕に会いに来てくれたんですね!」

「違う」

言って、柊さんは汚物を見るような視線で五十嵐を見る。

その視線は冷たいとかそういう次元ではなく、もう人として五十嵐を認めていないと視線が物語っていた。

「つかこいつ、いまの話聞いてたのか？」

そんな柊さんの即答に「えっ?」と固まる五十嵐。

「そもそもお前は誰だ? 馴れ馴れしく私の名前を呼ぶな」

「うわぁー、なんだか五十嵐かわいそう。」

ああそうか、こういうところが女王と名づけられた由縁なのか。

まあ女王は女王でも女王『様』だよな？

「冗談でしょう？ 冗談ですよ。だって、二年前に美紀さんは僕の告白に「うれしい、ありがとう」って言うてくれたじゃないですか！？」

「は？ 私が？」

「ん・・・？ ねえ美紀、二年前って言えば美紀がストーカーに悩んでいたころじゃないかな？」

口元に軽く握った拳を当てたすも先輩が思案顔で言った。

「あつ、そう言えばそんなこともあったような・・・」

自然と全員の視線が五十嵐へと向けられた。

「そ、そんな！僕はストーカーなんかじゃないぞ！」

「じゃあ君は美紀とどんな感じで接してたのかな？」

と、すも先輩の質問に五十嵐は堂々と答えた。

「直接会ったのは恥ずかしかったんで遠くの方から美紀さんを見守ってました！」

「というと？」

「はい・・・」

遠くから見守る。

もう少し身近なところで見守る。

心配なので思い切って学園生活を見守る。

ああ心配だ。こうなったら美紀さんが家に帰るまで見守ろう！

近くにいないと僕の大切な美紀さんを守れない！

恥ずかしいけど思い切って告白だ！

思いが実った！！

「ふーん、それで実際は？」

言って柊さんに向き直るすもも先輩。

「えーと・・・」

遠くから気持ち悪い息遣いの男が私を見ている。

日に日に距離を縮める怪しい男。

学校にまでついてきた変質者。

遂に家までついてきた。この頃にすももに相談。

気持ちの悪いことに、荒い息を吐きながら手を振り自分の存在を

アピールしてきた。

無言電話が一日五十件、送り主不明の小包が一日三箱送られてきた。

すもものアドバイスにより無言電話に「うれしい、ありがとう」と答える。それで鬱陶しいストーカーは私の前から姿を消した。

「こんな感じだったような・・・」

典型的なストーカーじゃねーか！

「そんな・・・」

がつくりとうなだれる五十嵐。

そんな五十嵐に優しくそつと手を差し伸べる人物がいた。

「五十嵐くん」

朝比奈さんだった。

優しくそんな女の子だとは思っていたけど、こんなストーカー野郎にまで優しいとはこの人は聖人か？

「朝比奈さん・・・」

言つて、五十嵐が差し出された手を握り返そうとした瞬間、朝比奈さんはその手をぱしっと叩いて言った。

「この妄想野郎」

「えっ？」

「お前みたいな妄想ストーリーカー野郎はこの世に生きてる必要なし。このクスが」

笑顔でにっこりと言った朝比奈さん。

意外な人物にとどめをさされた五十嵐は完全に燃え尽きていた。

「いくら気に入らん言ーてもこんな姿見たらさすがに気の毒やと思うわ」

引きつった笑みで言った虎之助に、俺は黙って頷いて答えた。

「虎之助くん？ 虎之助くんだよな？ 君もこのクラスだったんだ？」

五十嵐のときとはあからさまに態度が違う柊さん。

好き嫌いはつきりしてるな！。

「久しぶりやな、美紀姉ちゃんにすもも姉ちゃん！」

「本当に久しぶりだね！ 元気にしてた？」

「虎ちゃんはいつも元気だよね！」

「まあそれだけが俺の取り柄みたいなもんやからな！」

後に聞かされた話だが、実は柊さんの柊家とすもも先輩の美水家も四大貴族だという。

矢吹家は昔から柊・美水の両家と仲がよく、小さい頃は柊さんたちと一緒に遊んでいたとか。

「せや、紹介したいやつおんねん！ まあ紹介せんでも知ってるやろうけど一応紹介しとくわ！ 今日から俺の親友に決定した藤堂竜也！」

言って、俺の首をがっちりホールドする虎之助。

「よろしくね〜！」

と、白々しく言うすもも先輩。

「それでその黒髪美少女が朝比奈きぬちゃん、金髪美少女が黒崎マリアちゃんていいんだね？」

「私のこと知ってくださってたんですか！？ 感激です！！！」

「……………初めまして」

「っんー！ かわいいね〜！ よし、二人とも私たちと一緒に来なさい！ あっ、嫌だって言うても連行するから。もっちゃん、藤堂ちゃんと虎ちゃんもだぞー！」

「喜んで！」



「……………お手柔らかに」

「しゃーないな」

「はあ……」

やっぱりすもも先輩のテンションは最高に高かった。

「それじゃあ約束通りこの四人を食堂に連れてきますねー！ マ  
リンの姐さんも絶対後から来よ！」

「うん！ 絶対行くよー！ すぐ行くよー！」

すぐ行くてこのクラスはこのまま放置しておくのか？

それはあまりにも治外法権だ。

「めんどくさいけど、このクラスの担任を引き継ぐまで、ちょ  
ーっと時間がかかりそうだから、竜ちゃんとみーちゃんの出会  
いのエピソードでもみんなに聞かせてあげてくれるかな？」

「了解しました！」

びしっと敬礼して答えるすもも先輩。

つーか、面倒くさいってなんだよ。

あなた仮にも教師でしょうが。

案の定クラスの連中は沈んでいた。

第十三話：愛ゆえに……。え？でも、それって犯罪だよね？（後書き）

どうでしたでしょうか？

感想などがございましたら、お待ちしております！

ではでは～！

第十四話：シェフ自慢のフルコース料理（これであなたも夢追い人）（前書き）

どうもー！！

ここまでお付き合い頂いた皆さま！

本当にありがとうございます！

え？ これで終わりなのかって？

いえ、まだまだ続きますよ？

お礼が言いたかっただけです。

では、本編をどうぞ！！

#### 第十四話：シェフ自慢のフルコース料理〜これであなとも夢追い人〜

教室を出た俺たちは食堂へと向かった。

食堂は校舎の外にあるということなので、すもも先輩に連れられ外に出る。

校舎の外には水瓶を肩に担いでいる女性の像があった。

その像は大きな丸い噴水の真ん中で心地よい音を鳴らし水瓶から水を流していた。

そのすぐそばには色とりどりの庭園が広がっていた。

どこまでも豪華な学校だ。

俺たちは庭園を抜けて赤い絨毯が敷かれた長い廊下を歩いて行く。

「はい到着！　ここが食堂だよ！」

言っですもも先輩はこれまた高価そうな木製の扉を開いていく。

食堂内は豪華なシャンデリアが明かりを灯し、確認する限りテーブルは五十以上あった。

その一つ一つのテーブルには皺一つない真っ白なテーブルクロスがかけられていた。

呆氣にとられている俺だったが、

「いらつしゃいませ」

そんなありえない声で迎えられた。

「マリン様からご予約を承っております。さあ、どうぞこちらへ」

と、俺たちにうやうやしく頭を下げて言ったのはウェイター服を見事に着こなしている、感じのいいダンディーなおじさんだった。

顎鬚を申し訳程度に生やしているおじさんはにっこり笑って俺たちをテーブルに案内してくれた。

長方形の長いテーブルにはアンティークショップなどで見られる天使の像やオルゴールがあり、テーブルにあるオルゴールがこの場に合った音楽を流していた。

「どうぞお席のほうへ」

テーブルにはマリンさん直筆のネームプレートが置かれており、すでに俺たちが座る場所は決められていた。

テーブルのちょうど真ん中の位置に『竜ちゃん』左に『ひーちゃん』右に『お姉さん』反対側に『すーちゃん』『きーちゃん』『まーちゃん』『虎ちゃん』の順だ。

「失礼します」

人数分のメニューを各自の前にそつと置いてくれるおじさん。

「お決まりになりましたらこのベルを鳴らしお知らせください」

言ってベルをテーブルに置くと、おじさんは去って行った。

「さて、マリンの姐さんがまだだけど先に注文しところか！ 私は  
ダージリンねー！ みんなは？」

「私はアール 그레이を」

「私も柊先輩と一緒にアール 그레이で」

「………気まぐれミックスジュース」

「俺は本日限定極つまコーラ！ 竜也はなんや？」

「み、水……」

「は？」

と、全員から聞き返された。

「俺は水でいい」

「水って……なんか頼めよ」

「無理。金無い」

ぐうっ！！

突然俺の腹から空腹 SOS 信号が鳴った。

そういや今朝はなんにも食べてなかったな。

いつもは朝飯をマリンさんが魔法で運んでくれたけど今日はマリンさんが殺人未遂事件を起こして朝飯どころじゃなかったからない。

そんな俺にみんなの哀れむような視線が突き刺さる。

「そうかいそうかい。よしよし、それじゃあ藤堂くんは水でいいんだね？ そんじゃあ呼ぶよ？」

言っですも先輩はテーブルに置かれた鈴を取り、ちりん、ちりんと鳴らす。

「お待たせしました」

さっきのおじさんがやってきた。

「えーと、ダージリン一つに、アールグレイ二つ、気まぐれミックスジュース一つと、本日限定極うまコーラーっ」

「かしこまりました」

「あ、あと藤堂くんには『シェフ自慢のフルコース料理』これであなたも夢追い人っ』をお願いします！」

「かしこまりました」

おじさんは俺たちに深々とお辞儀をして去っていった。

「せ、先輩！ なに勝手に頼んでるんですか！？ 俺金無いって言ったでしょ！ しかもよりにもよって高そうな料理を頼むなんて！」

「まあまあ落ち着きな！ 大丈夫だから！ お金が無いのは君だけじゃないさ！ 私も君と同じ文無しさ！ お金が無くてもなんとかなるよっ！」

「は？ なんとかなるってなるわけじゃないですか！」

「大丈夫だって！」

「なにを根拠にそんなこと・・・」

「だってここいくら食べても飲んでも全部タダだから」

「え？ いまなんて・・・？」

「だからー、メニューに書いてあるの全部タダなの！ よかったね！ あ、ちなみに寮には朝食、夕食両方完備だぜ！ びやはははは！」

と、なにが楽しいのか大笑いしだすも先輩。

「つかここ食堂だよな？」

普通の食堂は列に並んで注文して、料理を受け取る。

このプロセスだ。



だがここは違うみたいだ。

そもそも飲み食い全部タダな店なんて世界中どこ探してもないだろ！？

「お待たせしました」

注文してから数分も経っていないのにおじさんは全ての品を持ってきた。

これはもうイリユージョンだ。

「おーきたきた！ そいじゃあいただきますかね！」

言っですも先輩は紅茶の香りを楽しむように匂いを嗅ぎ、そして一気に流し込んだ。

「おじさんおかわり！」

おじさんはにっこり笑って、去っていく。

「すもも、もう少し落ち着いて飲んだら？」

「美紀さんよ……。時間は待っちゃくれねーぜ？」

意味がわからなかった。

まあいいか。

俺も腹減ったから食べよう。

もぐもぐ。

「うまい・・・」

「ありがとうございます」

横からぬつと顔をのぞかせたのは、おかわりを持ってきたおじさんだった。

おじさんはそれだけ言つとまた去っていった。

そんなこんなで俺たちは各自食事を楽しんだのだった。

第十四話：シェフ自慢のフルコース料理〜これであなとも夢追い人〜（後書き）

キャラ設定の公開なんてものをしていこうかどうか迷っております。

そんなのいないよ？

と言われる方もおられるかもしれませんがね。

どうするかはまだ決めていないのですが（笑）

感想などございましたらお待ちしております！！

第十五話：気まずい空気。さりとて・・・ダージリンおかわり！（前書き）

どこへ行くの？

さあ、どこへ行くんだろっな？

また・・・会える？

さあな。

そう・・・。

あ、本編とはまったく関係ないですよコレ。  
なんかテキストに書いてみただけです（笑）

では、本編をどうぞ！

第十五話：気まずい空気。さりとて・・・ダーズリンおかわり！

「・・・・・・・・・・・・・・・・ということがきっかけて美紀と藤堂くんは付き合うようになったのです！」

食事が終わるやいなやすもも先輩はにこやかな顔で、まるでいままで俺と柊さんの間に起きた出来事を見ていたかのように語った。

「すごい・・・藤堂くん、見かけによらず大胆なんだね」

と、頬を赤らめる朝比奈さん。

「・・・・・・・・・・ほとばしる情熱」

独り言のように呟く黒崎さん。

「漢やなー！」

と、感心した風に言う虎之助。

「でも・・・私、柊先輩がうらやましいです」

「うらやましいって、私が？」

「はい！」

「どうして？」

「だってドラマみたいな恋じゃないですか！」

言った朝比奈さんの瞳は少女マンガに出てくるキャラクターのよう  
うにキラキラと輝いていた。

「あゝあ、柊先輩を見てたらなんだか私も彼氏が欲しくなってきたな」

「おっ！　じゃあ俺なんかどうや？　俺もいま彼女絶賛募集中や！」

「あははー！　もう、矢吹くんたらー、冗談は顔だけにしてね！　さもないとぶっ殺すよ？」

マリンさんもかなりの毒舌家だが、朝比奈さんはそれを遥かに上  
回っている。

「つかキツイな」。

虎之助のやつ笑顔のまま固まってるよ。

朝比奈さんの毒舌っぷりに乾いた笑みを浮かべる俺たちだった。

「柊先輩！」

「は、はい！？」

朝比奈さんの次なる標的となってしまうた柊さんが背筋を伸ばして  
てちよつと震えていた。

そりゃそうだよな。

教室のことといい誰も朝比奈さんの大人しそうな外見からは想像もできないだろうから。

かくいう俺もびっくりだ。

「柊先輩はもう藤堂くんとキスされたんですか？」

「なっ、な、な・・・っ！」

と、言葉にできないほど動揺する柊さん。

「す、するわけないじゃない！」

「おやおや、これが噂のツンデレってやつですか？」

ひっひっひ、と怪しい老魔女のような笑いで言うすもも先輩に柊さんは「うるさい！」と睨みつける。

「えー、どうしてですか？ 先輩は藤堂くんと付き合ってるんですよね？ だったら別にキスくらい・・・」

「付き合ってますんっ！」

「美紀ー、照れてるからってそんなこと言っちゃ藤堂くんがかわいそうだよ？」

「本当に私たち付き合っていないの！ もう別れたの！」

「は？ 嘘・・・」

「本当よ!」

「いつ?」

「恋人になつた翌日よ!」

「それはまたどうして?」

「どうしてって・・・そんなの私が聞きたいわよ!」

きつ! と俺を睨んだあと、柊さんは瞳に涙を浮かばせた。

「藤堂くん・・・」

「は、はい!」

「どうしてあるとき私と会ってくれなかったの?」

あのとときと言うとマリンさんに与えられた修行初日のことだよな?

「竜也」

それまでずっと話しに加わろうとしなかったグリシーヌが、俺の肩を降りてとことこと柊さんに近づき俺を見て言った。

「なぜ本当のことを話さない?」

「グリシーヌ・・・」



「どういこと？」

「うむ、美紀が竜也の部屋を訪れたあのとき竜也は・・・」

「ストップ！」

俺は自分でも驚くスピードでグリシーヌの口を塞いでいた。

「もが？ もがもがもが？」

竜也？

何故口を塞ぐ？

と、言っているみたいだ。

「いいんだよ。タイミングが悪かったとはいえ、その前のことも含めて全部俺が悪いんだから。それに、やっぱり俺みたいなのが柊さんの恋人つてのもおかしい話なんだから」

「もが・・・」

竜也・・・と、言っているみたいだ。

「ねえ、いまのどういこと？」

「いや、なんでも・・・」

いつの間にか俺たちの間には気まずい空気が漂っていた。

若干一名「おじさん！ ダージリンおかわり！」と、幸せそうな顔で言う先輩を除いてだが。そんななか、黒崎さんが、

「・・・柊先輩かわいそう」

言って俺を真正面から見据えた。

「言わないことで貴方は満足しているかもしれないけれど、先輩はそうじゃない。先輩は知りたいと願っている。それに、言葉にしないと伝わらないこともある・・・」

「マリアの言う通りだ」

グリシーヌも黒崎さんの意見に頷いた。

気まずい空気がさらに重くなった。

どうしよう。

これってやっぱり俺のせい？

そんなことを考えていると、扉が、ぱーん！ と豪快な音とともに開かれた。

「みんなー！ お待たせー！ 遅くなってごめんねー！」

マリンさんは底抜けに明るく、のほほんとした声で言う。

俺たちは驚きと気まずさからしーんと静まり返った。

マリンさんはそんな俺たちを見て首をかしげる。

「あれ〜？ みんなどうしたの〜？ なーんか暗いよ〜？」

「ちよいちよい、マリンの姐さん。あのだね、これは……………」

「

すもも先輩はマリンさんにかくかくしかじかで、といままでの経緯を説明した。

「そうなんだ〜、みーちゃんは〜、竜ちゃんとお別れしちゃったんだ〜。ふーん、そっかそっか〜。それじゃあ〜、みーちゃんは竜ちゃんのことともうな〜んとも思ってないのかな〜？」

「それは……………」

「それは〜？」

「こくりと頷く柊さん。

「本当に〜？」

「は、はい」

「ほんと〜のほんと〜になんとも思ってないの〜？」

「こくりこくり。

「そっか〜！ それなら竜ちゃんはお姉さんがもらっちゃうね〜

「！」

言って、マリンスさんのマシュマロのように柔らかな唇が俺の唇に重なった。

さらにマリンスさんは舌を入れてくる。

マリンスさんの舌が俺の舌を艶かしく絡めとる。

「んっ」

みんなびっくり。

目が点だ。

つかキスってこんなに気持ちいいものだったのか。

腰が抜けしまいそうだ。

ふわっとした甘い香りが匂う。

「ぶはっ」

優しく唇が離された。

「マ、マ、マーちゃん!？」

「うふふっ！ どうだった？」

「どっつて・・・」

「お姉さんはね、いますごくドキドキしてるよ！ でもね、それ以上にとっても気持ちよかったよ！ 竜ちゃんはどうかだった？」

「お、俺は・・・その、初めてですからそんな余裕は・・・」

「やった！ 竜ちゃんの初めてはお姉さんがいただいちゃいました！」

無邪気に笑うマリンさん。

この人の考えてることはホントいつもわからん。

「マーちゃん！ どうして俺に、その・・・」

「キスしたの？ って聞きたいのかな？」

「はい。その、こういうことは本当に好きな相手にしかしやいけないと思うから」

「きゃー！ 竜ちゃんかわいいー！」

いつも通りのマリンさんにいまだけはむっとした。

「俺は本気で怒ってるんですよ！？ こんなことを軽い気持ちでしちゃう・・・」

「軽くなんかないよー！」

「えっ？」

「お姉さんの竜ちゃんへの愛は軽くなんかありませ〜ん！ お姉さんは〜、本当に竜ちゃんのことを好きなの〜！ 竜ちゃんのためなら世界中を敵に回してもへっっちゃらだも〜ん！ それくらい竜ちゃんのことが好きなの〜！ それに〜、お姉さんは〜、お姉さんが愛した人にしか唇は渡さないよ〜！」

やばい。

いまの俺確実に顔真っ赤だ。

こんなみんながいるところでこんなこと言われるなんて。

柊さんもすも先輩も、虎之助も朝比奈さんも、あの常に無表情を貫いている黒崎さんまでもが頬を染めていた。

「でも〜、お姉さんは本気だけど〜、やっぱりこういうことは〜、お姉さんみたいなの〜、おばさんよりも〜、若い子同士のほうがいいと思うの〜！」

マリンさんがおばさんなら〜、俺の母さんは〜、妖怪ですよ〜！

「だから〜、お姉さんのだ〜い好きなの〜、竜ちゃんとみーちゃんが〜、ラブラブ〜になるんだったら〜、お姉さんは暖かく見守るつもりだったんだけどな〜！」

言ってちらつと柊さんを見るマリンさん。

「ね〜、みーちゃん。どうして竜ちゃんとお別れしちゃったの〜

？ お姉さんに教えてくれるかな？」

「それは・・・」

「それは？」

「・・・だつて、私だつて勇気を出して藤堂くんに会いに行ったのに、藤堂くんは・・・」

あのこときををぽつりぽつりと語りだす柊さん。

すべてを聞き終えたマリンさんは、

「みーちゃんごめんなさい！」

と、謝罪の意を表明する。

「それね、お姉さんが竜ちゃんに、そうしなさい！ って言つたの！」

「え？」

「みんなはもう知つてると思うけど、竜ちゃんは魔法が使えないの！ この世界で魔法が使えないのは竜ちゃんだけ！ かわいそうな竜ちゃん。くすん。でもね、竜ちゃんは、魔法よりももっとすごい力を持つてるの！ だけど、竜ちゃんは、その力の使い方を知らないから、お姉さんが竜ちゃんに修行を与えたの！ その修行は、とつても繊細なものだから、誰も竜ちゃんの部屋には入ることができなかったし、ドアを開けて余分な魔力を部屋に入れるわけにもいかなかったんだ！」





学園中に轟くような叫び声を出してよろめく柊さん。

虎之助は口をあぐり開けて、朝比奈さんは両手で口元を隠し、黒崎さんは大きく目を見開いていた。

すもも先輩だけは「おじさん！ ダーヅリンおかわり！」と、優雅なティータイムを決め込んでいた。

そんなにここのダーヅリンはおいしいのか？

今度飲んでみようかな？

っーか、せれくたーってなんですか？

知ってる人がいたら誰か教えてください。

第十五話：気まずい空気。さりとて・・・ダージリンおかわり！（後書き）

まだまだ続きますよ～！

ご意見、ご感想などがありましたら、お待ちしております～！

ではでは～！

幕間：別れは突然に・・・というか、主に彼女のせいですけどね。（前書き）

前回までのお話。

ダーズリンおかわり！

では、本編をどうぞ！

幕間：別れは突然に……。というか、主に彼女のせいですけどね。

「あゝ、熱いゝ！」

あの食堂の日から一週間が経過した。

俺たちはいまジャングルで彷徨っている。

このジャングルはまるで太古の昔から時間がとまってしまったのは？　と思えてしまう。

そんなジャングルで俺たちはサバイバル生活を余儀なくされている。

何故こんなことになってしまったのかというと、あの日マリンさんがとんでも発言をして、俺たちをこの猛獣たちの巣窟であるジャングルへと放り込んだのだ。

「はゝい！　それじゃあねゝ、いまからみんなの二つ名を言うからゝゝ、しっかりと覚えてねゝ！　まずはきーちゃん！」

「はい！」

「きーちゃんの二つ名はゝ、『暴風の魔女』ゝ！」

「『暴風の魔女』ですかー！　なんだかっこいいですねー！」

「でしょー！ それから、まーちゃんの二つ名は、『無音の暗殺者』〜！」

こくり、と頷く黒崎さん。

つか暗殺者って・・・。

もっと穏やかな名前はないのか？

「それで、虎ちゃんの二つ名が、『雷の申し子』〜！」

「俺だけ子供かい」

「うふふ、それでね、いまから一月後の、あ、ちょうどゴールデンウィークだね〜！ に、学園対抗魔法大会があるからよろしくね〜！」

学園対抗魔法大会？

マリンさんは俺たちに黒い封筒を配り言う。

「詳しくは、この封筒に入っているお手紙を読んでね〜！ あ〜！ それと、竜ちゃん〜！」

「はい？」

「竜ちゃんごめんね〜？」

「は？」

「お姉さんもいろいろ悩んだんだけど、やっぱりイーちゃんだけ仲間はずれなのはかわいそうだと思ったの！イーちゃんはいまね、竜ちゃんが迎えに来てくれるのをずっと待ってるんだよ！だから、お姉さんが、竜ちゃんを、イーちゃんが待ってるジャングルまで案内してあげるよ！」

ジャングル？

つか、イーちゃんて誰？

「あゝ！それと、みーちゃん！」

「はい」

「みーちゃんも、竜ちゃんと一緒に行ってくるといいよ！」

「え？あの、マリン先生？」

「うふふ、二人で仲良くね！」

「マリン先生？」

「仲直り仲直り！それから、グーちゃんはここに残ってね」

「うむ」

「じゃゝいつてらっしゃい！」

言ってマリンさんは俺と柊さんに手を振る。

そして次の瞬間には俺たちはジャングルに転移させられていた。

幕間：別れは突然に……。というか、主に彼女のせいですけどね。（後書き）

このお話はノンスクランブルで放送しております。

はい。

何のことやら書いている私ですらわかりません。

ごめんなさい。

ご意見、ご感想などがあればお待ちしております！！

ではでは～！



第十六話：俺と彼女の距離十メートル。この体験・・・プライスレス。（前書き

フリートークのコーナー!!

キャラ設定などを一度、どこかでまとめて出した方がいいのじゃないか？

うーん・・・

あ、本編をどうぞ！

第十六話：俺と彼女の距離十メートル。この体験・・・プライスレス。

「あゝ熱いゝ！」

「そうね。こんなに熱いなんて・・・」

二人でこのジャングルに放り込まれて一週間。

食い物は木の実がたくさん生っていたおかげでなんとかあった。

しかし・・・。

「あのー、柊さん」

「いや！ 近づかないで！」

これだよ。

ここにきて二日目から柊さんは何故か俺を警戒しているようだ。

そこまで嫌われていたなんて・・・。

それにしてもこの距離はなんとかならないものかな？

「俺のことが嫌いなのはよくわかりました。でも、その、なんと  
言うかもうちよつと距離を縮めてもらえませんか？ こんな危険極  
まりないところでそんなに離れていたら、なにかあったときにお互  
いに対処できないですし・・・」

俺と柊さんとの距離は十メートル近く離れていた。

柊さんは俺の十メートル後ろをこそそと歩いている。

「べ、別に藤堂くんのことを嫌ってるわけじゃないの・・・」

「え？ そうなんですか？」

そいつは意外だ。

俺はてっきり柊さんに五十嵐並みに嫌われているのかと思っていた。

「だったらどうして・・・」

「臭うの・・・」

「臭う？」

「うん。一週間もお風呂に入ってなかったからとっても臭うの・・・」

「そんなこと俺は別に気にしませんよ」

「わ、私が気にするの！」

すごい剣幕で怒られた。

そんなに気にすることかな？

「ん？」

そんなとき奥の方からかすかだが水の流れる音が聞こえてきた。

「柊さん！ この音聞こえますか！？」

「音？ ううん、聞こえないけどどうかしたの？」

「水ですよ！ 水！ 水の音が奥の方から聞こえて・・・」

水の音が聞こえてくる方へと指を指す俺に、

「水！？」

言って柊さんはものすごい勢いで走り去っていった。

「柊さん！？」

「藤堂くんはついてこないでー！」

そんなこと言われましてもこんなところで一人になっちゃ危ないですよ。

つか、一人にしないでー！

心細いからホントに！

第十六話：俺と彼女の距離十メートル。この体験・・・プライスレス。（後書き

ご意見、ご感想などがあればお待ちしております！

では～！！

第十七話：イタズラはほどほどにね

命に関わります・・・。（前書き）

前回までのあらすじ。

おいてかないで。

では、本編をどうぞー！

第十七話：イタズラはほどほどにね 命に関わります・・・。

茂みに覆われた先を抜けるとオアシスが広がっていた。

命の水だ・・・！

一つの濁りもない綺麗な水が溢れている。

晴れ渡る空の色をした綺麗な水の中には見たことも無い笑顔で柊さんが水浴びをしていらっしやった。

「ひ、柊さん！？」

「え？」

目と目が合い固まる俺と柊さん。

「いやーっ！……！！！」

両腕で体全体を隠そうとするがそれでも隠しきれていない部分が俺の目に映る。

「見ないでー！！ ついてこないでっって言っただじゃない！！」

「い、いやっ！ 見るつもりは・・・！」

「あっちに行ってー！！」

見るつもりはなかったと言おうとした俺だったが、柊さんの神々

しい肢体に目を奪われて動くことができなかった。

「アイスソード！ アイススピアー！ アイスハンマー！ アイ  
スアックス！」

俺めがけて氷の剣、槍、ハンマー、斧が次々と放たれる。

「うわっ！」

俺は必死に避けた。

だって死にたくないもん。

避けても避けても次々と飛来してくる柊さんの魔法。

死ぬー！

このままじゃ死んでしまうー！

「・・・・・・・・」

あれ？

魔法の雨がやんだ。

どうしたんだろう？

まさか許してくれたのかな？

と、そんな甘い考えが通用する相手ではなかった。



「アイスダンス!!」

柊さんは大気中にある水分という水分をかき集める。

すると、俺の周囲にあの踊り子の衣装を身に纏った氷の傀儡が、心まで凍て尽くす冷気を放ち見渡す限りに現れた。

「アイススピア!」

柊さんが呪文を唱えると、氷の傀儡たちはその手に水分を集め氷の槍を作った。

そしてそれを俺に突きつけてきた。

「そこでじっとしていて!」

柊さんの怒声が言うのと、あっという間に氷の傀儡たちは消えていき、残ったのは俺に氷の槍を突きつけている氷の傀儡が二体。

「絶対にこつちを見ないでね!」

アイサー!

俺も死にたくありませんから言う通りにします!

それから三十分が経ったが柊さんはまだ水浴びをしている。

女性の風呂は長いとは言いが、まさか水浴びでもこんなに時間がかかるとは。

ちなみに俺は三十分間ずっと氷の槍を突きつけられていた。

生きた心地がしねーよ。

「ねえ、藤堂くん」

「なんですか？」

「その、いろいろごめんね・・・」

言われて俺はさっき見た柊さんの裸を思い出してしまった。

思わず鼻血が出た。

「い、いや、俺も柊さんの裸見ちゃいましたし・・・その、とっても綺麗でした！ あ、俺さっきのことは絶対に忘れませんから！」

混乱して俺は自分でもなにを言っているのかわからなかった。

「ち、違うわよっ！ さっきのことじゃないの！ ていうかさっきのことは早く忘れてよ！ 私が言いたかったのは、その、藤堂くんに酷いことを言ったり勝手に勝手に誤解して別れようなんて言ったり・・・」

「ああ、そのことですか。もう気にしないでください。あれは俺が悪かったんですから」

「そんなことない！ 私だって・・・」

「それにですね、前にも言いましたけど俺みたいな落ちこぼれが  
柊さんのように素敵な女性と釣り合うわけなかったんですよ」

「それは違うわ！ 私は藤堂くんが魔法を使えなくても藤堂くん  
のことを・・・」

「え？」

「そ、それにね！ 藤堂くんは落ちこぼれなんかじゃないんだか  
ら！」

「落ちこぼれじゃないって俺がですか？ でも、俺魔法を使えな  
いんですよ？」

「ううん、藤堂くんは落ちこぼれなんかじゃないよ。マリン先生  
も言ってたでしょ？ 藤堂くんはセレクターだって」

「言ってましたけど、そのセレクターってのはなんなんですか？」

「セレクターっていうのはね、召喚術士の別名のこと。あのね藤  
堂くん。藤堂くんはドラゴンなんて空想上の生き物がこの世に存在  
すると思う？」

柊さんはグリシーと同じ質問をしてきた。

「存在しないと思います」

「うん、その通り存在しないの。でも実際にグリシー又さんはい  
まもこの世に存在しているでしょ？ グリシー又さんたち空想上の  
生物は幻想種と呼ばれ、精霊界という私たちの世界と隣り合うよう

に存在する世界の住人なの。その世界には私たちの世界からじゃ行けないし、逆に精霊界から私たちの世界に来ることもできない。でもね、たった一つだけ二つの世界を行き来できる方法があるの。それが、召喚術」

ここまではグリシーヌに教えてもらったことだったのでわかる。

「普通の魔法使いでも召喚術は使えるけど、リスクが大きすぎる。二つ名を持っている魔法使いでも危険。そんな術を好んで使おうとする人間なんてこの世にいないと思ってた。だから藤堂くんがグリシーヌさんと現れたときはなにかの間違いじゃないのかとも思っていたけど、そうじゃなかった。藤堂くん、あなたは知らない間に召喚術を使っていたの。そして呼び出したのは幻想種の中でも最強のドラゴン。そして恐らくここには藤堂くんが呼び出したもう一匹の幻想種がいるはず」

「どうしてそんなことがわかるんですか？」

「どうしてって・・・ここに転移したときからすごく強い魔力の波動を感じるもの。藤堂くんだって感じるでしょ？ 私が藤堂くんに『ふざけないでっ！』って言ったあのときね、本当は私、悔しかったの。私より魔力の総量が多い人なんてマリンさんしかいなかった。それなのに、藤堂くんは魔法を一つも使えないなんて言うから・・・」

そうだったのか。

「私はセレクター・・・ううん、召喚術士なんておとぎ話の中に出てくる伝説だと思っていたわ。しかも藤堂くんは二体も召喚した！ これはとてもすごいことなの！」

「でもですね。俺からすれば魔法を使えるほうがうらやましいというか……。俺、初めて柊さんに会ったとき、柊さんの魔法に見とれてしまったんですよ。あのとき俺は生まれて初めて魔法を使いたいと真剣に思いました。それまでは魔法なんてどうでもいいと思っただけです」

「あ、ありがとう……。」

照れたような声が聞こえてきた。

俺はそんな柊さんを不覚にも愛しいと思ってしまった。

なに考えてんだ俺！

俺にはもうそんな資格なんてないのに。

俺と柊さんはもう恋人でもなんでもないんだぞ？

「だ、だからね！ 藤堂くんは落ちこぼれなんかじゃないんだよ！ たしかに藤堂くんは魔法を使えないけれども、魔法なんかよりもっとすごい力を持っているんだよ！ 藤堂くんはね、世界最強の落ちこぼれなんだよ！」

そ、それは褒められてるのか？

それとも貶されているのか？

どっちなんだ？

「あ、ありがとうございます・・・」

「う、うん・・・」

なんだか妙に気恥ずかしかった。

「うゝん青春ね〜！」

と、マリンさんのようにのほほんとした声が俺たちの妙な雰囲気  
を中和した。

「誰・・・？」

「はい、マスター！ 私を迎えに来てくれたのねー！ イリー  
ナ感激ー！」

現れたのは銀の髪にエメラルドの瞳、むっちりボディの綺麗なお  
姉さんだった。

シンプルな黒いジャケットとデニムパンツを着ているその女性は言  
って俺の手を取りぴょんぴょん飛び跳ねた。

「イリーナってもしかしてイーちゃん？」

「そーです！ マリンにイリーナって名前をつけてもらったのー  
！ それよりも、 美紀を呼んできて！ 早く！」

「ど、どうして？」

「私ね、マスターに呼ばれてからずっとここで彷徨ってたのよ」

「はあ・・・」

「それでね、マスターが迎えにきてくるまで暇だからさー、ちょっとしたイタズラをしてたら相手を怒らせちゃって・・・」

相手？

こんなジャングルに俺たち以外にも誰か住んでるのか？

「相手って？」

「うーん・・・」

ギャース！

ズンズン！

大きな足音と恐竜のような鳴き声が聞こえてきた。

恐竜？

「アレ」

てへっ！

と可愛らしく舌を出して、こつんと自分の頭を叩いて見せたお姉さん。

指差す先にいるのはティレックス。

なんか俺こんなのばっかだ・・・。

「早く美紀を連れてきなさい！ 逃げるわよ！」

「逃げるってどこに！？」

「いいから美紀を連れてきなさい！」

「わ、わかりましたよ！」

とは言ったものの、俺の行く手を氷の傀儡たちがガードしている。

「ねえ藤堂くん。この音ってなに？ それにさっきは誰と話してたの？」

「すみません！」

「えっ？ どうして謝るの？」

「後でどんな制裁でも受けますからいまだけはどうか許してください！」

言っただけは生まれたままの姿であるであろう柊さんの下へ駆け寄った。

言っただけでもないが氷の傀儡たちはそんな俺に攻撃を仕掛けてきた。

だが避けている暇もなく俺はそのまま突き進んだ。



「と、藤堂くん！？　どうしたのその傷！？」

柊さんは既に着替えを終えていた。

「アレにやられました」

俺は背後からやってくる氷の傀儡たちを指差し答えた。

「藤堂くん……。そこまでして私の裸を見たかったの？」

ああ、俺もう完璧に終わった。

さっきまではいい雰囲気だったのによー！

「もうなんでもいいですから俺と来てください！　あとアレをどうにかしてください！」

どんどんこちらに迫ってくる氷の傀儡を指差し叫ぶ俺。

無表情が逆に恐ろしい！

第十七話：イタズラはほどほどにね 命に関わります……。 (後書き)

このお話でやっと登場予定キャラのうち三分の一のキャラが登場しました！

少しでも皆様に楽しんで頂けたのなら幸いです！

ご意見、ご感想などがあれば是非に！！

ではでは

## 番外編：プロローグ（前書き）

一応、キャラクター紹介も兼ねたお話になっています。

## 番外編：プロローグ

竜也と美紀が大変なことになっちゃっているときより、話は少し遡る。

「じゃ〜いつてらっしゃ〜い！」

マスターこと、竜也がイリーナを迎えに行くため、マリンに飛ばされた。

その竜也と一緒に美紀も飛ばされてしまった。

私はその光景を見ながら、一つ思ったことがある。

「・・・寂しい」

竜也はイリーナを迎えに行っただけであって、もう帰ってこないというわけではない。

それはわかっている。

でも寂しい。

少しの間、マスターがいなくなったからといって、私ほどの幻想種

ならばどうということはないはず・・・なのだが。

とにかく寂しい。

むう、私はどうしたというんだ？

「あれ、グーちゃん？ どしたの？」

「うむ、その・・・竜也は今いないよな？」

「うん、そうだね。竜ちゃんいちゃんをお迎えに行っただね。」

「そうだ。であれば、マスターである竜也がいない私は、竜也が帰ってくるまでの間、何をしようかと考えていたわけだ」

そう言っ、腕を組んで悩んでいた私の身体をマリンは赤ん坊を抱くように持ちあげた。

「そっか、グーちゃんは、竜ちゃんがなくて寂しいんだね？」

その通りだったのだが、改めてそう言われるとなんだか無性に気恥ずかしい。

「それじゃあ、竜ちゃんたちが戻ってくるまで、皆とお話でも」

マリンはそう言いながら、虎之助、マリア、きぬ、すもも、と順に見ていき、

「皆とっ、仲良くなるっ！」

のほほんと言ったのだ。

番外編：プロローグ（後書き）

ご意見、ご感想、お待ちしております！

ではでは

番外編／第一話：矢吹虎之助くんの日常でございます（前編）（前書き）

こんなこともあるのかと。

という言葉がありますよね？

こんなこともあるのかと何かを準備出来る人は、多分産まれてくる時代を間違えた人だと思っています。

世が世なら、名軍師として名を馳せていたことでしょう。

まあ、何が言いたいのかというと・・・。

あ、番外編始まります！！



番外編／第一話：矢吹虎之助くんの日常でございます（前編）

矢吹虎之助の日常。

竜也がいない間、寂しい、もとい暇だった私は、マリンの提案で虎之助、マリア、きぬ、すもも、と親交を深めることとなった。

というわけで、今日は虎之助と親交を深めようと思う。

九時。

そういうわけで、私は今、虎之助の部屋にいる。

「あゝ」

「どうした？」

「なんで俺の肩に乗ってはるんですか？」

「駄目か？」

「いや、アカンってことはないんやけど、ちょっと不思議やったから」

「そうか。それにしても・・・」

言つて、私は虎之助の肩から降りる。

「虎之助」

「はい」

私の呼びかけに、何故か居住まいを正して答える虎之助。

「お前の肩は乗り心地が悪いな」

「あはは・・・」

乾いた笑いを見せる虎之助。

「虎之助、私はお前ともつと親交を深めたいと思う」

「ええよ。そんじゃあ、何か話しか」

「いや、その必要はない」

「ふ、振られてもうたあ・・・」

そんなつもりは毛頭ない。

「私は、虎之助が普段どのように過ごしているのかを知りたいのだ。なので虎之助、お前はいつも通りの日常を過ごしてくれ。私はそれを観察する」

「なにそれ？ 新しいプレイか何か？」

「ぶれい？」

ぶれいとは何だ？

良くわからん。

しかし、さすがは虎之助といったところか。

博識な奴だ。

そうでなくては、竜也の親友は務まるまい。

「まあええか。そんなじゃあ、俺はいつも通り過ごさせてもらっわ」

「うむ、そうしてくれ」

十時。

虎之助は机に向かう。

カチカチと何かを叩いている。

その瞳は、目の前の板に向けられている。

確か、ぱそこんとかいうものだ。

ぱそこんという板には何かが映し出されているようだが、虎之助の身体が板と重なっていて見えない。

「何をしているのだ？」

「・・・・・・・・」

「虎之助？」

「・・・・・・・・」

私の声が聞こえていないのか？

「なあ虎」

「じゃかあしやあーーーーー！」

びっくりした。

いきなり怒られてしまった。

私は何か悪いことでもしてしまったのだろうか？

「今ええとこやねん！」

言っと、再び目の前の板に視線を戻す虎之助。

心なしか、虎之助の瞳は血走っているようだった。

『ハアーン！ 駄目、駄目、駄目よー！』

突然、どこからか声が聞こえてきた。

「ハア、ハア、ハア・・・」

板を見つめる虎之助の息が荒い。

何だ？

一体何が起きている？

板に何があるのだ？

気になる。

『そこは駄目〜！』

そことはどこだ？

『いいわ！ ああ〜ん、素敵よ！』

良いのか、駄目なのかどっちだ？

しかし、この声を聞いていると、だんだん変な気持ちになるな。

よし、確かめてみよう。

私は翼を広げ、飛び上がる。

板に何が映っているのか？

「ここか〜！ ここがええのんか〜！」

『あ！ 駄目駄目駄目駄目~~~~~』

板には裸の女が映っていた。

板の下の方には文字が描かれている。

今の裸の女が言った言葉と全く同じ台詞だ。

その女は何故か顔を赤くして、ぐったりと寝ころんでいた。

『ふふ、良かったわ。虎之助くん』

「ああ、俺も良かったで。また、明日な」

虎之助がそう言うと、板に映っていた裸の女は一瞬で消えた。

むっ？

何だったのだ？

番外編〜第一話〜：矢吹虎之助くんの日常でございます（前編）（後書き）

矢吹さん家の虎之助くんのお話です。

虎之助くん・・・ぐすん。

自分でも、想像していなかったことに・・・。

番外編〜第二話〜：矢吹虎之助くんの日常でございます（後編）（前書き）

誰しもが経験したことがあるであろうシリーズ。

ドラクエの主人公の名前を「ああああ」にする。

はい。

では、番外編スタートです！



番外編／第二話／：矢吹虎之助くんの日常でございます（後編）

一三時。

「ちょい遅いけど昼飯でも食おか」

「そうか」

「えーと、あんな、ちょい聞きたいことがあんなんだけど」

「なんだ？」

虎之助は苦笑すると、

「俺はアンタのことをなんて呼んだらええんやるか？」

ふむ、そういえばそうだな。

人間は我らとは違い、個体に名前を求める習性があるのだったな。

「竜也の親友である虎之助ならば、私のことを好きに呼んでいいぞ。光栄に思え」

「おー！　ありがとう！　そんなじゃあ、そうやなー。グリシーヌって名前やし、うーん、なんかあだ名みたいなん付けたいよなー」

「何でもいいぞ」

「よし、そんなら今から俺はアンタのことをブルーメールって呼ぶわ！」

・・・・・・・・はい？

「虎之助よ。何故にブルーメールなのだ？ 私の名前であるグリシーヌとは全く関係ないもののように感じるのだが」

「関係なくなんかない！ グリシーヌって名前やからこそそのブルーメールや！ まあ、アンタは黒で、アッチは青やから違うといえは違うけどな。しかし、せっかくグリシーヌなんて立派な名前持ってるのやから、やっぱりここはブルーメールってあだ名を付けやなあかんやろうと思ったわけですが！」

立派な名前？

ふふふ、私の名前は立派なのか。

いや、流石は竜也の親友だな。

矢吹虎之助。

違いの分かる男だ。

しかし、何故こうも熱く語っているのだろうか？

というか、ブルーメールとは何だ？

うーむ、わからん。

奥が深いな。

「・・・あの、やっぱりブルーメールはアカン？　はあ、そろそろやわな。てか、このネタは分かる人にしか分かんやろうしな。ごめん、今のナシで。もう普通にグリシー又って呼ぶことにするわ」  
「なんだか勝手に解決したようだ。」

「虎之助。私をグリシー又と呼ぶのは、それは私の名前が立派だからか？」

「ん？　ああ、うん。そうや！」

「そうか。虎之助よ。私はますますお前のことが気に入ったぞ」

一五時。

少し遅めの昼食を取った虎之助は、寝転がらせていた身体を起し、大きく伸びをした。

「さて、そろそろ時間やな」

言って、虎之助は部屋を出る。

私もそんな虎之助に同行する。

「どこに行く？」

「誰もいーひん場所やったらどこでも可」

外に出て、歩くこと数分。

「おっしや。ほんじゃあ、今日はここでええか」

女子寮とは造りに雲泥の差がある男子寮を出て、虎之助が向かったのは、男子寮のすぐ裏にある森の中だった。

なるほど。

灯台下暗しというやつなのだな。

・・・たぶん、そうだと信じたいが。

しかし・・・なんだ。

竜也やマリンの住む女子寮とは違い、何と云うか、男子寮は中々酷かったな。

建造物の老朽化は当たり前。

クモの巣は張り巡らされていた。

部屋は狭い。

うん、ここまで酷いとか作威的なものを感じてしまうな。

虎之助には悪いが、竜也が男子寮ではなくて心から良かったと思う。

グッジョブだ。

牛丸普利男！

「ええーと、まずは・・・」

大きく深呼吸を二度繰り返した虎之助は、次に目を閉じた。

すると、虎之助の周囲のマナがまるでダンスでも踊っているかのように、虎之助を中心に回り出す。

周囲のマナは次第に青白く光り出す。

そして、青白く光っていたマナは次第に形を帯びていき、人型となり、さらにそこから麗しい女性の姿へと変貌を遂げた。

現れた女性はどこからともなくブルーシートを地面に敷き、その上に座り込む。

女性は無言で、しかし可愛らしい笑顔で自らの膝をポンポンと叩いて見せる。

その膝の上に、虎之助は頭を載せて寝転がり始めた。

「虎之助」

「ん？ 何や？」

「これは一体何をしているのだ？」

「何って修行やけど？」

「・・・そうか」

竜也よ。

虎之助がお前の友を名乗っても良いものが、私は少し不安になってきたぞ。

その後、五時間余りも虎之助は女性の膝の上で眠りについたのだった。

私は、そんな虎之助に一抹の不安を抱きながらも、虎之助が起きるまでその場で待つのだった。

番外編／第二話：矢吹虎之助くんの日常でございます（後編）（後書き）

最近、前書き、後書きに作品内容とはまったく関係ないことばかり書いているのは私の気のせいでしょうか？

・・・・・・・・・・・・・・・・。

では、本日はこれで。

ご意見、ご感想などございましたら、お待ちしております！

第十八話：絵本って、たまにグロテスクな表現が含まれているように感じるのね  
今回は本編ということになりますね！

まあ、番外編も本編といえば、本編なのですが、一応わかりやすいようにということで、番外編と銘打っているわけです！

では、本編をどうぞ！！



第十八話：絵本って、たまにグロテスクな表現が含まれているように感じるのよ

無表情なまま、俺の背後に迫る柊さん発、俺行きの氷の傀儡たち。

それをなんとか全精神力を持ってして振り切り、柊さんの下へと駆け寄ることに成功した俺。

誰か褒めて〜！！

そんな俺を視界に捉えて柊さんは若干引き気味な様子。

「ど、どうかしたの？」

「恐竜が来てるんですよ！」

「は？」

「こっちです！ 急いで！」

「う、うん・・・」

俺は柊さんの手をとってイリーナの下へと全速力で走った。

（急いでマスター！）

そんなイリーナの声が心に直接話しかけてきた。

その間も恐竜は俺たちのあとを追ってくる。

柊さんは恐竜を見て目を丸くし、

「恐竜・・・？ え？ どして？」

と少々混乱気味だった。

（急いで！）

「もうすぐだ！」

死ぬ思いで疾走してようやくたどり着いたが、

「う、嘘・・・」

柊さんが驚きの声を上げていた。

俺も驚いていたがそれ以上に混乱していた。

なぜならイリーナがいた場所には・・・。

「これって・・・ペガサスだね？ 藤堂くんが召喚したの？」

「そんな覚えは・・・」

「乗って！」

ペガサスが切羽詰ったように言う。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「なにをしているの！ 早く乗って！」

俺と柊さんが呆然としていて、ペガサスはエメラルドの瞳で俺たちを見つめて言った。

純白の白い体と翼が俺と柊さんを囲う。

「二人とも早く乗ってよー！ ここなんだか変な魔法がかけられて気持ち悪いのー！」

泣かせてしまった。

「あ、ああ、悪い」

言って俺はイリーナの背に飛び乗った。

しかし変な魔法ってなんだ？

まあいいか。

俺はイリーナの背の上から柊さんに手を差し伸べた。

「柊さん」

「は、はい！」

差し出した手を握り返した柊さんは、何故か顔を赤らめてはうつとりとした表情で俺を見つめていた。

「二人ともしつかり？まっつてね！」

言っているとイリーナは黒く頑強そうな蹄で地面を蹴り上げるとその神々しいほど美しい体が宙に浮かびあがった。

「夢みたい・・・私・・・」

「空なんて魔法でいつでも飛べるじゃないですか」

「そ、そうじゃなくて・・・」

「柊さん？」

「昔、お母さんに読んでもらった絵本に憧れていたの・・・」

「どんな絵本なんですか？」

「主人公はごく普通の女の子だけど、ある日悪い魔法使いに狙われるの」

「またどうして？」

「その女の子の心臓は悪い魔法使いがずっと捜していた不死の薬の素になるの」

「な、なかなかグロテスクな内容の絵本なんですわ・・・」

「うん。私も小さい頃はお母さんにしがみついて聞いていたんだ」

小さい頃の柊さんかー。

それは可愛かったんだろうな。

「それで柊さんはいまの話のどこに憧れたんですか？」

「あのねー、いまの話のどこに憧れる要素があるのよ！」

「いや、だから俺も気になって聞いてるんじゃないですか」

「もう・・・このお話には続きがあつてね、悪い魔法使いに狙われた女の子をたまたま通りかかった王子様が助けてくれるのよ」

「なんだか適当なストーリーですね」

「いちいちケチつけないでっ！」

「はい」

「それでね、その王子様は白馬に乗って現れるの！王子様は悪い魔法使いから女の子を救い出し、二人は互いに一目惚れし結婚するのよ！」

白馬に乗った王子様って・・・ありきたりだ。

「それから私はいつか白馬に乗った王子様が私を迎えに来てくれることを夢見ていたの。そんなことないってわかっていたけど、夢

見るくらいならいいでしょ？ でも、その夢がこんな形で叶うなんて思ってもみなかったな・・・」

言つて、柊さんは俺の胸に体を預けてきた。

「ひ、柊さん!？」

「いまだけでいいから・・・」

「柊さん・・・」

「お願い。このままもう少し・・・」

そんな柊さんを目の当たりにして、俺はまたしても柊さんを愛しく感じてしまった。

いいか俺！

俺はもう柊さんの恋人ではないんだぞ？

抱きしめたい！

なんて思つのはいいが実行するなよ俺！

頑張れ俺！

耐えるんだ俺！

「と、藤堂くん・・・」

「はい？」

「苦しい・・・」

「え？」

「抱きしめるならもう少し優しくして。私はどこにも逃げないから」

無意識のうちに俺は力一杯柊さんを抱きしめていた。

なんてことしてくれたんだよ俺はよー！

っーか意志弱すぎだろ俺！

自分で自分が情けない。

「す、すすすすいませんっ！！俺はなんてことを・・・」

「謝らないで・・・」

「でも・・・」

「いいの。それに私はうれしかったから・・・」

「でも、俺には柊さんを抱きしめる資格なんてないのに・・・」

「どうして？」

「だって俺なんか柊さんと・・・」

「藤堂くん、ごめんね」

「え？」

と、驚く間もなく俺の唇は柊さんに奪われた。

「ひい……らぎさん？」

「あなたが好きです。私とお付き合いしてください」

言って、柊さんは真摯な眼差しで俺を見つめてくる。

「いまのは……え？　いまなんて……？」

「私のファーストキス。藤堂くんに捧げられてよかった」

凶悪なほどかわいい笑顔でそんなことを言ってくれる柊さん。

「ただ、藤堂……竜也くんのファーストキスの相手が私じゃないのが少し残念」

「どうして俺なんですか？　俺はあんなに柊さんを悲しませたり、酷いことをしたのに」

「そんなの私にもわからないわよ……」

「へ？」

「でもね、竜也くんと会えなかった日々が辛かった。竜也くんに



酷いことを言ったとすぐ後悔した。竜也くんに別れようと言ったあと何度も泣いてしまった。私は竜也くんのどこを好きになったの？ 竜也くんのなにを好きになったの？ わからない……。だけど、私は竜也くんが好き。私の心は竜也くん一杯。これは恋なの？ 私は恋がどんなものかわからないからこの気持ちに恋なのかどうかも確かめられない。でも、私は竜也くんが好き。あんなに辛い思いは二度と味わいたくない。だからね……」

「柊さん……」

「私の側にいてください。いまみたいに私を強く抱きしめてください」

はあ、と俺はため息をついた。

「私じゃ……駄目かな？」

「いえ、そうじゃないです。自分が情けなくて」

「竜也くん？」

「こんな俺でいいんですか？」

「うん」

「魔法が使えなくてもいいんですか？」

「うん」

「貧乏でもいいんですか？」

「うん」

「柊さんを・・・また好きになってもいいんですか？」

「うん！」

俺は柊さんを優しく抱きしめた。

そして、今度は俺からキスをする。

「俺も・・・」

「竜也・・・くん？」

「俺もファーストキスを柊さんに捧げられてよかったです」

「え？ でも竜也くんのファーストキスの相手はマリン先生じゃ・・・」

「俺からキスしたのは柊さんが初めてです」

「竜也くん・・・」

「そしてこれからも俺がキスをする相手は柊さんだけです」

「私も・・・です」

言って、俺たちは互いに抱きしめあった。

「ねえ」

と、そんな俺たちを無粋な声が邪魔をする。

「あのさ、ラブラブするのはいいんだけど、私の背中でラブラブするのはやめてくれないかな？」

忘れてた。

俺たちはいまイリーナの背中に乗っているんだった。

「でも、まあいっか！ これで、マリンに見上げ話がまた一つ増えたことだしー。あとー、グリシーヌにもいまの話してあげようつと！」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！」

「うーん？ なんですかマスター？」

「それだけはご勘弁をー！」

「うーん、どうしよっかなー！」

「なんでも一ついうことを聞くから許してくれー！」

「本当に？」

「ああ！」

「なんでもいいんですよねー？ マスター？」

「あ、ああ・・・」

「だったらさー、『美紀』って呼んでみてよ！」

「は？」

「二人ともせっかく恋人同士になったんでしょ？ 私の背中で。あんなに激しく抱き合っていたじゃない。私の背中で。美紀はいいんだけどさー、マスターはおかしいよ。恋人同士なら名前で呼び合うべきじゃないかな？ と、私は思うんだよねー」

柊さんを名前で呼べだと？

「それは、そのー、急に名前で呼ぶのはどうかかな？ 俺は柊さんの後輩なわけだし呼び捨てにするのはどうも・・・」

「呼び捨てが駄目なら『美紀さん』でもいいよー？ あ、別に嫌なら強要はしないけどねー。まあその場合、今日の夜にはどういった経緯でマスターと美紀が恋人同士になったのか陵聖学園関係者全員に事細かに伝わっていると思うけどそれでもいいなら・・・」

「すいませんイリーナ様、お許してください」

「えー？ マスターが謝ることなんて全然ないじゃないですかー」

はからずも俺はイリーナに柊さんの恋人としての後押しをされた。

覚悟を決めた俺は柊さん・・・美紀さんの顔を見つめ、

「み、美紀・・・さん」

「な、名前で呼ばれるのってちょっと恥ずかしいね・・・でも、それ以上にすごくうれしい。ありがとう竜也くん。それと、イリーナさん」

「ふふふ、今後とも私たちのマスターをよろしくねー!」

名前を呼ぶだけでこんなに恥ずかしいなんて・・・。

それでも美紀さんが喜んでくれるならいいかな？

やばいな俺。

完全に美紀さんに惚れちまったみたいだ。

最初の出会いからは想像もつかねーよ。

「竜也くん。これからよろしくね!」

「はい!」

「あー、二人とも、向こうについたら浦島太郎の気分を味わえるかもしれないよ」

と、イリーナがわけのわからないことを言っていたがこのときの俺たちは、イリーナの言った言葉の意味を少しも理解していなかった。

その後、俺たちが陵聖学園に着いたのは夜の十時を超えたあとだった。

第十八話：絵本って、たまにグロテスクな表現が含まれているように感じるのよ

お疲れ様でした！

ご意見、ご感想、お待ちしております！

ではでは！

番外編〜第三話〜：黒崎マリアちゃんのお友達（前編）（前書き）

こんな、こんな力なら俺はいらない！！

全てを終わらせて、こんな力とは決別してやる！！

いえ、特に意味はありません。

今回の内容とも関係はありません。

では、番外編です。

どうぞ！！

番外編／第三話：黒崎マリアちゃんのお友達（前編）

黒崎マリアの友達。

竜也がいない間、寂しい、もとい暇だった私は、マリンの提案で虎之助、マリア、きぬ、すもも、と親交を深めることとなった。

昨日は虎之助の日常を観察したが、なんだか見てはいけないものを見たように思ってしまうのは私の気のせいなのだろうか？

まあいい。

今日は、黒崎マリアを観察することしよう。

九時。

そついうわけで、私は今、マリアの部屋にいる。

「　　というわけだ。今日はよろしく頼む」

「・・・・・・・・よろしく」

さて、とは言ってみたものの、実際どうしたものか。

昨日は虎之助の日常を観察して、失敗だったわけだが・・・。



「マリア」

「・・・何？」

「私はお前ともっと親交を深めたいと思っている」

「・・・いいよ」

そう言つて、マリアは急に衣服を脱ぎ始めた。

「つて！ ちょっと待て！ マリア！ お前はいきなり何をして  
いるのだ！？」

「・・・あなたは私と親交を深めたいと言つた」

「う、うむ」

「・・・おーけー」

続けて衣服を脱ぎ始めるマリア。

どうしてだ？

どうしてこうなる！？

「待て！ 待て、待て、待て！ 何故服を脱ぎ出す！」

「・・・どうしてそんなことを聞くの？」

「は？」

逆にどうして脱ぐのだ？

私が何か間違っているというのか？

そうか、そうかもしれんな。

よし、今一度、ここまでの流れを思い出してみよう！

マリアと仲良くなりたい。

（無表情）いいよ。

服を脱ぎ始める。

びっくりした。

マリアの暴拳を止める

（無表情）おーけー。

何に対してのおーけー！？

戦闘（脱衣）再開！

駄目だ！！ どう考えても服を脱ぎ始めるまでの過程がわからん  
！！

「・・・あの、私何か間違っていた？」

申し訳なさそうな顔で言うマリア。

そのマリアは現在下着姿。

「うむ。なんというか、まずは服を着なさい」

「・・・わかった」

そう言つと、マリアは「そそと脱いだ服を着直していく。

十時。

マリアが服を着直してから三十分かけて、どうして人前で服を脱いではいけないのかを懇切丁寧に説明した。

「・・・ごめんなさい。人と親しくするには、まず服を脱いで裸の付き合いをすることだと両親に教わっていたので」

「うむ。今度マリアのお父上、お母上とは直に話したいものだな。特に娘について」

「・・・わかった。伝えておく」

「う、うむ。と、それはそうと、私はマリアと今以上に親しくなりたいわけなのだが、そうだな。マリアの趣味は何なのだ？ 手始めにそれを」

「・・・・・・・・つぽ」

「マリア？」

顔を赤らめたりしてどうしたというのだ？

風邪でも引いているのだろうか？

「・・・・・・・・えっち」

「・・・・・・・・」

何故だ！？

何がえっちなのだ！？

まさか・・・。

つまり、マリアの趣味はそうだったものなのか？

それは意外過ぎるぞ。

「・・・わかった。あなたがそこまで言うのなら、いいよ」

そんな熱心に頼みこんだつもりはないぞ！？

というか、そういった、なんだ・・・え、えっちな趣味について  
熱烈な興味を示していたのか私は！

自分で自分が情けない！

「そして恥ずかし過ぎるぞ！！！」

「・・・待ってて。今、私の秘蔵コレクションを持ってくるから」

「い、いや」

私はなんと浅ましく、愚かなのだろうか。

幻想種最高最強と謳われた竜族たるこの私が・・・。

もう・・・竜也に合わせる顔がない。

「・・・お待たせ」

覚悟を決めよう。

それにしても、黒崎マリア。

なんと恐ろしき存在なのだ。

この私を、かつてここまで追い詰めた者は初めてだ。

ふふ、私も歳を取ったものだ。

「・・・お披露目」

特産みかんという文字の入った段ボール箱を私の目の前に置いたマリアの顔は、うれしくてたまらないというように、にやけていた。

「・・・まずは、私の一番のお気に入りを見せる」

にっこにこと良い顔で笑いながら言うマリア。

こんな顔もするのだな。

「・・・じゃーん」

取り出したるは、小さな日本人形だった。

赤い着物を着たその日本人形を、マリアは愛おしそうに抱きしめる。

あれ？

な、なんだ、やはり私の勘違いだったのか。

そうだな、マリアのような女の子が、え・・・えっちな趣味を持っていると思えぬしな。

「はて？　なあ、マリア」

「・・・なに？」

今、マリアの抱いている人形が私を見ていたような・・・。

まさか・・・な。

「いや、何でもない」

恐らくは私の勘違いだったのだろう。

そう思い、再び人形に視線を戻すと。

にたあ、と不気味すぎる笑みを浮かべた人形と私は目が合ってしまった。

「あー、マリア？ その、なんだ・・・人形が」

「・・・私の一番のお気に入りのゴメスがどうかした？」

瞳をキラキラと輝かせて、幼い少女のようにうれしそうな顔で笑うマリア。

いや、本当にマリアがこのような顔で笑うとは意外だ。

だからこそ言えない！！

その人形、呪われてるのでは？

なんて言えない！！

というか名前がゴメス！？

一応その人形は女の子だろうに！

そもそも、ゴメスなんて名前を付けたから呪いの人形になってしまったのでは！？

「……あ。言い忘れてたことがある」

人形を抱いたまま、マリアは「ごめんなさい」と頭を下げて言った。

「……ゴメスは呪いの人形。驚かせてしまっていたらごめんなさい」

うむ。

やはり呪われていたのだな。



番外編〜第三話〜：黒崎マリアちゃんのお友達（前編）（後書き）

さて、次は後編ですね。

皆さまに少しでも楽しんで頂ければ幸いです。

ご意見、ご感想などがあれば是非ともお待ちしております。

ではでは〜！

番外編〜第四話〜：黒崎マリアちゃんのお友達（後編）（前書き）

突然ですが、私こといふじは水樹奈々さんのファンです。

ですが、ライブには一度も行ったことがありません。

C D、D V Dを購入するので精一杯なんだよー！！

一度はライブを観に行きたいものです・・・。

あ、すみません。

番外編、はじまるよー！！

番外編〜第四話〜：黒崎マリアちゃんのお友達（後編）

十五時。

五時間が経過した。

「・・・これはとてもキュート」

そう言ってマリアが見せてくれたのは、どこからどう見ても、ザ・  
わらん人形。

それも、使用済み率120%。

怨念がいっぱい詰まった釘付きの豪華仕様。

「・・・富士の樹海で一週間かけて探し出した」

使用済み+ブランドもののようだ。

マリアは、どこか誇らしげに言う。

そのマリアは褒めて欲しそうに私を見つめてくる。

「う、うむ。マリアはすごいな」

「・・・えへへ。あなたは良い人」

私はマリアの、呪いのアイテムご紹介ツアーを五時間ぶっ続けて、

たつぷり堪能させられていた。

「・・・だから、あなたのマスター、藤堂くんも良い人」

「当然だな！ 竜也ほど素晴らしい男は、この世の中のどこを探しても見つからないだろう！」

「・・・質問いい？」

「いいぞ」

「・・・藤堂くんは優しい？」

「ああ！」

「・・・そう。それなら安心」

「何が安心なのだ？」

「・・・・・・何でもない」

そうは言うが、何でもなくはなさそうな表情をしているマリア。

具体的には、頬を少し赤らめている。

「大丈夫か、マリア？」

「・・・大丈夫」

さらに赤く頬を染めるマリア。

本当に大丈夫なのだろうか？

「・・・三時のおやつ」

と、唐突にそう切り出して、マリアはパチンと指を鳴らす。

すると、マリアが愛おしそうに抱きしめていた呪いの人形ゴメスの体が、激しく揺れ始めた。

体が一揺れするたびに、髪が少しずつ伸びていく。

うむ。

幻想種である私が言うのも何だが、幽霊って本当にいるのだな。

正直、気味が悪い。

「・・・今日はアップルパイが食べたい」

『わかりましたわ。では、不肖このゴメスが世界で最高に美味しいアップルパイを、マリア様の為にご用意致しましょう』

ゴメスが喋った。

もう、呪いなんてレベルを超越してしまっている。

『失礼ですが、グリシーヌ様もマリア様と同じものでよろしいでしょうか？』

ゴメスが私の名前を知っていた。

知らぬ間に、私は呪われていたらしい。

竜也、頼むから早く帰ってきてくれ。

私は今、本当にあつた怖い話を身を持って再現している。

「う、うむ。よろしく頼む」

『畏まりました。では、少々お時間を頂きます』

言つて、ゴメスは厨房に向かつて歩き始める。

そのゴメスの後ろを、マリアの秘蔵コレクションズが続く。

あー、何と言つたかな。

「そっだ、百鬼夜行だ」

「・・・何が？」

私の独り言に、マリアは不思議そうに首を傾げていた。

十九時。

『さあ、グリシーヌ様。どんどんお食べください！ 今日にはマリア様が人生で初めてお客様をお迎えになった記念すべき日です！

どんなお料理でも、この私がリクエストにお応え致しますわ!』

テーブルに並べられた料理を前に、そう言うゴメス。

どうやって作ったのだ?

というか、小さな人形が料理を作るといのは、物理的に無理なのでは?

「・・・恥ずかしい。ゴメス、恥ずかしい」

『まあまあマリア様ったら! 大事なことですから同じことを二回言ったのですね! さすがはマリア様ですわ! このゴメス、感服致しました!』

呪いの人形とマリアの会話。

何度見ても慣れるものじゃないな。

『グリシーヌ様』

急にゴメスに話を振られてしまった。

「な、何だ?」

『本日は、本当にありがとうございます。マリア様には、その、お友達があまり いえ、まったくおられなかったのですが、今日のマリア様は本当に楽しそうでした。これから、マリア様のことをよろしくお願い致します』

「ああ。こちらこそ、竜也共々仲良くしてもらいたい」

存外、ゴメスは礼儀正しかった。

「・・・ゴメス、嘘は駄目」

『マリア様？』

「・・・友達なら、ゴメスや皆がいた」

言って、マリアはゴメス＋百鬼夜行ズを見つめる。

『まあまあまああつ！ な、何ともつたいないお言葉を！  
ありがとうございますわ、マリア様！ しかしですね、私どもは、  
お嬢様の魔力供給によって動いているに過ぎない人形ですから  
』

何だ、魔法だったのか。

呪いや、霊的な何かで動いているわけではないのだな。

そう思っていると、

「・・・そんなことを言つては嫌」

マリアは瞳に涙を浮かべながら言った。

『ももももももも申し訳ございません！ 私が間違っていましたわ！！  
ですからお泣きにならないでくださいまし！！』

慌てふためくゴメス。



そんなゴメスに続いて百鬼夜行ズも、

『マリアたま〜』

『泣かないで〜』

『ごめんなさい〜』

そう言う。

うむ。

心温まる光景が、あなたの知らない世界なのかわからない光景だな。

「・・・わかってくれたなら、いい」

『はい。申し訳ございません』

「・・・あの」

言つて、私を恐る恐る見てくるマリア。

「・・・私とお友達になってくれる？」

「何を言う。既に私たちは友人だろう。竜也も、虎之助も、きぬも、すももも、マリンも、皆マリアの友達だろう」

私の言葉を聞いて、マリアはきよんとしていた。

「・・・そうなの？」

「そうだろう」

「・・・そうだったら、とてもうれしい」

花が満開に咲く瞬間のような、そんな素晴らしく愛らしい顔で笑うマリア。

ぬう。

何と愛らしく、それでいて保護欲を掻き立てる笑顔！

あまり感情を表に出さないと思っていたマリアだったが、そんなことはないようだ。

「・・・ゴメスや皆ともお友達になってくれる？」

『あら、まあまあまあまあまあまあまああつ！！  
私どももお友達になってくださるのですか！？』

「う、うむ！ 望むところだ！」

返事を返すのに、最終決戦に臨む覚悟が必要だった。

しかし、そんな決死の覚悟で返事をしたとは、うれしそうにはしやぐマリアたちを見てしまっではとても言えなかった。

今日わかったことは、マリアはとても素直で可愛らしく、愛らしい女の子だということ。

趣味は少々　いや、かなり特殊だが。

番外編〜第四話〜：黒崎マリアちゃんのお友達（後編）（後書き）

さてさていかがでしたでしょうか？

次の番外編は誰を書こうかな？

まだ、次の話を番外編にするか、本編を進めるかは決めていないのですが（笑）

ご意見、ご感想などがございましたら、是非ともお待ちしております  
〜す！！

では〜！！

十八・五話：皆で覗けば怖くない（覗きは犯罪です）（前書き）

はい。

今回は（も？）十八話と十九話を結ぶ補足的なお話です。

それでは、本編をどうぞ！

十八・五話：皆で覗けば怖くない（覗きは犯罪です）

竜也と美紀が、イリーナの背中でキャツキヤ、ウッフ、イチヤイチヤしていたその時のこと。

「なあ先生」

「な〜に虎ちゃん？」

「こんな覗きみたいなことしてえーんかな？」

「だって〜、竜ちゃんとひーちゃんが心配だったんだもん！」

「心配ってなー、先生が竜也と先輩を転送したんやないか」

「ちょっと黙っててクソ野郎。いますごくいいところなんだから。

あー！ 柊先輩がキスしたー！」

「どれどれ！ ほほう！ 美紀もやるわねー！ 自分からなんて！ 親友として私はあんたを誇りに思うよっ！」

「……………激しい」

「はっはっは！ 竜也くんはうらやましいねー！」

「お前も黙ってる。モーガン・フリーンに似てるからって調子

に乗ってるとぶつ殺しますよ？ 理事長先生」

「はい、すみません……」

マリン、すもも、虎之助、きぬ、マリア、モーガン・フリーン。

六人はいま、マリンの『ヴィジョン』という魔法で、竜也と美紀の安全を確認……訂正覗きをしていた。

『ヴィジョン』という魔法は術者の魔力によって覗き見ることができる範囲が決まる。

マリンの魔力ならば日本からオーストラリア辺りまでの範囲を見ることが出来る。

しかし、何故かマリンはなにかとてつもない魔力の妨害にあい、いままで二人の様子を見ることができなかった。

「おー！ 今度は藤堂くんから美紀へのキスだよ！ 自分のマスターのこういう場面を見て、仕える身としてはどう思われますか？ グリシー又さん」

「うむ、そうだな。相手が美紀ならば問題はない」

「おおー！ グリシー又さんのOK入りましたー！」

「ただ……」

「ただ？」

「ちょっと寂しい。美紀にばかりかまって私たちは放っておかれるのではないかと考えてしまうと・・・」

「あはは〜！ グーちゃんかわいい〜！ 大丈夫だよ〜！ 竜ちゃん優しいもの〜！」

「そ、そうか？ マリンは本当にそう思うか？」

「うん〜！」

「あ！ もうすぐ二人が戻ってきますよ！ 先生も先輩も準備しましょう〜！」

「そうだね！ 美紀と藤堂くんのお祝いだもんね！」

「・・・ついでに優勝記念も」

「そうでしたな！」

「ほらほら〜！ みんな急いで着替えなきゃ〜！ あ〜！ グーちゃんも着替えるんだよ〜！」



十八・五話：皆で覗けば怖くない（覗きは犯罪です）（後書き）

ただいま番外編を執筆中！

ご意見、ご感想などございましたら是非！

それでは今回はこの辺で！！

番外編〜第五話〜：朝比奈きぬさんの悩み（前編）（前書き）

ペルソナ5はいつ頃発売されるのだろうか？

そんなことを考えている作者です（笑）

では、番外編をどうぞ。

番外編／第五話：朝比奈きぬさんの悩み（前編）

朝比奈きぬの悩み。

竜也がいない間、寂しい、もとい暇だった私は、マリンの提案で虎之助、マリア、きぬ、すもも、と親交を深めることとなった。

昨日、一昨日と、虎之助、マリアと親交を深めてきたわけだが。

虎之助は・・・アレは変態と呼ぶべき存在なのか？

いやいや、あんなのも竜也の親友だ。

恐らく、来るべき日の為にうつけを演じているだけなのだろう。

本物のうつけである可能性はかなりの高確率だが。

マリアはとても良かった。

あの娘はもうパーフェクトだった。

あの娘の趣味は・・・少し怖かったが。

では竜也のクラスメートで、残る最後の一人、きぬはどんな人間なのだろうか？

そついうわけで、私は今、きぬの部屋にいる。

九時。

「　　というわけだ。今日はよろしく頼む」

「はい。よろしくお願いします」

「む？」

「どうかしましたか？」

「いや・・・」

きぬは人好きのする笑みを浮かべて私を見て言う。

うつーむ。

何かが変だ。

初めてきぬを見た時と、今とではどこかきぬに対する印象が違う。

何が違うというのだ？

うつーむ。

「グリシーヌさん」

「どうした？」

「今日、グリシー又さんが私の部屋にお越しになられた用件は先ほど伺い存じ上げております。グリシー又さんは私のことを知ろうとしてくれているんですね？」

「うむ、そうだ」

「でしたら、私はどうしていればよろしいでしょうか？ 何かグリシー又さんのお尻にならなれたいことで、それが私に答えられることでしたら何でもお答えしますけど」

ううーむ。

やはり、どこかきぬに違和感を感じてしまう。

はっ！

もしや、目の前にいるこのきぬは偽物なのか！？

いつの間にか本物と偽物が入れ替わっているというのか！？

だとすれば、本物のきぬは何かの事件に巻き込まれてしまった・・・と？

私がそう考えていたときだった。

コンコン。

「朝比奈さん。今、少し時間いいかな？」

ドアを叩く音の後に聞こえてきた声は、陵聖学園の理事長である牛丸普利男のものであった。

「はい！ 今行きます。すいませんグリシーヌさん。少し失礼しますね」

「わかった」

私がそう答えると、きぬはドアに向かっていった。

うつーむ。

私はきぬに対し、何故このような違和感を感じているのだろうか？

謎だ。

「いやー、すまないね。こんな朝の時間帯に。きぬくんはどうしても急ぎで確かめてもらいたい書類があつてそれで」

「ごたくはいいからさつさと用件だけ言えこのやろつ」

きぬは力を溜めている。

「え？ ああ、すまない。その」

モーガン・フリーンは驚いている。

「おいこら、ちょっと待て。すまない？ ごめんなさい・・・だろ？」

きぬは更に力を溜めている。

「あ、ああ」

モーガン・フリーンは動揺しだした。

「ひょっとして、ちょっとモーガン・フリーンに似ているからって調子に乗ってんじゃないですよ？ もしそうだとしたらどうしましょうか？」

きぬは力を溜めながら、更に呪文を唱えだした。

「私はどうされてしまうのですか？」

モーガン・フリーンは怯えている。

「あれ？ 知りたいですか？」

きぬは残酷な笑みを浮かべてモーガン・フリーンを見つめた。

「あ、そのー、ああ！ すまない！ 用事を思い出したよ！ いやー、歳を食うと物忘れが激しくなっていかなね！ き、今日はもう失礼するよ！ 書類の件は後日マリン先生にでも頼むとするかな」

モーガン・フリーンは逃げ出した。

「さつき急ぎで確かめてもらいたいと言っていましたよね？」

しかし、回り込まれた。

「それは、その・・・」

モーガン・フリーンは再び逃げ出そうとしている。

「もしかして、書類云々は口実で、本当の目的は私のような弱い女子生徒をその毒牙に掛けようとしていたとか？ 理事長先生がそんな最低の人間だったなんて・・・。仮にも聖職者である人間がそんな・・・」

きぬは力を溜め、呪文を唱えながら携帯電話を取り出した。

「そんなことをするわけがないじゃないかー。というか朝比奈さん。何故君は今携帯電話を取り出しているのかな？ 何故、ボタンを押し始めるのかな？ 何故、ボタンのプッシュが三度なのかな？ 何故・・・」

モーガン・フリーンは今度は無言で逃げ出した。

「もしもし警察ですか？ 今私の目の前に理事長を名乗る変質者がいます。大至急逮捕した上で、豚箱に放り込んでください。出来れば死ぬまで」

しかし、モーガン・フリーンは再び回り込まれた上に、国家権力を呼ばれてしまった。

「違う！ 違うよ！ 私は生徒に 女性にそんな邪な気持ちを



抱く人間ではないよ！」

モーガン・フリーンは反撃を試みた。

「そ、そうだったんですか。それは・・・その、すみません。変な勘違いをしてしまいました」

きぬは国家権力を呼びだすことをやめた。

「わかってくれたのかい！？　そうか、そうか！　いや、わかってくれたのならいいんだよ！　私もすまなかったよ！　大きな声を出して」

モーガン・フリーンは油断した。

そして、不意を突かれた。

「いえ、こちらこそすみません。まさか、理事長先生が、同性しが愛せない、そういった組合の方だとは・・・」

きぬは今まで溜めに溜めていた全ての力を解放した。

「・・・は、はははああああ」

モーガン・フリーンは壊れてしまった。

うむ。

間違いない。

アレは本物のきぬだ。

番外編〜第五話〜：朝比奈きぬさんの悩み（前編）（後書き）

ご意見、ご感想などがあれば是非お待ちしております!!

ではでは

番外編〜第六話〜：朝比奈きぬさんの悩み（後編）（前書き）

なんとか本日中に後編をお届けできました。

では、番外編どうぞー！

番外編／第六話／：朝比奈きぬさんの悩み（後編）

十三時。

「なあ、きぬ」

「なんででしょう？」

牛丸普利男ときぬのごたごたから二時間が経過。

「何故、お前は男に対してだけ口が悪くなるのだ？」

素直な疑問を聞いてみることにした。

「ええーと・・・」

どうしてか、きぬは言い辛そうな顔で私を見ている。

「何か理由でもあるのか？ 虎之助や牛丸普利男、そして、あの顔を思い出すのも汚らしい村人Aは、まあ仕方がないとしても、私のマスターである竜也が先ほどの牛丸普利男のように接せられるのはあまり面白くないのだが」

「それはその・・・ごめんなさい」

「いや、謝ってほしいのではない。今までのきぬの態度を見ていればわかることだが、男に対してはかなり口が悪くなるのに、女と話すときは今のような穏やかさだ。何か事情でもあるのではないか

と思ってだな。何か悩みがあるのなら、私が相談に乗るが……どうだろう?」

私がそう言うと、きぬはもともと何かを呟くように言うが聞かない。

照れたような、何かを怖がっているような、そんな態度だった。

「あの、そうれじゃあ質問いいですか?」

「ああ」

きぬは一つ大きく深呼吸して言った。

「私って、男の子に対してそんなに口が悪いんですか?」

自覚がないのか?

いや、まさかな。

あんなに……。

「うむ。まあ、なんだ、心の弱い男ならば、女と対峙すると恐怖を感じるようになるには充分なレベルではないかと思うが……」

「そんなに酷いですか……」

目に見えて落ち込むきぬ。

まさか本当に自覚がなかったのか?

「あの・・・ですね。実は私、男の子が怖いんです」

ここにきて、まさかの展開だ。

男が怖い？

信じられん。

普段のきぬを見てみると、とてもそんな感じではないからな。

どちらかと言うと、男を怖がっているというよりも、男を見下している感じだ。

そのきぬが・・・まさか男が怖いなどと。

「男の子と話をしたのって、実は本当に最近なんです」

「何？」

「具体的に言うと、名前は忘れましたが、柊先輩にストーカー行為をしていた男の子に声を掛けたのが、私の人生初めての男の子との会話だったんです」

ああ、あの村人Aか。

それにしても、人生初の異性との会話があのような「ゴミ虫だとは・・・」

きぬには同情を禁じ得ないな。

「私の実家は本当に田舎で、周りに同世代の男の子はいなかったんです。それに、そもそも、男の人自体いませんでした」

「そうは言っても父親は」

と、そこまで言いかけて私は口を閉じた。

しまった！

聞いてはならないことを聞いてしまったか。

だが、

「お父さんは生きていますよ？ でも、私はお父さんと直接会ったこともなければ、話したこともありません。仕事でいつも家にはいませんし。写真に写っているお父さんなら知っているんですけど」

「そうだったのか」

「お父さんがどんな人なのかは、お母さんとマリン先生に聞けば教えてくれるんですけど、改めてお父さんのことを聞くとすると、恥ずかしくて。お母さんはお父さんのことをいつもべた褒めしているし、マリン先生からの評価もいいみたいなんですけど」

ここで一つ疑問が発生した。

母親に父親のことを聞くのはわかる。

だが、どうしてマリンにも聞くのだ？



まさか、マリンときぬの父親は男女の仲なのか？

「これがそのお父さんです」

そう言って、きぬはスカートのポケットから一枚の写真を取り出した。

そこに映っていたのは、筋骨隆々とした身長が二メートル近くありそうな男だった。

「む？」

私はこの写真に写っている男を知っているぞ？

マリンの旧友にして、現在マリンの執事のようなことをしている男。

名前は・・・たしか朝比奈大五郎。

そうか、この男はきぬの父親だったのか。

「まあ、お父さんの話は置いておくとして、私には小さな頃から許嫁がいるらしいんですよ。私はその許嫁と面識はありませんが、何でもお母さんのお友達の子供らしくて、母親同士が勝手に決めただけなんです・・・」

そこで溜息を一つ。

「私、本当にこの学園に入るまで男の子と話したことがないんで

すよ。そんなだから、私に許嫁がいるなんて言われてもどうすればいいのかわかりませんし、そもそも男の子とどう接すればいいのかも」

大変なんだな、きぬも。

素直にそう思った。

「男の子を前にすると、その、すごく怖くなってしまつて、何か話さなきゃと思うと、もうパニックになつちやつて。この前の柊先輩のストーカーさんとお話したときも、本当は元気づけてあげようと思つてたんです。ストーカーっていうのは悪いことだと思いますけど、そこまで真剣に好きになれるっていうのはすごいことだと思うんです。だから、元気づけてあげようとしたんですけど、気付いたときには、柊先輩のストーカーさんがすごく落ち込んでるみたいで……」

なるほど。

あのときのアレは村人Aに止めを刺していたわけではなく、きぬなりに励まそうとしていたのか。

結果はともかくとしてだが。

「それで、今すごく悩んでいることがあるんです」

「何を悩んでいるのだ？」

「……さっき私に許嫁がいるつてお話ししましたよね？」

「ああ、言っていたな」

「昨日、お母さんから電話があつて、許嫁の名前を教えられました」

「今まで許嫁の名前を知らなかったのか？」

そう聞くと、きぬはコクコクと頷いて答えた。

「お母さんが話すことはいつもお父さんのことばかりでしたから」

そう言つて苦笑するきぬ。

「それで、許嫁とやらの名前を聞いて、どうしてきぬは悩む必要があるのだ？」

そこで、きぬはさらに深い溜息を吐いた。

どう伝えようか迷っているのか、きぬが次の言葉を放つのに少し時間がかかった。

しかし、やがて意を決したようにきぬは口を開いた。

「私の許嫁の名前は……………」

「名前は？」

「藤堂竜也くんです」

十七時。

きぬの口から発せられた衝撃の事実。

竜也ときぬは親同士が決めた許嫁であるらしい。

そのことをきぬが知ったのは昨日であり、竜也も自分に許嫁がいるということを知らないらしい。

「藤堂さんと私が許嫁であるといっても、実際あまり実感がないんですよね。それよりも正直な話、私としましては柊先輩を応援しようと思っているぐらいです」

「ふむ、どうしてだ？」

「柊先輩って、藤堂くんのが大好きでしょう？　というかベタ惚れですよ？　私は柊先輩のことを尊敬していますし、二人には上手くいつて欲しいと思ってます。まあ、本当のことを言うと、藤堂くんのは嫌いではないですけど、藤堂くんがどんな人なのか私は知りませんし、知らないのに許嫁だからどうこうっていうのは、私自身なんだか・・・」

まあ、当然の反応だな。

「でも、お母さんが私の許嫁に選ぶくらいですから、藤堂くんは良い人なんだと思うんです。そうですね？」

「当然だな！　竜也はどんな人間よりもカッコイイ！　優しい！

可愛い！」

「ふふふ。グリシー又さんは藤堂くんが大好きなんですね」

「ああ！ 竜也が望むなら私は竜也のこの身を捧げる所存だ！」

「グリシー又さんって、名前もそうですけど、言うこともたまに  
凄く乙女ですよね？」

「こ、こらっ。大人の女をからかうものじゃない！」

「・・・え？」

と、突然おかしな声を出してきぬは固まった。

どうしたのだろうか？

「きぬ？」

「あ、いえ、グリシー又さん今なんて言いました？」

「きぬ？」

「いえ、もう少し前です」

「ふむ、どうしてだ？」

「あー、戻りすぎちゃいました」

「当然だな！ 竜也はどんな人間よりもカッコイイ！ 優しい！」

可愛い！」

「もう少し先ですね」

「きぬ？」

「まさか私をからかって遊んでいませよね？　というか、良く今までの会話を鮮明に覚えていますね？」

ふむ。

きぬをからかうのは存外楽しいな。

だがそろそろ止めておいてやろう。

なんだかもう、きぬが泣きそうだ。

「私が女だということか？」

「そうですそうです！　グリシー又さんって女性だったんですか！？」

何故そんなに驚く必要があるのだろうか？

私はこんなにも女らしいというのに。

「私、てつきりグリシー又さんは男性だと思っていました」

「そうなのか？　だが、私は自分が男などと言も言った覚えはないぞ？　そもそも男でグリシー又という名前は面白過ぎるな」

「そう・・・でしたっけ？」

「そうだ」

「そうですか」

「うむ。ところで、きぬの悩みだが・・・」

「ああ、もういいです。何だか今ので全部どうでも良くなったというか。まあ、なるようになると思いますし。少しずつでも男の子に慣れていこうと思います。許嫁のことです。あ、それと藤堂くんには許嫁の話はしないでくださいね。今、藤堂くんって柊先輩とのことで大変見たいですから。これ以上考え事が増えるのは藤堂くんも疲れるでしょうし」

「わかった」

竜也のことを考えてくれるとは、きぬは中々いい娘だ。

しかし・・・男が苦手か。

なんとかしてやりたいものだな。

番外編〜第六話〜：朝比奈きぬさんの悩み（後編）（後書き）

ご意見、ご感想などがあれば是非ともお待ちしております！

ではでは〜



番外編／第七話：美水すもも軍曹の野望その？（前書き）

ついに山が動いたか・・・。

来るべき時がきたのだ・・・。

ええ。

そうです。

いつものごとく、特に意味はありません。

では、番外編はじまるよー！

番外編／第七話：美水すもも軍曹の野望その？

美水すももの野望。

九時。

「竜也がいない間、寂しい、もとい暇だった私は、マリンの提案で虎之助、マリア、きぬ、すもも、と親交を深めることとなった・・だから、君は今私の部屋に來ているということでもいいんだね、グリシー又くん」

すももはそう言つと、何もかもわかつているというように頷くと、ウインクを一つ寄こす。

「うむ。その通りだ。なので今日はよろしく頼む」

「いいよ、私も暇だしね！　つーか、からかう相手がいないと本当につまんないね！」

それは竜也や美紀のことを言っているのだろうか？

「あー！　そうだそうだ！　グリシー又さんって、女の子だったんだね！　きぬちゃんから聞いたよ！　ワクワク、ドキドキ」

そんなうれしさを隠そうともしない効果音がすももの口から直接聞こえてきた。

何故だか、すももからはマリンと同じ系統の匂いが漂っている。

要警戒だ。

「あのね、わたし、グリシー又さんの人型を見てみたいな  
！」

そう言っておねだりしてくる、すもも。

「だが断る」

「えー！　なんで！　いいじゃん、ちょっとくらい！　見たい、  
見たい、見たい、見たい、見たい、見たい、見たい、見せて、見  
せて、見せて、見せて、見せて、見せて、見せて！」

部屋の中で駄々をこね出すすもも。

全身を使った駄々をこねる行動は、そのうちブリッジ、一人バツ  
クドロップ、一人シャイニングウィザード、一人四の字固めへと発  
展していった。

何と言つか、駄々のこね方がパワフルだな。

しかし、

「こら。いくらこの部屋には私とすももの二人しかいないからと  
はいえ、年頃の娘がそんなはしたないことをするもんじゃない。見  
てみる、スカートが捲れて下着が見えているではないか」

「はっはっはっ。私にはしたない行動をさせたくなければ、今すぐ君の人型を私に見せなさい！」

「では、私はこれで失礼しよう」

「ああ、嘘、ごめんなさい、待って！」

泣きそうな顔で私に縋りついてきたすもも。

何だか哀れだな。

「ごめんなさいー。だって、暇だったんだもんー。あー暇だー。暇過ぎるー」

言いながら、すももは立ち上がり、部屋の奥へと去っていく。

「待たせたかい、ベイビー」

数秒もしないうちに戻ってきた。

戻ってきたすももは何かを運んできていた。

それはグランド・ピアノの形をしていた。

だが、グランド・ピアノにしては小さすぎる。

家庭用のものよりも遥かに小さかった。

大きさは膝の上に乗せられるサイズだ。

だが、決しておもちゃのようにちやちな感じはしない。

そんな矛盾を孕ませたピアノだった。

「そのピアノ、中々に珍しいな。そんな物が売っているとは」

「あー、コレ？ いいでしょうー！ 世界に一つだけの私専用のピアノ……だった。そう、だったのだ。何故過去形なのか？ それを語るには夢くも美しい悲劇の存在を話さねばならないだろう。時は千年ほど遡る。まだ、この地に人類という種が存在していなかった頃に事件は起きた」

うむ。

余計なことを言ってしまった。

すももは、おかしな物語を語り始めた。

そもそも千年前なら人類はいただろうに。

「やあ、ボブ！ 今日中々決まってるね！」

ボブ！？

それ人類じゃないのか！？

人類存在しているぞ！？

「やあ、小次郎！ そういう君だっていつも以上に素敵な女性だよ！」

小次郎って男の名前だろうに！

小次郎 女なのか！？

何だか色々設定がおかし過ぎる。

「それで今日はどうしたんだい？　小次郎が僕を呼びだすなんて？　まさか愛の告白かい？　君からの愛なら二四時間いつでも受け付けているよ」

「ええ、その通り。愛の告白に来たの」

小次郎の口調が激変したぞ！！

「お、おいおい。冗談だろ？ 僕には妻も子もいるんだぜ？」

ボブ妻子持ちだったのか！？

「というか人類どれだけのいるのだ!？」

[illegible]

小次郎の身に一体何が起きたのだ！！

「こ、小次郎？」

「あはっ」

「な、何故・・・なんだ？」

「それが、ボブが残した最期の言葉となった。ボブの腹には、水すも専用の家庭用ピアノよりもさらに小さなピアノがめり込んでいたのだった。そんなボブの姿を見て、小次郎は不気味に笑い続けるのだった・・・」

え？

まさか、これでおしまい！？

一体ボブが何をしたと言うのだ！？

理不尽過ぎるぞ！！

カムバーク、ボブ！！！！

番外編〜第七話〜：美水すもも軍曹の野望その？（後書き）

私は喫煙者です。

4月から煙草が値上がりするそうですね。

そろそろ禁煙しようかな？

それでは〜！

ご意見、ご感想などがあれば是非〜！



番外編〜第八話〜：美水すもも軍曹の野望その？（前書き）

個人的に一番好きなキャラクターがすももです。

だって、ストーリーをどうするかとかあまり気にせず自由に暴走させられるキャラですから（笑）

ではでは、番外編どうぞ〜

番外編／第八話：美水すもも軍曹の野望その？

十一時。

ボブが理不尽に命を刈り取られてから二時間が経過した。

「ふんふんふん」

すももは鼻歌なぞ口ずさみながら、ピアノを弾いている。

「よし、ではここで私の得意な曲をご披露をば」

言って、すももは目を閉じる。

どうやら集中力を高めているらしい。

ポロロン。

という弦の音が部屋に響いた。

そして、すももは歌い出す。

「おおーきなのおじいさん、の完全はーんざいー」

中々野望に満ち溢れたご老人だな。

「百年いつも研ぎ続けた、ご自慢の相棒さー」

人間にしては長生きなご老人だ。

「おじいさんの休みの朝に、やってきた女さー」

なんだか、ボブの件を思い出させるような、そんな不吉な予感があるな。

「今はもう動かない、その女ー」

おじいさんは一体女に何をしたのだ!?

「百年休まずに、グサグサグサグサ」

百年も!?

その女はおじいさんに何をしたんだ!!

相当恨まれているぞ!

「おばあさんと一緒に、グサグサグサグサ」

夫婦で共犯!?

「今はもう動かない、その女ー」

本当にどんな恨みを!?

「秘密を知ってる女だ、おじいさんの秘密ー」

秘密?

「綺麗な女がやってきた、その日も見ていた―」

第三者視点？

「あくどいことも悲しいことも、みな知ってるおばあさん―」

まさか主犯はおばあさん？

「今はもう動かない、浮気相手―」

若い女はおじいさんの浮気相手だったのか！？

「あんなこともこんなことも、みな知ってるおばあさん―」

おばあさん、怖い。

「今はもう動かない、浮気相手―」

おばあさんの嫉妬はすでに狂気の彼方へと達しているのだな。

「真夜中ににたりと笑う、おばあさんの笑顔―」

ホラーだ。

「お別れの時が来たのさ、自分で悟ったのさ―」

逃げろ、おじいさん！！

「天国に昇るおじいさん、欲望ともお別れ―」

遅かったか!!

「今はもう動かない、その老体―」

おじいーさん!!!

「百年休まずに、グサグサグサグサ」

もう許してあげてくれ!!

「おじいさんをその手で、グサグサグサグサ」

もう、おじいさんのライフはゼロだ!!

「今はもう動かない、その老体―」

もう、やだ。

「今はもう動かない…………その老体―」

……………。

「はあー、暇だなあー。というわけでもう一曲をば!」

そんなことはさせない。

ボブやおじいさんのような悲劇を二度と起こさせるものか!

「すもも」

「なにー？」

すごく良い笑顔で私を見るすもも。

完敗だ。

「私の人型を見せるから、これ以上の悲劇を起こすのだけはやめてくれ！」

「見せてくれるの！？ やたーっ！」

幻想種最強の私には怖いものなど今までなかった。

だが、ここ数日で怖いものが出来てしまった。

一つ。

虎之助が竜也の親友であるという揺るぎない事実。

二つ。

マリアの趣味。

三つ。

きぬの毒舌（対男用最終決戦兵器）

四つ。

すももという存在。

「もう許してくれ、すもも。私が悪かった・・・」

番外編／第八話：美水すもも軍曹の野望その？（後書き）

さて、水樹奈々さんのライブに備えて、ライブDVDでも見ておくかな。

まあ、今回もライブには行けないですけど・・・。

やっぱり・・・。。。

いいもん、悲しくなんかないもん・・・。

嘘です。すこぶる悲しいです。

ああ、私事ですいません。

ご意見、ご感想などがあれば是非。

それでは本日はこの辺で！！



第十九話：時をかけちゃった少年少女＋（前書き）

前回から少し日数が経ってしまいましたね。

では、さっそく本編をどうぞ！

## 第十九話：時をかけちゃった少年少女＋

「美紀さん、その、暗くて危ないですから手を、ええーと、あの・」

「うん！」

きゅつと俺の手を握る美紀さん。

俺って絶対人生の勝ち組だよなー。

「見せ付けてくれますねー、マスター」

と、人間バージョンに戻ったイリーナが言ってくる。

「い、いいだろ！　つか、イリーナはどっちの姿が本物なんだ？」

「どっちも本物ですよ？　私たち幻想種は二つの姿を持っているんです。例えば私の場合ですと、ペガサスが私のもう一つの姿です」

「うん？　それじゃあグリシーも人間の姿になれるのか？」

「そりやもちろんですよ。あれー？　マスターはグリシー又の人間バージョン見たことないんですか？」

「ない」

「もつたいないなー。精霊界じゃグリシー又は皇女様だったんで

すよー？ グリシーヌはとーっても凛々しくて綺麗だったんですからー！」

「へー、それは一度見てみたいな」

「つか皇女？」

皇子の間違いだろ？

そんな会話をしていると、俺の服のすそを美紀さんがちよいちよいと引っ張ってきた。

「美紀さん？」

「私は竜也くんの彼女だからね！」

「え？ そうですけど・・・？ 美紀さん？」

「竜也くんは私のことが好きなんだよね？」

「俺は好きな人とじゃないとキスなんてできません」

「う、うん・・・。それなら・・・いいんだけど・・・。」

おかしな美紀さんだ。

「ふふふ、美紀はかわいいーですねー」

言っで、よしよしと美紀さんの頭を撫でるイリーナ。

「イリーナさん！」

「心配しなくてもマスターは美紀以外の女性に興味はありませんよ」

「もう・・・」

「美紀さん、寮の前に・・・」

「え？ なに？」

寮の前にはどういった心境の変化でそうなったのか、青いロングドレスを着たマリンさんと白いミディアムドレスを着たすもも先輩が何故かにここに顔で俺たちに手を振っていた。

「二人ともおそ〜い！ 三ヶ月もどこに行ってたのよ〜！ お姉さんとも〜っても心配しちゃったじゃない〜！」

どこに行ってたもなにも、あなたが俺たちをあのジユラック・パークへ転送したんじゃないですか。

つーか三ヶ月って、嘘つくにしてももうちょっとマシな嘘考えましようよ。

「どこってマーちゃんに送られたジャングルですよ。それに送られてから一週間しか経ってないですよ？」

「え〜！ 竜ちゃんに言ってるの〜？」

「なにつて・・・」

「藤堂くん、寝ぼけちゃいけないー！今日は七月五日だぜ！」

「は？なに言ってるのよすもも」

「それはこっちの台詞だぜ！ほい、コレ見てごらんよ！」

言って、すもも先輩は新聞を放り投げてきた。

「日にちを見てみなー！」

「七月・・・五日・・・？え？どういうこと？」

美紀さんの言葉に俺も首をかしげる。

「マリン」

「あゝ！イーちゃん久しぶりー！元気ー！」

「元気だよ。あのね、私が迷い込んだジャングルに時間圧縮の魔法がかけられていたんだけど、アレってマリンの仕業？」

「えゝ！？お姉さんそんなことしてないよー！」

「そう・・・」

「それよりも早くー！みんなパーティーの準備をして待っているんだからー！」

「みんな？」

「うん！ みんなだよー！ みんなが祝勝会の準備をして待って  
てくれるのー！ だから早く行こうよー！」

祝勝会？

さっきからマリンさんの言っていることが一つも的を得ない。

「二ヶ月遅れの祝勝会だよー！」

んんっ？

ますますわけがわからん。

「マリンの姐さん、それじゃあ藤堂くんも美紀もなんのことだから  
からないっすよー！ あのね、ゴールデンウィーク中に学園対抗魔  
法大会があるって言ってたでしょ？」

「はい」

「あれね、うちが優勝したの！」

「え？ ということはもう終わったんですか？」

「そだよー！ まあ詳しい話は後でしたげるから早く行こうか！」

言って、すもも先輩は俺と美紀さんの手を引っ張る。

「イーちゃんさんも一緒に来てくださいねー！」

「はいー！」

扉を開けるとそこはパーティー会場だった。

見知った顔もいれば知らない顔もいた。

みんな綺麗にドレスアップしている。

「おー！ 竜也に柊先輩！ やつと主賓の登場やな！ 待ったで！」

「二人とも三ヶ月もどこに行ってたんですか？ 心配しちゃいましたよー！」

「……無事でよかった」

白のタキシードを着た虎之助、フリルのついた赤いロングドレスを着た朝比奈さん、淡い紫色のミディアムドレスを着た黒崎さんがそれぞれ声をかけてきた。

さつきに続きこの騒ぎが一体なんなのかわけのわからない俺と美紀さん。

「この騒ぎは一体……」

「なんや？ 美水先輩から聞いてへんのか？ これは学園対抗魔法大会の祝勝会や！ そんで今大会のMVPの竜也を祝う会兼『竜ちゃん、みーちゃん仲直りおめでとー！』それでいつ結婚するの？ 子供ができたらお姉さんにも抱っこさせてねー！』記念も兼

ねとんな！」

「け、結婚って・・・っかどうして俺と美紀さんが仲直りしたって知ってんだよ！？ まさか・・・」

俺はとつさにイリーナに視線を向けた。

「わ、私じゃないですよー！」

イリーナは首をブンブン振り否定する。

そんなイリーナはいつの間にかちゃっかり着替えを済ましていた。

青いマーメイドドレスがよく似合っており不覚にも一瞬見とれてしまった。

「それよりもや」

言って、虎之助は俺の首をがっちりと掴む。

「いつの間に美紀さんて呼ぶようになったんや？」

「そ、それは・・・」

「私もそれは聞きたいかもー！ 教えてチキン野郎！」

相変わらず朝比奈さんの毒舌は健在だ。

「・・・おめでとつ」



黒崎さんだけが唯一祝ってくれた。

うつつ、ありがとう！

「べ、別にいいだろっ！ そんなことより俺がMVPってどういうことだ？ 俺も美紀さんもいまいち状況が理解できてねーんだけど」

「おおっ！ うまく誤魔化しやがったな！ まあえーわ」

「ちょっと黙れブタ野郎。さつさと説明してあげなきゃ駄目じゃないの」

と、朝比奈さんの強烈な一言に撃沈する虎之助だった。

いまだけは朝比奈さんの毒舌に感謝を捧げたい。

「あのね、私たち六人は陵聖学園代表として二ヶ月前に学園対抗魔法大会に出場するはずだったんだけど・・・」

「二ヶ月前？ やっぱりなんかおかしいよ。二ヶ月前って言ったら俺たちまだ陵聖学園に入学してないんじゃないや・・・」

「黙って話を聞け。このクソ虫」

「はい」

「それでね、開催場所であるアメリカのキャッスル学園に作られた特設ステージに向かおうとしてただけど、いくら待っても藤堂くんと柊先輩が戻ってこないから困ってたの。そしたらマリン先生が『竜ちゃんとみーちゃん抜きでも大丈夫でしょー！ もうこのまま

行こっか〜!』って言い出して、まあそのまま向かったんだけど、それからちよつとあつてね・・・」

苦い笑みを浮かべてそう言う朝比奈さん。

「なにか問題でも起きたのか？」

「・・・・・・あなたが召喚したグリシーヌさんが大暴れして、キヤッスル学園は壊滅状態に陥った。さらにあなたのドラゴンは学園対抗魔法大会の審判の教官たちを脅して陵聖学園を優勝にしろと言った」

「グリシーヌが？」

「・・・・・・そう」

「どうしてグリシーヌが大暴れなんかしたんだ？」

「・・・・・・それは・・・」

「あの男が悪い！ 奴が竜也を侮辱したからだ！ 我が爪で切り殺してやるうかと思っただが竜也に人殺しはするなと言われていたのでやむなく思いとどまった。腹いせにあの男がいる学園を粉々にしてやったが・・・あの男だけはいま思い出しても忌々しい」

背後からグリシーヌの憤怒に燃え上がった声が聞こえてきた。

「グリシーヌ！」

久しぶりのグリシーヌとの再会がうれしくて俺は勢いよく背後を振

り返り、そして固まった。

「どうした竜也？」

長身のマリンさん並に胸の大きな、見知らぬ超超超絶美女がきょとんとした顔で俺を見下ろしてそんなことを言った。

「誰ですか？」

言った俺の言葉に、超超超絶美女は体をよろめかせ、

「りゅ、竜也・・・まさかとは思ったが、やはり竜也の瞳には美紀しか映っていないのか！？ 私のことなど、もうどうでもいいと言うのか！？ それは・・・あんまりではないか・・・」

「竜也くん。このすつごく綺麗なおっぱいの大きな女の人はいくら？」

おっぱいを強調して言う美紀さん。

握られた手からは何もかも一瞬で凍らせてしまいそうな冷気が発せられていた。

「い、いや、俺も誰だかわからないです・・・」

「ふーん・・・」

「本当ですって!？」

「酷いぞ竜也！ 私を忘れたというのか!？」

言って、超超超絶美女はルビーのように綺麗な瞳に涙をためて言った。

ルビーのような瞳？

え？

まさか・・・。

「グリシーヌ・・・か？」

「他に誰だと言うのだ。やはり、竜也は私のことなどどうでもいいのだな・・・」

褐色の肌の美しすぎるその女性は、身に纏っている黒くスリムなラインが強調されたロングドレスをいきなり脱ぎだそうとする。

大きな胸がご開帳しそうだ！

「ちよっ！ なにやってるのよグリシーヌ！」

「ええい！ 放せイリーナ！ マリンに言われてこんなドレスなど着た私が馬鹿だった！ 竜也を祝うために着たこの服だったが竜也に忘れられていた私などが祝っても竜也は喜ばないだろう！ 私は、出家しよう・・・！」

「なにわけのわからないこと言ってるのよ！ ていうかマスターも黙って見てないで止めてくださいよー！」

言われて俺は現実には引き戻された。

「グリシーヌ！」

「止めてくれるな！」

「マスターはグリシーヌの人型を初めて見たから驚いてるだけだつてばー！ だから脱がないでー！」

イリーナの言葉にぴたっ！

と、動きを止めたグリシーヌは俺を見て、

「そうなのか？」

と、泣きそうな顔で言った。

「イリーナの言う通りだ。初めて人型のグリシーヌなんて見たからちよつと驚いただけだよ。グリシーヌのことは忘れてない。グリシーヌは俺の大事な……」

「大事な……なに！？」

いきなり耳を引っ張り笑顔（心の顔は般若）で言う美紀さん。

「そんなにアレがいいの！？ 大きなおっぱいがいいの！？ 私だつてできることならもつと大きなおっぱいが欲しかったわよー！ でもしょうがないじゃない！ これじゃ駄目なの！？ 私のおっぱいじゃ駄目！？ そんなに私のおっぱいは魅力ない！？」

「そ、そそそそんなことは、ああああありませんからー  
！！！」

「いまさら取り繕ったって駄目よ！ 竜也くんってば、さっきグリシー又さんのおっぱいに目が釘付けだったじゃない！？」

「それは・・・」

それはただ俺の目の位置に大きなメロンがあったからで・・・。

「まあまあ落ち着いて、美紀」

そう言つて美紀さんをなだめるイリーナの大きな胸を見て、

「イリーナさん・・・あなたも敵よ！」

と、言い出した。

「胸の大きな人はみんな敵だよー！」

と、そんなとき確実に今以上にこの場をカオスへと導く使者が現れた。

「あれ？ みーちゃんどうしたの？」

「う、うわーん！ マリン先生酷いですよー！」

「みーちゃん？」

歩きたびにぶるんぶるん揺れるマリンさんの胸を見て、美紀さんは

とうとう泣き出してしまった。

「お姉さん、みーちゃんになにかしたかな？」

すいませんマリンさん。

俺は心の中で深く謝っておいた。

「大丈夫ですよ、美紀。だって美紀には・・・」

言って、イリーナは美紀さんの耳元でなにやらひそひそと話し出した。

すると数秒もしないうちに美紀さんは泣き止むと、急に顔を赤らめ俺を見る。

「ね？ だから大丈夫ですよ！」

「う、うん！ ありがとうイリーナさん！」

「いいんですよー」

そう言ったイリーナは何故か満面の笑みで俺を見ている。

「竜也、取り乱してすまない」

「私もごめんなさい」

グリシーヌと美紀さんはぺこりと頭を下げて言う。

「ん、問題解決したなら、竜ちゃんとみーちゃんも、着替えてきて」

そう言うど、どこから取り出したのか、マリンさんは黒いタキシードとシルクのロングドレスを俺と美紀さんに渡し、

「お着替えはあちらで！」

と、言つとマリンさんは呪文を唱え出した。

「じゃあいてらっしゃい！」

そう言つて手を振るマリンさんの後ろで、チツと舌打ちをし、俺を睨む軍服姿の怪しいヤツがいた。



第十九話：時をかけちゃった少年少女＋（後書き）

ふゝ。

お待たせいたしました。

え？

待ってない？

そうですね・・・。

・・・・・・。

と落ち込むのはやめましょう！！

では、本日はこの辺で！！

ご意見・ご感想などがあれば是非に！！！

第二十話：やっちゃつよ？ ホントやっちゃつよ？ (前書き)

いやー、なんだか頑張っちゃいました(笑)

え？

何がつて？

そりゃー・・・本編をどうぞー！

第二十話：やっちゃっうよ？ ホントやっちゃっうよ？

更衣室に飛ばされた俺と美紀さんだったが、俺はさっきの男が気になっ  
て仕方が無かった。

「・・・・・・・・」

いくら考えても面識の無い男だ。

「どうかしたの竜也くん？」

「いえ、別に・・・」

「そう？ それじゃあ早く着替えましょう」

「はい。あ、すみません！ 俺外に出てますから先に着替えてくだ  
さい」

言っ  
て扉に手をかけようとした俺の腕を美紀さんが掴んだ。

「美紀さん？」

「行かなくていいよ・・・。う、後ろ向いていてくれればいいから。  
だから、その、ここで一緒に着替えよ・・・」

へブンオアホール！

ここは天国なのか！？

それとも地獄か！？

なんて大胆なことを言い出すんだ！

「はい」

断る理由が見つかりません。

俺は二つ返事で答えた。

「竜也くん」

「な、なんでしゅか？」

思わず声が震えてしまう。

「ふふっ。声が震えてるよ？」

仕方ないじゃないですか。

だって、俺のすぐ後ろから服を脱ぐ美紀さんの衣擦れする音が聞こえてくるんだもんっ！

「竜也くんはもう着替え終わったかな？」

「え、ええ」

「私はまだもう少しかかるかな」

「そ、そうですね・・・」

「もしかして竜也くん、緊張してる？」

「き、緊張するに決まってるじゃないですか」

「私もだよ」

「だったらどうしてこんなこと・・・」

「だって、こういう誰もいない場所じゃないと恥ずかしいから・・・」

「美紀さん？」

「さっきイリーナさんが私になにを言ったか教えてあげようか？」

「へ？」

「さっきって・・・ああ、胸のことで美紀さんが泣いてたときか。」

「イリーナさんはね、おっぱいは揉んでもらえば大きくなるって言ったの」

「ぶぶうー!!」

「イリーナのやつなに言ってたんだよ！」

「だから・・・」

「俺に美紀さんの胸を揉めと？」

触ってもいいんですか!?

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

息が荒くなり、俺のリビドーは高まっていく。

暴発寸前だ!

「ど、どうしたの? なんだか息が荒いよ? とうかちょっと怖いよ……?」

おどれのせいじゃー!

こらー責任とってもらわな、わしの熱く煮えたぎったこのリビドーは収まらんー!

「りゅ、竜也くん?」

そんな美紀さんの怯えた声で俺はハッと自分を取り戻した。

やばいやばい。

危うく狼になってしまふところだった。

「す、すいません……」

言った直後だった。

ブッンッ。

と、電気が消え視界は暗闇に閉ざされた。

「停電かな？」

「停電ですかね？」

「竜也くん、私の手を握って」

「え？」

「私も着替え終わったからとりあえずマリン先生のところに帰りましょう」

「あ、はい」

なんだ。

俺はてつきり怖いから手を握ってなんて言ったのかと思ったよ。

「テレポート」

美紀さんの落ち着き払った声が呪文を唱えた。

さっきのパーティー会場（女子寮）に戻った俺と美紀さんだったが、周囲は気味が悪いほど静まり返っていた。

「エアースールド！」

朝比奈さんの声とともに俺たちの前で突風が吹き荒れた。

「な、なんだー!?」

「二人とも早くこちらへ来い!」

グリシーヌの焦った声が言うと、

パシュツ、パシュツ、となにかの音が連続で聞こえてきた。

「フレイムウォール!」

今度はすもも先輩の声とともに炎が巻き上がった。

「ええからはよこっちこんかい!」

「こっちって言われてもこっつ暗くちゃどこにいるのかわかんねーよ!」

「みーちゃん! 場所はわかるでしょ!?! 早くこっちに来て!」

「はい! 竜也くん! 手を握って!」

「え?」

「いいから早く!」

「は、はい!」



「テレポート！」

美紀さんが呪文が唱えると、

「二人とも無事か！？」「二人とも無事！？」

グリシーヌとマリンさんが俺と美紀さんの体中を触りまくる。

「大丈夫。それよりどうなってんだよ！？」

「俺らにもなにがなんやら……。電気が消えたかと思ったらいきなり扉が勢いよく開いてそこから現れた奴らが銃をぶっ放しよってん！」

「銃！？ みんな大丈夫なのか！？」

「ああ、多分な」

「そんな曖昧な・・・」

「しゃーないやろ！？ ホンマにいきなりやったんやから！？でも生きてることは確かや」

「どうしてわかるんだよ！？ もしかしたら・・・」

「アホか。よう見ーや。ここには誰がおって誰がいーひん？」

「ここにいるのは、俺、美紀さん、マリンさん、虎之助、グリシーヌだ。」

「他のみんなはどこだよ!？」

「知るか! そんな俺かて知りたいわ!」

「二人とも落ち着いて!」

「美紀さん……」

美紀さんの声で俺は少し冷静さを取り戻した。

「わ、悪い……」

「ええ、気にすんな」

「竜ちゃん、みんなは無事よ。さっきすーちゃんときーちゃん  
の声が聞こえてきたでしょ? 多分二人はどこかに隠れてると思  
うの。それに向こうにはイーちゃんもいることだし」

二人?

「黒崎さんは?」

「まーちゃんは……」

嫌な予感がした。

マリンさんはみんな無事だと言ってたじゃねーか!?

大丈夫だ。

心配するな！

「……………戻りました」

黒崎さんのか細い声が聞こえてきた。

無事だったのか。

「よかった…………」

「……………?」

「マリア、状況は？」

「敵は全部で二十人。エレベーター付近に三人。扉に四人。中央に五人。四隅に二人ずつ。朝比奈さんと美水先輩、イリーナさんは扉の近くに隠れている。他の人たちは理事長先生がうまく逃がしてくれたみたい。敵が理事長先生たちを素直に見逃したことから狙いは私たちの中の誰かということだと思う」

「すごいな黒崎さん、どうしてわかるんだ？」

「竜ちゃん、まーちゃんの二つ名はなに？」

黒崎さんの二つ名…………?

「……………私は『無音の暗殺者』。偵察は得意」

「そうか…………。それで、ここはどの位置なんだ？」

「……………ここは中央付近。一番敵の数が多い。危険。先に二人と合流するのがいい」

「そうね、まーちゃんの言う通りにしましょうか」

「うむ、そうだな」

「……………矢吹くん。いまの敵の正確な位置が知りたい。一瞬だけ辺りを照らして。だけど一瞬じゃなければ逆にこっちの位置を敵に知らせることになる。……………できる？」

「おおっし！ 任せとけ！ リトルライト！」

虎之助の呪文によって寮内が一瞬照らされた。

「やっぱり……………」

「どうしたマリア？」

「敵は全員対魔法防御の呪いをかけられている。私たちじゃ手出しできない」

「対魔法防御の呪い？」

俺の言葉に黒崎さんは頷くと、

「アレは解呪しようとするれば呪いにかかった人を殺してしまう」

「殺すって……………そんな危険な呪いを誰が……………」

「わからない・・・でも、多分あの人たちは操られているだけだから殺すのは駄目」

「ねえ、黒崎さん。私の氷の傀儡に氷の武器を持たせて突撃させるのはどうかな？」

「それは駄目。あの呪いは少しでも魔力を感知すると呪いが発動する仕組みになっている」

「そっか・・・」

俺は呪いについて詳しい黒崎さんのことをじっと見つめる。

そんな俺の視線に気づいた黒崎さんは、

「・・・・・・なに？」

言って、小首をかしげた。

「いや、そんな呪いをよく知ってるなーと思って・・・」

「・・・・・・趣味」

頬を赤らめてそんなことを言う黒崎さん。

「へ？」

「竜也！ いまはそんなことどうでもええやろ！」

「あ、ああ・・・」

いま趣味って言いましたよね？

「それよりこの状況をどう打破するかだな・・・」

グリシーヌの一言に俺たちは沈みこんでしまった。

「そんな言ーても魔法が通じやんてことは・・・」

「それよー！」

と、マリンさんがいきなり虎之助を指差した。

「な、なんや！？」

「・・・そうか。魔法使いじゃなければいいんだ」

「は？」

俺を見てそんなことを言う黒崎さん。

そりゃ確かに俺は魔法使いじゃないですけど・・・。

「グリシーヌもイリーナも俺の魔力で呼び出したんだから、それじゃ駄目なんじゃ・・・」

「そうじゃないのー！ 竜ちゃん、あの質問をよく思い出して  
」

「は？」

「問一、好きな武器は？ 問二、好きな動物は？」

「マーちゃん？」

「答えて〜！」

「こんなときになにを・・・」

「こんなときだから必要なの〜！ いいから答えて〜！」

なんだって言うんだ？

答えろってんなら答えるけども・・・。

「弓と猫です」

答えた瞬間だった。

俺の手に全体が赤く輝く複合弓が、俺の前にベレー帽を被った二足歩行の黒猫が現れた。

「へ？」

呆然とする俺に黒猫は敬礼し、

「竜也様の要請により参上しました！ ご命令をどうぞ！」

と、言った。

なんだこいつは？

「私は竜也様の使い魔です！」

「そ、そうか、名前は？」

「ありません！」

「ないのか？」

「はい！」

「ねえ、竜也くん・・・」

と、何故かふるふる震えて言う美紀さん。

「はい？」

「こ、この子の名前、私がつけてあげてもいいかな！？」

「い、いいですけど・・・」

俺が言つと美紀さんはベレー帽を被った黒猫を抱きしめて、

「君の名前はニャン吉に決まり！　どうかな！？」

言つて、美紀さんはきらきらと瞳を輝かせて俺を見た。

「いいんじゃないですか・・・」



な、なかなかいいネーミングセンスをお持ちだ。

「素晴らしい名前を賜りありがとうございます！ 貴女様のお名前は？」

「柊美紀！ よろしくね、ニヤン吉くん！」

「はっ！ こちらこそよろしくお願いします！」

それにしても、使い魔・・・か。

それなら俺でもかるうじて知っている。

使い魔は主人の目となり遠くの位置にあるものでも自身の目として見ることができる・・・だったかな？

「・・・・・・・・これなら作戦を立てられる。みんな耳を貸して」

言われるまま俺たちは黒崎さんに耳を傾けた。

「は？ 俺がそれするのか？」

「・・・・・・・・あなたしかいない」

「頑張つて竜也くん！」

「安心しろ竜也。いざとなれば私がなんとかしよう。例えば敵を一人残らず八つ裂きにするとか・・・」

「俺がやるからそれだけはやめろ」

「そうか・・・？」

「心配しないで！ お姉さんたちが全力でサポートしてあげるからね！」

「せやで！ 竜也はなんも心配すんな！」

「……………そういうことだからよろしく。私は向こうにいる三人に作戦を説明してくる」

言つて、黒崎さんは音も無く消えた。

さすが『無音の暗殺者』だ。

「本当にうまくいくのかな……」

「大丈夫。私を、私たちを信じて」

美紀さんは俺の手を優しく握つて言ってくれた。

「美紀さん……」

「……………作戦を伝えてきた。決行はいつでも大丈夫」

「お疲れ様、まーちゃん！ それじゃあ早速お願いね、虎ちゃん！」

「任せとき！ いくでー！ サンダーメイドさん！」

美紀さんの傀儡と似た、雷で作られた人影が一つ姿を現す。

ただし、虎之助が作りだしたそれは、美紀さんのアイスダンスように、どこか美しさを感じられるような神秘的なものではなかった。

名は体を表すというが・・・。

雷のカチューシャ、エプロン、スカートを纏い、優雅にダンスを踊るように敵に近づく全身雷メイドさん。

全身雷メイドさんは、敵の前でスカートの端を優雅に摘み、見事なお辞儀をする。

そして、にっこり微笑む。

全身雷メイドさんが微笑むと、辺りが突然青白く光り出す。

次いで、微笑みを向けられた相手の真横に轟音と共に巨大な落雷が落ちた。

相手は、この場の雰囲気にとぐわなないメイドさんの姿に動揺し、次に落ちてきた落雷に目を奪われる。

うん、君の気持はとても良くわかる。

あー、それにしてもなんだか大変な事態だったのに、妙に和むな！。

魔法で作られてるってわかっているけど、あのメイドさん可愛いな。

しかも、ちょっと色っぽい・・・。

「・・・竜也くん」

美紀さんの視線が氷点下！？

いえいえ、違います。私は何も考えていませんよ？

あのですね、えーと、これはそのー。

そんなことを考えている間に、全身雷メイドさんはエプロンからお玉を二つ取り出して、装備する。

知らなかったな。

メイドさんにお玉は標準装備だったのか。

全身雷メイドさんは、取り出したお玉を軽く二度ほど打ち鳴らした。

「竜也行けー！」

ドゴンッ！

広場に爆発が起きた。

メイドさんのお玉怖い。

「あ、ああっ！ ニャン吉！ 辺りの偵察頼んだぞ！」

「はっ！ 了解しました！」

俺は広場を全速力で走り抜けた。

「クソチキン野郎！ 早くこっちに来て！」

あの毒舌は朝比奈さんか・・・！

「はい！」

俺は朝比奈さんの声がするほうへ飛び込んだ。

「はあ、はあ、はあ、朝比奈さん、イリーナ、作戦通りお願いします！」

「任せてブタ野郎！」

「マスター、きぬ、私の背に乗って！」

言つと、イリーナはペガサスの姿に戻り俺と朝比奈さんを背に乗せる。

「飛ばすよー！ すもも！ そっちはお願いね！」

「まっかせてー！ こっから先は蟻の子一匹通さないからね！ さあ、そんじゃあいつちよ暴れますかー！ いくよー！ フレイムダンス！」

すもも先輩が呪文を唱えると、美紀さんのアイスダンスと対をな

すような炎の傀儡たちが現れた。

「ここは通さないからねー！」

すもも先輩を、マシンガン（俺銃器について何もわかりません。多分、形がマシンガンっぽいからマシンガン）を構えた男たちが取り囲む。

男たちは、無機質で虚ろな瞳ですもも先輩を見て、マシンガンを構えた。

「なめんじゃないぜよ！ さあ、ここから私たちのショーの始まりですわよ！ さあ、行け！ 我が娘たちよ！」

相変わらずテンション高いなー。

つか、テンション高すぎて台詞がなんだか変なことになってますよ？

「はははははははっ！ では奏でよう！ 炎熱の交響曲を！ 歌え！ 唄え！ 謡え！ 謳え！ 詠え！ 観客は貴様らだ！ なーに、見物料は君たちの命どすえー」

殺しちゃ駄目でしょ！

この人たちだって操られてるだけなんだから！

というか、すもも先輩。

よく恥ずかしげもなくそんな台詞を言えますね。

イリーナは自身のスピードを完全に生かしきれない狭い寮内でも、  
なんの違和感もなく高速で走り回った。

「藤堂くん、敵がどの位置にいるかわかってるんだよね？」

「ああ！」

ニヤン吉が偵察してくれているおかげで敵の位置は手に取るように  
わかった。

「うん、それじゃあ藤堂くんは敵に弓を放って！ 外してもいい  
！ 私の風で軌道を修正するわ！」

「ああ！ 頼む！」

俺は弓をぎりぎりつと力の限り引き、そして放った。

「ぐわっ！」

敵の呻き声が聞こえてきた。

「あ、当たった！」

弓なんて使うのは初めてだったのに運よく敵に当たった。

「その調子！」

俺は次々と矢を放った。

外しそうになるたびに朝比奈さんの風魔法に救われた。

「マスター！ 残りあと一人だよ！」

「ああ！」

最後の一人に狙いを定めて引き絞る。

「ぐうつ！」

命中した。

「よしっ！」

ガッツポーズをしたそのときだった。

扉が激しく開かれ軍服姿の人影が入ってきた。

「本当に使い物にならない。どうやらここまでのようですね」

誰だ？

というか本当に誰？

「お初にお目にかかります。セクター、藤堂竜也くん」

男はそう言つと、周りの様子確かめ、一人でうんうんと頷いている。



「僕も『王の名』を冠するあなたたち四人と、二つ名を持つ方々を簡単にどうにかできるなど思ってもいませんでしたが・・・まさかこれほどとは。やはりただの軍人上がりの素人魔法使いでは話になりませんか。これでは僕のかけた呪いも意味がありませんね。いっそ魔法を使って彼らを攻撃してくればもっとデータが取れたものを」

人影の顔は黒いフェイスガードに覆われてわからなかったが、声を聞く限りそいつは男で、若い感じだった。

「あなたは誰？」

こんなときでものほほんとしているマリンさんだ。

「お初にお目にかかります。魔王、マリン・ヘッケル。僕のこと  
はブラックとでもお呼びください」

「あなたは、なにしに來たの？」

「ある方の命令でセレクター、藤堂竜也くんを拉致しに参りました」

「俺を・・・？」

「はい」

「そつか！それが目的なんだ！　だつたら、殺されても文句はないよね？」

「ははは、僕も死ぬのは嫌ですよ。この状況では藤堂くんの拉致

は無理そうですからね。任務遂行が困難な場合は可能な限りの情報を入手して離脱します。幸い、いまの戦闘であなた方のデータは少しですが入手できましたからね。いやー、それにしても藤堂竜也くんはなかなか弓の腕がいいですねー」

「そりやどうも」

「それでは僕はこれで失礼します。これ以上この場にとどまっていると、その美しいご婦人に殺されてしまいそうだ」

グリシーヌを見て男は言う。

「ふん、私が素直に貴様を見逃すとも思うか？」

「ええ」

「見くびられたものだな！」

言っと、グリシーヌは口から黒い炎の玉を吐き出した。

しかし、

「無駄ですよ」

男に当たったと思った瞬間、男の姿がかげった。

「ここにいる僕は幻影です。本当の僕は別の場所にいます。まあ、それほど遠くにいるわけではありませんがね」

「くっ」

「それでは失礼します。ああ、そうそう。僕たちは竜也くんを諦めたわけではありませんからね。また、いずれお目にかかることもあるかと・・・」

言って、男は姿を消した。

第二十話：やっちゃんよ？ ホントやっちゃんよ？ (後書き)

今までの話数の中で一番長いお話になったのではないかと自問自答  
している私です(笑)

ご意見・ご感想などがあれば是非に！！

第二十一話：名前は伊達じゃないんだZ E！ あゝそんなことよりも・・・（前

どうもゝ

なんだか最近更新頻度が少なくなってしまっていますね・・・。

なるべく、早く更新したいと思います！！

第二十一話：名前は伊達じゃないんだＺＥ！ あゝそんなことよりも・・・

操られていた男たちは自分たちがなにをしていたのか一切覚えていなかった。

男たちにいままでの事情を説明したモーガン・フリーンは男たちを手当てするところかへと運んでいった。

その様子はまるで刑事映画のワンシーンだった。

さすがはモーガン・フリーンだ。

ハリウッドの名優の名は伊達じゃない。

俺の手にあった弓は戦闘が終わるとどこかへ消え、ニャン吉もまた「任務完了であります！ 必要とあらばいつでも私をお呼びください！」と、現れたとき同様に敬礼し消えていった。

「とんだお祝いになっちゃったねー！」

マリンさんは相変わらずのほほんとした顔で言う。

「ホントだねー！ せっかく美紀も藤堂くんとイチヤイチャしてたのにねー！」

「イチヤイチャなんてしてないわよっ！」

「またまたー！ 照れない照れない！」

「照れてない！」

「みーきー！」

「イリーナさん？」

「どうでした？ マスターにちゃんと優しくしてもらえたか？」

「そ、それは・・・」

「その様子じゃしてもらえなかったんですねー！ まったくマスターは根性なしですねー！ こんなかわいい彼女になにもしないなんてー！」

言って、イリーナはじとーっとした目で俺を見る。

そんな目で見るなー！

つーかお前が美紀さんに変なこと吹き込むから悪いんだろーが！

「それにしても、竜ちゃんは人気者だねー！」

「全然うれしくないですけどね」

「しかしホンマけつたいなやつに目えつけられたな、竜也」

「あいつホモ野郎だよね。マジでキモかった」

「・・・危険」

本当に危なかったよな。

銃なんてケガじゃすまないっつの。

下手したら死んでるところだ。

でも、みんな無事でよかった。

それに・・・。

「美紀さんが・・・無事でよかった」

「竜也くん・・・」

「くっさー！ 藤堂くんその台詞くさすぎー！」

朝比奈さんは、「いやー！」とか言いながら頭を抱えて叫びだした。

俺、そんなにくさい台詞言ったかな？

「それはそうとあの男、なかなかの魔力を持っていましたね。恐らくあの男がジャングルに時間圧縮の魔法をかけたんでしょうけど・・・。なんのためにあんなことを？ マスターを拉致しようとするならあのときいくらでもできた筈・・・。ああ、そうか。あのときは美紀がいましたね。だからあの男も手が出せなかったわけですか。では私があそこに迷い込んでしまったのも罠だったのでしょうか？ マスターはどうして自分が狙われているのかわかりますか？」

「いや、皆目検討もつかない。俺なんて狙ってもなんのメリットもないだろ？」



「いや、それは違つぞ竜也」

「そうね、竜ちゃん以上に拉致して価値のある人間なんてこの世にいないでしょうしね」

「は？」

「例えば、竜ちゃんの体を調べたり、解剖したり、人体実験したり」

それ全部人体実験ですよ！

「どうして俺がそんなことされなくちゃいけないんですか！？ つか俺が狙われてるってことは俺の家族は大丈夫なんですか！？」

「大丈夫だよ！ お姉さんの信頼できるお友達に竜ちゃんのご家族を守ってもらってるからね！ ちなみにお友達っていうのはいつかの運転手さんだから！ あと、竜ちゃんの質問の答えは、竜ちゃんが、初めてこの世界に幻想種を召喚した人間だから！」

「初めてって・・・マリんさんはグリシーヌとイリーナを知ってたじゃないですか。てことはマリんさんも以前に二人を呼び出したんじゃない・・・」

「竜也、私が教えたことをもう忘れたのか？」

「え？」

「マリんでも我々を呼び出すことはできない」

「は？　じゃあなんでマリンさんは二人を知ってるんだ？」

「それは、お姉さんの故郷が、精霊界だから！　私は、うーんと昔に精霊界に迷い込んでしまった人間と、幻想種の間生まれた子供なの！」

衝撃の事実。

ビバリーヒルズ　ップ。

いや、全然関係ないけどなんとなくこの二つの発音似てないか？

「つーか、人間と幻想種の間の子供なんてできるのか？」

「もうー！　お姉さんが生きた証拠ー！」

言って、マリンさんはいつかのようには虫も殺せない力ではごぼこと俺を叩いてきた。

「そうですよー。ですからマスターも私やグリシーヌと一緒に子作りしてみませんかー？」

私たちと愛の結晶を作りませんかー？」

「私も竜也が望むのなら喜んで子作りに専念しよう！」

二人とも余計なこと言うな！

誤解されたらどうするんだよ！？

「うわっ！ 藤堂くんは女なら誰でもいいの！？ この節操なし！  
ド変態！ 女の敵！  
美紀がかわいそうだよ！」

とか言いながら影でくすくす笑いをするすもも先輩だった。

小声で「ナイスアシストです！ すもも！」と、イリーナがすもも先輩にハイタッチしてたのは見えないものとしておいた。

「そう・・・なんだ・・・」

「え？」

振り返ると美紀さんは体からドス黒いオーラを放ちわなわなと震えていた。

すっかり素敵な誤解をされてらっしゃる美紀さん。

「竜也くんは女の子なら誰でもいいんだ・・・」

「ち、ちが・・・」

「竜也くんの馬鹿ー！ あんなに熱烈な愛の告白をしたくせに！  
やっぱりおっぱいな  
の！？ 大きなおっぱいがいいのね！？」

「違いますって！ 俺は・・・」

「うるさい！ そこに直れ！」

言つと美紀さんはいきなり呪文を唱え始めた。

「ちょっと待ってくださいよ!？ 俺は美紀さんのことが好きなんです! 美紀さんのおっぱいも大好きです!」

「ほ、ほんと・・・?」

「ええ」

「えゝ!？ お姉さんたちのおっぱいじゃ竜ちゃんは満足しないのゝ!？」

「ふむ、胸には少しは自信があつたのだが・・・」

「マスターは控えめなおっぱいが好きなんですかー?」

と、最強巨乳トリオがそれぞれ胸を触りながら言つ。

「違います! 俺は美紀さんの胸だから好きなんです!」

「竜也くん・・・」

「美紀さん、俺のこと信じてください! 俺は美紀さんのことが・・・」

「・・・・・・あつ、イリーナさんのおっぱいドレスからこぼれてる」

黒崎さんの声に俺は思わずイリーナに視線を向けた。

「えっ!?!」

しかし、イリーナのドレスはどこも乱れていなかった。

「……………ふっ」

しーまったー!

まさか黒崎さんにはめられるとは!!

「しゃーない。竜也、いまのはしゃーないわ」

肩に優しく手を置いて、虎之助は言ってくれた。

わかってくれるか!

男たるものこういったハプニングには素早く反応するものだ。

「……………か」

「へ?」

「竜也くんの馬鹿ー!……!……!」

初めて美紀さんと会ったときに向けられた殺気がかわいく思えるほど、強烈な殺気が美紀さんの体からにじみ出ていた。

「み、美紀・・・さん!？」

「アイスジャイアント!!」

氷の巨人現る!

陵聖学園女子寮崩壊!

逃げ惑う俺たち!

周囲が凍り始めた。

俺を見つめたまま巨大な足を上げた姿勢で固まる氷の巨人。

「竜也くん」

「は、はい!？」

「三秒上げるわ」

「こ、誤解です」

うふふ、と笑って聞き流された。

「遺言は?」

「小さなおっぱい最高です!!」

「有罪!!」

美紀さんの声と共に氷の巨人の足が振り下ろされた。

迫ってくる巨大な足を見て俺は思う。

美紀さんが胸のことを気にしてるのは知っていたけどここまでとは。

つか、美紀さん結構やきもち焼きなんですね。

恋人としてはうれしいですが、やきもちを焼かれるたびに命の危機に瀕するのはどうも……。

それでも……。

俺って人生の勝ち組だよな！。

そう思う俺は救いようのない落ちこぼれ野郎なんだろうか？

竜也は気づいていなかった。

竜也のポケットに入っている、マリンに渡された紙が光を放っていることに。

紙に書かれ、いままで竜也が見ることのできなかった質問が浮かび上がる。

『問四、あなたの最も愛する人は？』



第二十一話：名前は伊達じゃないんだＺＥ！ あゝそんなことよりも・・・（後

前書きでなるべく多く更新を・・・などと言っていました、そろそろ違う作品を書こうかなと思っちゃってます！！

うーむ・・・。

あ！ ご意見・ご感想などがありましたら是非に！！

幕間：そのときヤツは・・・ところでヤツって誰？（前書き）

一つ前のお話で一応、第一部完！

みたいな感じなのですが、別に明確に区切りがあるわけではなく・・・。

まあ、何が言いたいのかと言いますと。

本編をどうぞ！！

幕間：そのときヤツは……ところでヤツって誰？

千代木市内のとある住宅街を、白いスーツを見事に着こなした男が家路を歩んでいる。

男の額と右頬には大きな傷跡があつた。

「失敗か」

男はそう呟くと、白銀の頭髪を苛立たしげに掻き耷る

綺麗に整っていた白銀の頭髪は、男の行動によって、無造作に散らばり見る影もなくなっていた。

「ふむ」

唐突に男は立ち止り、その場で腕を組み、何かを思案し始める。

「何か……重大なことを忘れているような？」

男はすぐそこまで思い出しかけていた何かを思い出せず、再び白銀の頭髪を苛立たしげに掻き耷った。

「まあいい。そのうち思い出すだろう」

そう自分に言い聞かせ、足を動かし家路へと向かうことにする。

男はどこか面白くなさそうな顔で、歩いている。

十字路に差し掛かり、毎日通る十字路を右に曲がる。

そこには、男を待ち構えていたように百を超す屈強な男たちがいた。

「・・・・・・・・」

百を超す男たちは、無言で男を睨みつける。

「ふむ」

男がそう言った直後だった。

「お勤めご苦労様です」

『御苦労さまですーすー！』

男たちが一斉に唱和した。

「ふむ。あのな、何度も言うがソレはやめろ。禁止。駄目、絶対」

男は苦笑しながら言う。

「何故でしょうか？」

軍服姿に顔を黒いフェイスガードで覆い隠した、見るからに怪しい人物が男の抗議に、不満そうな声を隠しもせずと言う。

「何故ってお前それはな、ご近所様が不安になっちまうだろうが」

「知ったことはありません」

「あのな、そんなこと言うんじゃないやありません」

「・・・とても、ジャパニーズマフィアの首領たる山中達郎氏のお言葉とは思えませんか」

「うちの組は『カタギには優しく、ご近所付き合いは大切に』をモットーにしているんだから当たり前のことだ。お前も早く慣れてくれよ。つーか、俺たちの世界にも、交換留学とかあること自体が俺は未だに信じられないのだが？」

「ミートウー」

「馬鹿にしてんのか？」

「若干（笑）」

男こと、山中達郎。

今年で四十になる彼の職業は、マフィア。

つまり日本のヤクザ屋さんだ！

彼は五年前、全世界の人間が魔法という摩訶不思議アドベンチャーな存在を知ったその時に、一般人では世界で初めて魔法の存在に気づいた人間なんだ！

そして、魔法をいち早く理解して、使いこなし、このジャパニーズマフィアの世界をのし上がっていったんだって！

てか、ちょっと卑怯だよな！

ぶんぶん！

一人で日本中の組にカチコミに行った漢義に惚れた野郎どもを取りまとめて、山中組を結成して、その後も魔法の力を使ってどんどんとの上がつていき、今では日本中のヤクザ屋さんを取りまとめる首領になったんだとか！？

それなんてシンデレラ・ストーリー？

あれ？

男の場合でも、シンデレラ・ストーリーって言うのかな？

「おい、お前誰に向かって喋ってんだ？」

軍服姿の黒いフェイスガードで顔を覆った怪しい人物に、達郎は顔中の血管を浮き上がらせて、今にも爆発しそうな怒りを必死で押さえながら言っつ。

「いえ、組長ヒストリーを語っているだけです？」

「お前、やっぱり俺のこと馬鹿にしてんだろ？」

「若干（笑）」

「あはははは、そうかそうか。うん」

達郎の顔は、ヤカンを乗せれば今にも沸騰しそうなほど赤く染まっていた。

「死・に・さ・ら・せ」

白のスーツの内ポケットに手を忍ばせた達郎は、そこから黒光りするものを取り出すと、軍服姿の黒いフェイスガードで顔を覆った怪しい人物に向ける。

何の躊躇いもなく、達郎はその引き金を引いた。

幕間：そのときヤツは・・・ところでヤツって誰？（後書き）

さて、新しい話を書こうかどうか迷いながらも更新をしている私です。

いや、まあ、その。

うん、もう気分次第で更新するか新話を書くか！！

ご意見・ご感想などがあれば是非に



第二十二話：そして再びのお母様（前編）（前書き）

ここから第二部的なスタート？

まあ、あまり明確な線引きをしているわけでもなく。

気分的なもんだいでっす！

それでは、本編をどうぞ！

## 第二十二話：そして再びのお母様（前編）

「竜也とは、将来を誓い合った仲だ。母君よ、私は今、貴女に会えたことを心から嬉しく思っている。竜也と言う人類の、いや、世界のいいや！ 宇宙の宝をこの世に授けてくれた貴女に私は感謝の念が絶えない！ 本当にありがとう！」

と、ルビーのように美しく綺麗な瞳のグリシーヌが我が母君の手を取り、あまつさえ瞳に涙まで浮かべながら言っている。

「・・・・・・・・」

さらにグリシーヌの姿はドラゴンの姿ではなく、超超超絶美女バージョン。

褐色の肌の絶世の美女なグリシーヌは何故かフォーマルなスーツを着用しており、そのあまりの美しさと元々の男口調とが相まって、完璧な男装の麗人と化していた。

「あ！ 私もママさんに俺を言いたいです！ マスターと私たちを引き合わせてくれたのは、突き詰めていけばママさんなんですもんね！ ありがとうございます！」

ユー、パリコレに出ちゃいなよ！

と、某社長さんに思わず言わせてしまいそうな、そんな完璧なファッションをお披露目しながら、イリーナはにこにこご機嫌な様子で我が母君の手を取る。

「・・・・・・・・」

ちなみに、イリーナが現在着用中の服は、白のシャツと赤のスカートと大変シンプルな装いである。

にも関わらず、某社長さんに、

ユー！ マジでパリコレにデ・チャ・イ・ナ・ヨ！

と言わせられる実力を発揮しているイリーナは、グリシーヌに負けず劣らず素敵な女性だった。

まあ、某社長さんが本当にそんなことを言うのかというもったもな質問は受け付けられないものとする。

この案に反対の人は挙手をお願いします。

うむ。

いないようですね。

そう、心の中で一人国会を開いて何とか平静な気持ちを保とうとする俺。

「そうですか？ 藤堂くんって、女の子なら誰でもいいや！ みたいなのところがあるから私はちょっと駄目かな。うん、生理的に受け付けません」

そうはつきり、ばつさり、俺を切ったのは誰あろう朝比奈さんである。

その隣では、黒崎さんが何を考えているのか良くわからない表情で俺を見ていた。

そして、黒崎さんの膝の上にちょこんと乗っている人形も一緒になつて俺を見ている。

あのー、すみません。

俺、何か呪われるようなことをしましたでしょうか？

とんでもなく人形の存在が恐怖です。

朝比奈さんと黒崎さんは、グリシーヌ、イリーナと違い陵聖学園の制服を着用。

しかしながら制服姿であっても、二人は常人では有り得ない美人・可愛い系の女性特有のオーラを纏っている。

「・・・よろしく」

黒崎さんは言つて、我が母君に頭を下げた。

そして我が母君は、もれなく人形の、にたあくという軽く一カ月は夢に出てきそうな不気味な笑みもプレゼントされていた。

黒崎さんの趣味って・・・変わってるよな・・・。

「・・・・・・・・」

「お母様、竜也くんは元気で生活しております。心配なさらないでくださいと言ったとしても、母親であるお母様はやはり竜也くんのが気になることでしょう。ですから私が今言えることは、私の命に代えましても竜也くんや預かっている子供たちを守ると誓うことぐらいしか出来ません」

しつかり者の大人マリンさん。

ときどき思うことがある。

実はマリンさんって、二重人格？

「・・・・・・・・」

我が母君は、五者五様の挨拶を受けて黙ったまま頷いている。

そして、

「それで、誰がアンタの本命？ やっぱりきぬちゃん？ きぬちゃん？ お母さんに似て美人さんなきぬちゃん？ それともミステリアスな魅力に満ちあふれているマリアちゃん？ マリアちゃんなの？ うん、娘になるなら是非メイド服とゴスロリ衣装を着せてみたいわ！ そ、それとも・・・大人の魅力溢れるマリンさん？ まさかそんな・・・それは叶わぬ恋なのよ！ 今ならまだ引き返せるわ！ 戻って いえ、そうね。どんな形であれ、自分で決着を付けるのが男つてもものよね！ はっ！ まさかの第二弾！ 天真爛漫な異国の女の子なイリーナちゃん！？ そうか、その選択もあるわねー。ま、ま、まさかの第三弾！！ 某国の皇女いええ皇子様のような高貴な気品漂いまくっているグリシー又さんだとうー！ 駄

目よ！ 自分の力量を思い出しなさい！ 何……い、挑むつもりなの？ ふふふ、男子三日会わねばなんとやら……か。昔の人は上手く言ったものね」

ああ、久々に聞いたな。

母さんのマシンガントーク。

というか、どうしてこんなことになったのだろう？

思い返せば……。

すみません。

思い返さなくても充分です。

答えは簡単。

「竜ちゃん限定家庭訪問タイム！ ドンドン、パフパフ」

言って騒いでいたマーちゃんの姿が昨日のことのように感じられる。

まあ、本当に昨日のことなんだが。

しかし、美紀さんは来られない……か。

残念極まりない。

虎之助やすもも先輩も今はいない。

何しろ、美紀さんたちは魔法界四大貴族を次期御当主様なわけで。

毎年七月後半は、四貴族集まっでの会議があるとか。

大変そうだ。

美紀さんのことを母さんに紹介したかったけど、まあ、それはいつでも出来るか。

**第二十二話・そして再びのお母様（前編）（後書き）**

ご意見・ご感想などがありましたら是非に！

ではでは～！



第二十三話：藤堂家家庭訪問前日（前書き）

鋼の錬金術師は最高だね！

とか思いながら執筆しているわたしです（笑）

では本編をどうぞ！

## 第二十三話：藤堂家家庭訪問前日

事件はいつも唐突にやってくるわけで。

軍服姿の黒いフェイスガードで顔を覆った怪しい人物＆操られていた皆さまが陵聖学園を襲撃した事件の後、嫉妬に怒り狂った美紀さんの攻撃を喰らい、危うく死後の世界へと旅立とうとしていた俺を、呼ぶ声が聞こえてきた。

『・・・・・・・・様』

誰でい！

ちよつと頑固な棟梁をイメージしての返事を思い浮かべた。

『・・・・・・・・也様』

なんだか可愛らしい声だった。

少し舌つたらずな声は、聞き覚えのない声だが、こんなに可愛らしい声を聞いたのは始めてかもしれない。

『竜也様』

本当に誰だろう。

『もう朝ですわよ！ 起きて下さいまし！』

なんとお嬢様口調でした。

本当に誰なのかとても気になる。

『起きませんわ。や、やはり、殿方にはお目覚めのせ、せ、せ、接吻などしなければいけないのでしょうか？』

それはマズイ！

俺には美紀さんという素晴らしい彼女さんがいるわけでした！

俺はベッドから飛び上がって起きていることをアピールすることに。

「起きてます！」

だが、俺の部屋には誰もいなかった。

はて？

さっき聞こえてきた可愛らしい声は幻聴だったのかな？

『ああ、やっと起きて下さいましたわね』

え？

どこにいるの？

誰も見えないよ？

『皆さんがリビングでお待ちになっていますわ。朝食の準備が整っておりますのでお越しになってください』

だからどこにいるの？

ちよつと・・・怖くなってきたのですが・・・。

ポテポテポテポテ。

と、なんだか間の抜けた音がした。

心なしか、足音・・・のような気がしなくてもない。

その音が聞こえてくる方へ視線をやる。

小さな物体がとことこ歩いていた。

『では、失礼いたしますわ。なるべく早く着替えてきてください』

言つて、小さな物体というか、どこからどう見ても日本人形にしか見えないそれは、俺に頭を下げた後、にたあく、と凄惨な笑みを浮かべて去っていった。

俺は、いつの間にか、あなたの知らない世界に迷い込んでしまっていたのか？

これ以上呪われるわけにはいかないという恐怖観念から、俺史上最速で着替えを終わらせ、皆が待つてくれているリビングへと向かう。

リビングの扉の前で一つ深呼吸をする俺。

やはり美女＆美少女がいる部屋に入るのはかなり緊張するわけだ。  
て。

古いが、ただ古いわけではなく、歴史を感じさせる古さを持つリビングの扉を見て、そんなことを考えていた俺。

呼吸が整ったところで扉を開けて中へ入る。

「突然だけど、明日ね、竜ちゃん限定の家庭訪問をすることにしたから」

本当に突然だった。

おはようも何も言う前にそんなことを言うマーちゃん。

「竜也くん！ お、おはよう！」

美紀さんだけが俺に朝の挨拶をしてくれた。

「おはようございます、美紀さん」

「う、うん！」

なんと可愛らしくも愛らしいお人なのだろうか？

今日も今日とて美し過ぎるぜ、美紀さん。

「っていうかマーちゃん」

「な〜に〜?」

「俺の家族はみんな今、俺を覗いて世界一周の旅行に出かけているのでは?」

「そっだよ〜!」

「それなら、家庭訪問なんて無理なのでは?」

「無問題〜! 竜ちゃん一家は今、お家に帰ってきてるから〜! 最近〜、いろいろ大変だったでしょう? だから〜、竜ちゃんのママさんに〜、理由を説明して帰ってきてもらったの〜。どこかに移動しているよりも〜、一か所に留まってくれていたほうが〜守りやすいから〜」

そうなんだ。

帰ってきてるのか。

そして、家庭訪問されてしまうのか・・・。

あの、見たものを必然的に同情させるような家を見られてしまうのか。

「だからね〜、皆で〜、竜ちゃんのお家に〜家庭訪問するの〜!」

「皆で!?!」

「そだよ〜」

ということとは・・・美紀さんにも我が家を見られてしまうということなのか？

「あ、竜也くん。その、私はというか、私たちは行けないの」

私たち？

そういえば、すもも先輩の姿が見えないな。

「毎年、七月の下旬に四大貴族会議っていうのが開かれているんだけど、今年から私たちも参加しなくちゃいけないことになって。すももと虎之助くんはもう先に行ってるの」

だからすもも先輩の姿が見えないのか。

「そうですか……。残念です。美紀さんのことを、母さんに紹介しようと思っていたので」

「竜也くんのお母様に紹介！？」

「はい」

「うう、それは・・・すぐ行きたいかも」

迷いの表情で悶々としている美紀さん。

「美紀よ。会議などすっぱかして、我らと共に行ってはどうだ？  
なに、心配はいらん。美紀に文句を言うような輩がいれば、私が八つ裂きにしてくれよう！」

と、超超超絶美女な姿のグリシー又は言う。

ちなみに、グリシー又は超超超絶美女なのにくまさんパジャマを見事に着こなすという荒業を習得しているらしく、そんなグリシー又はの姿にときめきを隠せない俺でした。

この場にイリーナもしくはすもも先輩がいれば、確実に何か言われていただろうが、あいにく二人は今はいない。

すもも先輩は美紀さんが言っていたように会議へと向かっているのではない。

イリーナは、夢への旅路を辿っているのではない。

「竜也くんのお母様にも会いたいけど、やっぱり会議も大事よね！」

肉親の危機を察知して、そう言う美紀さんだった。

うう、すいません、美紀さん。

「あと、きーちゃんも、まーちゃんも一緒に行くことになったから、よろしくね」

「・・・暇だから」

「私は久しぶりにお父さんに会いたいから」

黒崎さんの言い分はわかる。



暇だからどこかへ出かけて暇つぶし。

でも、朝比奈さんは？

お父さんに会う？

どういうことだ？

「あゝ、竜ちゃんは知らないんだよねゝ、きーちゃんのパパさんのことゝ」

まあ、知らなくて当然だと思うのだが？

「ゴリマッチョゝ！」

「は？」

「運転手ゝ！」

「え？」

「竜ちゃんをゝ、こっちの世界にご招待したゝ、大きな水先案内人ゝ！」

ポクポクポクポクポクポク……チーン！

俺の脳裏に蘇る恐ろしき記憶。

本当にあの、アイコンタクトで会話を成立させる運転手が朝比奈さんのお父さん？

うん。

突然変異万歳！！

第二十三話・藤堂家家庭訪問前日（後書き）

ご意見・ご感想などがあれば是非に！

第二十四話：そんなこともあったね！（前書き）

と、やっと続きをお届け出来ますね！

では、本編をどうぞ！！

## 第二十四話：そんなこともあったね！

昨日一日だけで本当に色々なことがあったと思うわけですよ。

我が家に来ると言うだけで、皆さま本当にテンションが上がってらっしゃいましたからね。

「でね、これが竜也が三才の時の写真よ！ この写真に写っている竜也は、初めておねしょをしたときの竜也ね！ あ、こっちの写真は結衣ちゃん、由愛ちゃんと初めて一緒に取った写真ね！ このときの竜也ってばもうすごく照れちゃってね！ まあ、不甲斐ない不肖な息子なわけだけど、やっぱりそんな息子でも母親の私としてはもう目に入れても痛くないくらいに可愛いと思ってしまふというか・・・でもでも！ モテないモテないと思っていた息子が、まさか五人も女の子を家に連れ込むなんてね！ 母さんとしては、ただ一人の女の子に愛を注いであげて欲しいのだけど、五人が五人ともこんなに美女、美少女だったら誰に愛を注ぐのかは迷っちゃうわよね！

まあまあそこは、竜也の甲斐性に任せるとしまして！ あっ！

そうだ今さらだけどね、結衣ちゃんと由愛ちゃんっていうのは、我が家の天使！ 我が家のツインエンジェルのことなのよ！ 竜也とは三つ年の離れた双子の妹ちゃんズなのでした！ あー、そうそう、二人がお兄ちゃんから何の連絡もないって嘆いていたわよ？ もうちょっと妹たちのこともかまってあげなさいね！ あー、でもでも母さん迷っちゃうなー！ こんなに女の子がいても、竜也のお嫁さんになれるのはただ一人なわけでしょ？ ということは、未来の娘もただ一人！ さあ、一体誰が竜也のハートを射止めるのかしらね

！ 楽しみだわ！」

そこまで一息に喋り倒す我が母上に、俺以外の全員がぐったりとしていた。

まあ、俺は慣れているから平気なわけだが。

というか、昨日の出来事を回想し終わってすぐに、母さんのマシンガン・トークか。

懐かしくはあるんだけど、正直疲れる。

そんなことを考えていると、俺の肩をグリシーヌがちょんちょんと突いてきた。

「竜也よ」

「なんだ？」

「母君はいつも、その、このような感じなのか？」

さすがのグリシーヌも母さんのマシンガン・トークには参った様子だな。

「うーん、まあ、大体いつもこんな感じかな？」

「そ、そうか・・・」

そう。

こんな風に、母さんの前でグリシーヌと二人、こそこそと話していれば、母さんの標的になるというのは分かりきったことであつたのに……。

こんな些細なことが、今回の事件の引き金になるだなんて思いもよらなかつた。

いや。

俺じゃなくても、誰であつても予期出来なかつただろうな。

「あら？ あらあらあら？ ねえ、竜也。あなたの本命つてグリシーヌさんだつたのかしら？ うっそ！ マジで！？ まあ、母さんさつきこの中で本命は誰なのかーなんて言っちゃったけど、実は竜也の本命は桜子ちゃんだと思つてたのよねー！ 母さんの母親の感は絶対に外れないという根拠の無い自信があつただけど、まさか外れるとはね！ まあ、もともと根拠が無かつただけに、外れたとしてもまつたく悔しくもないんだけど！」

根拠の無い自信つて。

それを自分で言うのはどうなのかということを知りたいです。

少し、時間は遡る。

千代木市内のとある住宅街を、白いスーツを見事に着こなした男が家路を歩んでいる。

男の額と右頬には大きな傷跡があった。

そんな男に近づく人影。

人影は息を殺して男に少しずつ近づいていく。

「・・・・・・・・」

「・・・・ふ」

男こと、山中達郎は不敵に笑う。



そして、白いスーツの内ポケットに手を忍ばせる。

「・・・っ」

人影はそんな達郎の動きを見て、達郎との距離を一気に詰める！

「お帰りなさい！ パパ！」

人影は達郎の背中を思い切り抱きしめた。

「ははははは！ ただいま、桜子！」

達郎は、白いスーツの内ポケットから何かを取り出す。

それは、緑色の包装紙に包まれた単行本一冊ほどの何かだった。

達郎はそれを人影、否、山中達郎の娘、山中桜子に向けて渡す。

「少し早いけど、誕生日プレゼントだよー！」

そう言った達郎の顔はデレデレに緩みきっていた。

「ありがとう、パパ！」

桜子は満面の笑みを達郎に向ける。

「いいんだよ〜！ パパは、桜子の為ならなんだってしてあげるよ〜！」

「あはは！ うん、ありがとう！」

普段の山中桜子という人物を知っているものなら驚くことだろう。

中性的アンド美形フェイスの桜子はボーイッシュな感じのショートヘアーに陸上で鍛えられた無駄のないスタイルの持ち主である。

その上、気さくな性格で誰からも好かれている。

常に男女とも分け隔てなく接している。

恋愛ことの相談も、男女とも分け隔てなく受けている。

そんな桜子は、相談を受けると同じ数だけ告白も受けていた。

桜子に告白する者の大半は男だったが、中には同じ性別である女性もいた。

『性別を超えた愛の存在と一緒に確認しましょう・・・お姉さま』

とは、桜子に告白した女生徒の名言であり、伝説でもある。

そんな桜子だが、今まで誰に告白されても断り続けてきた。

断られた中には、藤堂竜也という名の男子もいた。

しかし、そんな桜子だが、父から渡されたプレゼントを受け取り恋する乙女のような顔でプレゼントに釘付けである。

「でも、いまさはどうしてそんな初歩的な魔法教本を欲しがったんだい？ プレゼントならもっと別の物でも・・・」

「ううん。これがいいの！ この教本じゃなきゅ駄目なの！」

娘の恋する乙女的な顔を見て、達郎は思った。

俺の天使を奪おうとする不屈き者がいる。

「・・・竜也」

娘の呟くような言葉を達郎は見逃さなかった。

そうか、名前は竜也か。

ふむふむ。

そういえば、桜子ちゃんから頻繁に竜也という男の名前を聞いていたが、俺から俺の愛する天使を奪おうとしているのは竜也という名前のクソガキなわけだ。

達郎は瞬時に部下へと念話を送る。

（どんな手段を使ってもいいから竜也という人物を探し出せ！  
ああ！？ 名字？ あー、ちよつと待て。たしか・・・と、藤堂と  
かいう名字だったはずだ！ ああそつだ！ ああ！？ ああ、そう  
だ！ いや、ちよつと待て、こういう荒事に長けた奴を一人預かって  
いたな。よし、奴の協力を仰げ！）

これは、竜也がマリンによって陵聖学園に連れて行かれたのと同じ時期に起こった出来事である。

第二十四話：そんなこともあったね！（後書き）

ご意見・ご感想などがあれば是非に！！

**第二十五話：そして再びのお母様（後編）（前書き）**

本編、はじまるよー！！

ということなので、本編をどうぞ！

第二十五話：そして再びのお母様（後編）

思い返してみれば、フラグはもうすでに立てられていたのかもしれない。

そう。

他ならぬあの人。

俺の母さんによって　。

『あら？　あらあらあら？　ねえ、竜也。あなたの本命ってグリシー又さんだったのかしら？　うつそ！　マジで！？　まあ、母さんさっきこの中で本命は誰なのかーなんて言っちゃったけど、実は竜也の本命は桜子ちゃんだと思ってたのよねー！　母さんの母親の感は絶対に外れないという根拠の無い自信があったのだけど、まさか外れるとはね！　まあ、もともと根拠が無かっただけに、外れたとしてもまったく悔しくもないんだけど！』

こんなことを言った母さんが次にどんな行動に出るのか予想して然るべきだったな。

つーか、久々・・・ではないけど、我が家でゆっくりする暇もな

い状況を作り上げた母さんの無邪気さを、怒ればいいのか、恨めばいいのか、呆れればいいのか、それとも笑って許せばいいのか・・・。

こんなとき、どんな顔をすればいいのか分からない。

（笑えばいいと思うよ？）

え？

誰？

誰なの？

（忘れたの？ ボクが誰なのかを？）

ええーと？

本当にどちら様なのでしょう？

（ふう・・・。別れてからそんなに時間は経っていないのに忘れられるなんて・・・何だか悲しい）

本当に誰ですか！？

（ふふふ・・・知りたいかい？ 知りたいのかい？ そんなに知りたいのかい？ ならば仕方がない答えてあげよう！ ボクの名は！）

いえ、そこまで知りたいわけでは・・・。



（うわーん！ 聞いてくださいニャー！）

ニャー？

（ボクです！ ニャン吉です！ 忘れないで下さいよー！）

ニャン吉？

その名前で思い浮かぶのは、美紀さんが偉く可愛いと仰っていた、俺が召喚したあの使い魔で偵察軍人もどきなお猫さんだが。

ニャン吉ってば、もっと違った口調だったような？

（本当にニャン吉ですニャー！ 正真正銘美紀様にお名前を頂戴したニャン吉ですニャー！ あと、この喋り方がボクの素ですニャー）

なん・・・だと？

（どうして無駄に格好良く驚いているのか知りませんニャ、本当ですニャー！）

何故口調が変わっているのかしらん？

（だって、女の子にはちょっとしたでも格好いい所を見せたいですニャー！）

ふむ。

同じ男としてその気持ちは分からんでもない。

（なんて失礼なことを仰るのかニヤ！ 竜也様！ ボクはこれでも女の子ですニヤ！）

ふむ、普通に会話に困った。

というかだ。

何故ニヤン吉は俺のモノローグに対し、会話が出来るんだ？

（そういう仕様なので）

仕様で。

そんなモノローグによる使い魔との会話に没頭していたのが要因だと思う。

「あつ！ もしもし桜子ちゃん？ そうそう久しぶりじゃないけど一応久しぶりね！ あのね、今我が家に竜也が帰ってきてるわよ！ あはは桜子ちゃんそんなに驚いちゃってー！ そうよー！ 桜子ちゃんの白馬の王子様が帰ってきたのよ！ あ、そうそう！ それとね、竜也と一緒に美女ア・ン・ド美少女五名様も我が家にご来店なさっているんだけどね、え？ 何？ どったの？ うーん、そうね。今の所は・・・うん、グリシー又さんっていう褐色の肌の絶世の美女で、何故かフォーマルなスーツを着用している完璧な男装の麗人なんだけど、それでいてお色気むんむんという美と美のケミストリー日本語で言うとか化学反応を起こしちゃってる人が一番かな

「？ え？ そう？ うんうん。わかった！ それじゃ、待つてるわね！」

「母君よ。私の名が話に出たようだが、今の会話は誰なのだろうか？」

と、少々困惑気味なグリシーヌ。

「え？ あー、桜子ちゃんっていう、竜也のことがだ〜い好きな女の子！ 竜也が帰ってきたら教えて下さい〜って言われてたからね！ それでねそれでね・・・以下省略！」

って！

自分で以下省略って言うのはどうかと思われませう、お母様。

『そんなことが・・・』

はいはい、もうそんな古臭いリアクションはいいですから・・・え？ そんな・・・。

再び再臨。

呪いの人形。

どこから湧いて出やがった！！

そんなに俺が憎いのか！！

「・・・あ、駄目ゴメス。今お話中だから。それと、そんな古臭

いりアクションはいらない」

同じ意見で嬉しいよ、黒崎さん。

でもね。

ゴメスってそれが名前！！

そんなんだから呪いの人形になっちまったんじゃねーのゴメス！

『あら、私としたことが失礼致しましたわ。おほほほ』

にたあゝつとした凄惨な笑みで笑われるゴメスさん。

もう堪忍して・・・。

「あらら？ お人形さんが喋ってるわね？ お母さんびっくりしちゃいましたよ！ それにしてもこのお人形さんどうやって動いているのかしら？ それにしてもパート2、このお人形さんとっても可愛いわね！」

「・・・・・・・・つぽ」

お母様の一言に、何故か頬を赤く染める黒崎さん。

「・・・・・・・・」

何も言わず、だが、感銘を受けたと言わんばかりの表情で黒崎さんは母さんの手を取り強制シェイクハンド。

「・・・ゴメスの良さを初見で見抜いた人は初めて」

「そうなの？　こんなに愛らしいのに？」

お母様！

あなたには今も凄惨で残忍な笑みを浮かべながら、その小さな体をくねくねと動かす呪いの人形が可愛く見えているのですか！？

是非眼科へ行くことをお勧め致します！！

「・・・ゴメスとお友達になってください」

「それは駄目！」

「・・・・・・・・（がーん）」

鬼や！！

ここに鬼がおるぞ！！

持ち上げてからの、急速降下。

大変勉強になりました！

「私は、ゴメスちゃんだけじゃなくて、マリアちゃんともお友達になりたいな！」

「・・・・・・・・」

感無量過ぎたのか、黒崎さんは俺のような涙を流しながら、お母様の手を再び握って強制シェイクハンド。

何故か一人でうんうんと頷いている。

「・・・お姉さまと呼ばせてください」

『良かったですわね、マリア様！　このように素敵なお姉さまがお出来になりました！』

「・・・ありがとう」

勝手に人の母さんをお姉さまにしないで！。

うん？

母さんが黒崎さんのお姉さん。

必然的に、黒崎さんは俺の叔母さん。

同年年の叔母さん。

どうしてか、そこはかたく背德的な・・・。

（竜也様ー、あのですニャ・・・）

と、ニャン吉が俺に語りかける。

（格好良くも、可愛らしいという絶妙なバランスを保った女の子が

もうすぐここに来ますニヤ！ それと一緒に・・・

母さんのさっきの会話の流れからして、それは桜子だろう。

しかし、どうしてわかるんだ？

（そういう仕様なのでニヤ）

仕様で。

そんなときだった。

「竜也！！」

懐かしい声が聞こえてきたかと思うと、俺の胸に温かな感触が飛来した。

中性的な美形フェイスが俺を見上げる。

山中桜子である。

彼女は俺の胸に飛び込み、満面の笑みで俺を見ている。

そして中々に大きな禁断の果実が俺の胸板に押しつけられる。

うむ。

こういった強制イベントなら大歓迎なのである！

「会いたかったよ！ 竜也！」

俺は固まった。

俺だけじゃなく、その場にいた母さんを覗いた全員が固まった。

桜子の言動に戸惑った……からではない。

桜子の後ろにいる人物を見て固まったのだ。

「ふー、お嬢様ってばどんだけ急ぐんですかー！ 早すぎですよ  
(笑)」

忘れもしない。

桜子を追いかけるような形で我が家にやって来たのは、軍服姿に顔を黒いフェイスガードで覆い隠した、見るからに怪しい人物であった。

『あっ』

六人が一斉に声を出した。

そして、俺は、俺たちは軍服姿に顔を黒いフェイスガードで覆い隠



した、見るからに怪しい人物に視線を注ぐ。

「ん？」

そいつは首を傾げ、俺、マーちゃん、グリシーヌ、イリーナ、黒崎さん、朝比奈さんを順に見た後こう言った。

「そうです。そのまさかです」

まだ何も言っ  
てねーよっ！

**第二十五話：そして再びのお母様（後編）（後書き）**

ご意見・ご感想などお待ちしております!!

第二十六話：そして再びのお母様（裏）（前書き）

裏ってなんだよ？

そう思われる方がいらっしゃるのは当然だと思います。

というわけで、本編をどうぞ！

## 第二十六話：そして再びのお母様（裏）

突然ですが、私の名前はミラ・ジヨボ ッチといいます。

嘘です。

本当の名前はエドアルド・クリスティーです。

職業はマフィアです。

これは嘘ではなく本当です。

実家がアメリカン・マフィアの元締めみたいな、偉そうなことをやっていて、私はその次期五代目です。

本当はマフィアになんてなりたくないんだけど、他にやることもないので仕方なく、なあなあな感じでやっている二三歳です。

大学はハーバードでした。

主席で卒業したんですよ？

凄いでしょ？

でも、まあ。

ハーバードを首席で卒業していようが、マフィアなんてやってれば、あんまり意味がないのですが。

それだから、マフィア業もなあなあになっちゃうんですね。

そんな私に呆れたのでしょうか？

祖父であり、先代の首領<sup>ボス</sup>がつい最近になって、こんなことを仰りやがりました。

『クリスティー、お前はマフィアというものがどんなものかわるで分かっていない！ 次期五代目だというのにそんなことではいかん！ 修行をしてこい！ そうだな・・・日本へ行け。日本の山中組というジャパニーズ・マフィアに身を置き、マフィアとは何なのかをしっかりと勉強してこい！ 話を付けておいてやるからしっかりとやるんだぞ！』

有難迷惑とはまさにこのことです。

しかし、祖父の命令は絶対なのです。

ですので断るなんてそんなことが出来るはずありません。

というわけで私は今、仕方なく山中組の本拠地であり、山中達郎氏のお屋敷でお世話になっています。

さて、ここで一つ重大な問題が発生しています。

祖父は日本へ行くに当たって、私に条件を出しやがりました。

その条件とは、山中達郎氏とその家族以外、たとえ山中組の構成員であっても人前では私の顔を黒いフェイスガード覆い隠せという

ものでした。

自分で日本へ行けと言い条件を出すとは、そろそろじじい、訂正  
祖父もボケがきたのでしょうか？

せっかく日本観光を楽しもうと思っていたのに、そんな怪しい格好をしているのは素直に楽しめるはずありません。

日本へ来て現在半年が経ちます。

正直、すでにやる気は霧散しています。

ですが、最近は少し楽しくなってきました。

と、言いますのは、山中達郎氏は大変イジリがいのある方でして。

達郎氏は娘である、桜子さんと奥様を深く、ふか~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

おられます。

そんな達郎氏は、家族に接するとき、組員に接するときで態度が急変致します。

これはイジって遊ぶしかない。

神の御指示が私の脳裏を横切りました。

重ねて言いますが、達郎氏は本当にイジリがいのある方です。

そして達郎氏は現在一つの悩みを抱えておられるようです。

その悩みとは、桜子さんがどなたかに恋をしてらっしゃるようでして、達郎氏はお相手の方に嫌がらせをしたいと仰っています。

小さすぎるなあー、とは思いますが、せつかくの楽しくなる予感がするイベントを自分の手で摘み取るような真似は致しません。

幸い、達郎氏は私に桜子さんが想いを寄せている相手に対する嫌がらせ行為を命じられました。

汝、全力で楽しむべし。

神もそう仰っているような気がします。

ジリリリリッ。

電話が鳴っていますね。

山中組本拠地であるこのお屋敷は無駄に広いです。

半年間お世話になっている私でも、未だにどこに何があるのか、その全容を把握出来ていません。

それに、金持ちであるはずなのに、山中組の電話は未だに一昔前の黒電話というアナログっぷりです。

まあ、私が電話に出るわけでも、掛けるわけでもないので構わな



いといえば構わないのですが（笑）

ジリリ・・・。

「はい、もしもし山中です」

おっと、電話に出たのは桜子お嬢様のようですね。

電話の相手は誰でしょうか？

「ええ！？ 竜也が帰ってきているんですか！」

どうやら電話の相手は、桜子お嬢様が想いを寄せている、藤堂竜也という少年の関係者のようです。

ふふふ。

藤堂竜也という少年にどうアプローチを取ろうか考えていたのですが、向こう側からアクションを起こしてくれるとは願ったりかなったりです。

もうこれは、神の思し召しと思うしかないようですね。

「女の子を五人も連れ帰ってるんですか！？ ……おばさん。その中に竜也の本命らしき人物はいますか？」

何があつたのでしょうか？

桜子お嬢様はぶるぶると拳を震わせてらっしゃいます。

私は、桜子お嬢様と、奥様に大変お世話になっており、また私自身もお二人に何の思惑も無い純粋な好意を持っていますので、達郎氏から命令は出されていますが、本音としましては桜子お嬢様の恋を応援したいのです。

「褐色の肌の絶世の美女で、何故かフォーマルなスーツを着用している完璧な男装の麗人なんだけど、それでいてお色気むんむんという美と美のケミストリー日本語で言うと化学反応を起こしちゃってる人・・・ですか。そうですか」

ああ、何故か訳のわからないことを仰って、桜子お嬢様は受話器を耳に当てたまま項垂れてしまいました。

頑張ってください、桜子お嬢様！

「おばさん！ 今からそっちに行きます！ もう全力でそっちに行きますから、竜也をその場に留めておいてください！ お願いします！」

今宵の桜子お嬢様は血を求めておいでの御様子です。

まだ夜ではないですが。

桜子お嬢様は受話器を置くと、自室へ戻られました。

そしてすぐに出てきました。

「クリスティーさん！」

おっと、呼ばれてしまいました。

「はい、桜子お嬢様」

「これから友達の家へ行くんだけど、一緒に行ってくれませんか？」

「了解致しました。では車でお送り致します」

「ううん・・・」

まさかの否定です。

「では何で向かわれますか？」

「走って行った方が近いです！」

何の説明も無いまま、桜子お嬢様は全力疾走で外へと向かわれました。

では、私も行くのでしょうか。

魔法の力で脚力を強化しているとはいえ、桜子お嬢様の速力は半端なものではありません。

同じ魔法を使い、私も脚力を強化しておりますが、それでも桜子お嬢様に付いていくので精いっぱいです。

恋する乙女は凄いですね。

おっと、お嬢様が一軒の民家の前で停止しました。

ふむ、中々に趣のある家ですね。

言い方を変えればボロいですね。

築何十年位なのでしょうか？

まあ、私には関係ないことですな。

お嬢様は意を決したように、民家の中へ入られました。

私も続くとしましょう。

それにしても。

「ふゝ、お嬢様ってばどれだけ急ぐんですかゝ！ 早すぎですよ  
(笑)」

そんなに藤堂竜也という少年に会いたかったのでしょうか？

やはり桜子お嬢様は可愛いお方ですね。

これから相手の方に嫌がらせをしなくてはならないのかと思うと、  
気が引けてしまいます。

そう思いその場にただ一人いた少年に視線を向けます。

彼が藤堂竜也なのですね。

特別格好いいというわけでも、可愛いというわけでもない少年ですね。

しかし、どこことなく気になることは確かな、そんな不思議な少年です。

竜也くんの周りには五人の美女＆美少女がいました。

間違いありません。

彼は人生の勝ち組です。

あのように若いうちに、人生という名の年末ジャン　を当てると  
いう神の奇跡にも似た  
ものを自分の物にしておきながら、さらにまた桜子お嬢様という美  
少女もフィッシュしてしまおうというのですか。

天然ジゴロですね。

侮れません。

『あっ』

竜也くん。

笑顔が似合いそうな美少女さん。

ミステリアスさが魅力的な大人しそうな美少女さん。

黙っていても大人の魅力溢れる美人さん。

とても明るそうな美人さん。

褐色の肌の絶世の美女で、何故かフォーマルなスーツを着用している完璧な男装の麗人なんだけど、それでいてお色気むんむんという美と美のケミストリー日本語で言うと化学反応を起こしちゃう人。

そんな個性豊か過ぎる六人が、何故か一斉に私を見て声を上げました。

私を見てとても驚いているようです。

「ん？」

どうしたのでしょうか？

私は声を上げた皆さんを見渡すことにしました。

そういえば、日本には伝統芸の一つとして、リアクション芸というものがあるそうですね。

このような場合でもそれは通用するのでしょうか？

考えていても仕方ありませんね。

汝、リアクション芸を披露すべし。

神様もそう言っているような気がしてきました。

では、実行してから考えるとしましょう。

「そうです。そのまさかです」

竜也くんがとてもツツコミを入れたそうにしています。

何か悪いことでもしてしまったのでしょうか？

不思議でなりません

**第二十六話・そして再びのお母様（裏）（後書き）**

御意見・ご感想などお待ちしております!!



番外編く第九話く：美水すもも軍曹の野望その？（前書き）

久しぶりの番外編でございます！

それではどうぞー！

番外編／第九話：美水すもも軍曹の野望その？

竜也たちと桜子&クリスティーが顔を合わせたそのとき、別の場所でも事件が起きていた。

頭髮全てが白髪に染まった老人を中心に、三人の老人がその背後に控えている。

中心にいる老人の名前は柊<sup>たかみ</sup>孝美。

日本の魔法界、四大貴族のトップに君臨する男である。

そして孝美の背後に控えているのは、それぞれ美水、矢吹、五十嵐家の長たちである。

「美紀」

厳かな雰囲気の中、孝美が孫娘に対して口を開いた。

「はい」

答えた美紀は真っ直ぐな瞳で孝美を見据える。

老人たちとちょうど対称になるように、美紀を中心に、すもも、

虎之助、孝太郎（村人A）がその背後に控えている。

「あの噂は本当のことなのか？」

「あの噂とは何のことなのでしょう？」

「お前が、例の落ちこぼれと親しくしているという噂のことだ」

孝美が言う『例の落ちこぼれ』とは、竜也のことである。

「・・・・・・・・」

おおー！

美紀が怒ってるよ！

自分の彼氏を落ちこぼれ扱いされて怒ってるのかにや？

そうだったら美紀も可愛い所があるんだねー！

すももは心の中で、今の堅苦しい雰囲気を楽しんでいた。

「どうなのだ、美紀よ」

「貴族とは名ばかり。やっぱり馬鹿じゃ本当の実力ってものを理解出来ないみたいだねー、なははははは！」

孝美様、お言葉ですが、孝美様の仰る『例の落ちこぼれ』藤堂竜也くんは我々の力を遥かに凌駕しています。

瞬間、空気が凍りついた。

「ちょっ、すもも姉ちゃん！」

と、突然虎ちゃんが慌てた様子で私のことを見てきた。

あらら、私の女としての魅力がまさか今になって虎ちゃんを魅了するなんて。

私も罪な女ってことね！

「……………（ブルブルブルブル）」

孝太郎くんは何故かその場で蹲<sup>つすくま</sup>り、震えている。

キメエ。

「すもも」

こちらに振り返った美紀が、冷淡な口調で私の名前を呼ぶ。

口調こそ冷淡そのものだけど、美紀はすごく楽しそうな、嬉しそうな、そんな表情で私を見ていた。

「すもも、恐らく、考えていることと、実際に口に出した言葉が逆になっていると思うわよ？」

「あちゃ、本当に？ やっちゃったよー！」

「困ったものね、うふふ」

まあ、自覚してやったことだからね！

恐らく美紀も私と同じ考えなんだと思う。

虎ちゃんは・・・どうなんだろう？

話せば虎ちゃんもこちら側に付いてくれるだろうけど。

孝太郎くんは別にいらなかなー！。

というより、孝太郎くんは確実にあちら側に付くだろう。

そう思っ、私は孝美の爺に視線を向ける。

「すももよ。今の言葉はどういう意味だ？」

「まあ、バレちゃったら仕方がないですねー！」

「どういう意味だと聞いている！」

孝美の爺が怒ってるよー！。

おお、怖っ。

「どういう意味も何もその言葉のままの意味ですけど？ それとも、一から十まで説明してあげなくちゃ理解できないほど、孝美の爺様はボケているのかな？ そうならそうと言ってくれればいいのに！ だってホラ、小さい頃に言われたでしょ？ 御老人は労りましようってね！」

「貴様・・・自分が誰に何を言っているのか分かっているのだからうな？」

「爺様こそ分かっていらっしゃるかな？　自分が誰に向かって偉そうにしているのかを！」

「何？」

「爺様たちはただの老人。四大貴族の長という肩書を持ってはいるけど、でもそれだけ。そのくせ、いつもいつも偉そうにして」

「・・・どうやらキツイ仕置きが必要のようだ」

パチン。

という指を鳴らす音に、孝美の爺は言葉を途中で遮られた。

指を鳴らしたのは美紀だった。

「頭が高いっ！」

美紀がそう言った瞬間、孝美の爺の真横に、氷の槍が突き立てられていた。

「王の名を冠する私たちに、その態度はどういうことですか？」

「つか、私たちが何も知らないとも思ってた？」

「・・・何のことだ？」

「私たちに黙って、結婚話なんて勧めていたようですね」

怒ったときのマリンの姐さんのように、美紀は底冷えのする声で言う。

「今どき政略結婚なんて流行らないよ」

私は思ったことを素直に口にすることにした。

『全くだ』

『それに美紀には既に王子様がいるものね』

『すももには未だいないがな!』

そんな陽気な声が室内に響く。

声の主は、私と美紀以外の全員が驚いていた。

周囲を溶かすような、そんな強烈なオーラを纏う灼熱の瞳を持つ大男。

周囲を凍てつかせるような、そんな強烈なオーラを纏う氷結の瞳を持つ美女。

大男は私の後ろに。

美女は美紀の後ろに。

突然現れた二人に皆言葉もない様子。

「彼らのことを紹介せずとも、長の皆さまなら理解しておいでですね？」

「・・・まさか」

『我はボルケーノ。炎の化身であり、炎の精霊たちを統べる王である』

『私はシヴァ。氷の化身であり、氷の精霊たちを統べる王です』

「あのさ、政略結婚のこともそうだけど、いい加減アンタら老人のやり方にはもううんざりしてるんだよね。だから」

「今日を持って、私が柊家の長」

「そこで、私が美水家の長になるから！　よろしくね！」

「美紀姉ちゃん、すもも姉ちゃん」

「うん、ごめんね虎之助くん。こんなことになっちゃって」

「いや、それはええねんけど」

「それで、虎ちゃんはどうする？」

「どうって？」

「私たちの側に付くか、あちら側に付くか」



言って、私は孝美の爺を見る。

「姉ちゃんたち分かってんのか？　今、自分たちが何をやってんのか？」

「もちのろん！！」

分かってなきゃ、こんなことなんて出来ないっしょ！

「戦争が起きんで？　日本の魔法界貴族は世界で言えばホンマに弱小やけど、それでも貴族や。姉ちゃんたちが今やってることは立派なクーデターや。こんなことが世界に知られたら、それこそホンマに戦争が起きてまうで？」

「だーからー！　全部分かってるって！」

虎ちゃんは本当に優しい子だなー。

私たちに、今ここで引き返すための逃げ道を作ってくれるなんて

でも　。

「全部、了承済みな。私もすもも」

美紀の言葉に虎ちゃんは黙り込んでしまう。

ああー、そうか。

そうね。

虎ちゃん。

ごめんね。

「うん、そんならええんや！ 俺は姉ちゃんたちに付いてくわ！」

虎ちゃんはいつも私たちの味方だったね！

「虎之助、お前まで！」

孝美の爺がそう凄んで言うけど、虎ちゃんといえバ。

「そんでこの後はどないするん？ こんなんになってもうて、これから何も無かったように出ていくのはメツチャ難しい思うで？」

華麗にスルー！

凄いよ虎ちゃん！

そこに痺れる、懂れるー！

「心配ないよ。手は打ってるからね」

言つて、美紀は再び指をパチンと鳴らす。

『オーケー美紀』

そう言つと、シヴァは胸の前で両手を大きく広げる。

そして、大きく息を吸い込み、空気を飲み込んでいく。

広げられた両手の掌を、何かを掴むように握り込む。

スノウソング  
『雪歌』

シヴァは握り込んだ掌を開く。

そこから氷の結晶に手足が生えたような、可愛らしい小人たちが次々と生まれ出る。

小人たちはケラケラと笑い声を上げている。

その笑い声が次第に冷氣と化し、辺りに霧のような何かを作り出す。

「・・・これは！」

孝美の爺は何かに気付いた様子だけど、もう遅いよ！

甲高い音が外から聞こえてきた。

「待たせたね！」

聞こえてきたのは、私たちにはとても馴染み深い人の声だった。

陵聖学園では、ハリウッドの名優、モーガン・フリーンのあだ名で親しまれている、牛丸先生の声だった。

「さあ、早く！」

牛丸先生は黒く大きなワゴン車から顔を出してそう叫ぶ。

「行くよ、虎ちゃん！」

私は虎ちゃんに声を掛けて走り出す。

美紀は既に車に向かって走っていた。

「ちょ、あいつはどないすんねや？」

こんなときでも優しい虎ちゃんは、孝太郎くんを指さして言う。

「ああ、放つといていいよ！」

「は？」

「だって、孝太郎くんは向こう側の人間だから！」

孝太郎くんは、柊家、五十嵐家の命令で今までの私たちの行動を逐一チェック、報告していた。

そして、この前の陵聖学園寮を襲撃したあの事件。

軍服姿に顔を黒いフェイスガードで覆い隠した人物を引き入れたのも孝太郎くんである。

「すもも、虎之助くん！ 早く乗って！」

牛丸先生は既に発進の準備を整えていてくれている。

「おのれ、『雷帝』までも仲間引き込んでいたのか！」

孝美の爺は牛丸先生を睨みながらそう呟く。

そんな声を耳にしながら、私と虎ちゃんは車に乗り込む。

「さあ、では行こうか！　行き先は打ち合わせ通りでいいんだね？」

「はい！」

美紀は牛丸先生に気合の入った返事を返す。

「では、出発だ！」

牛丸先生がアクセルを踏み込み、車は目的地へ向かって発進していく。

やっぱり、このワンシーンだけ見てとれば、まるで映画のようだなー。

私はそう思いながら、背もたれに身を預けてこれからすることに想いを馳せていた。

番外編〜第九話〜：美水すもも軍曹の野望その？（後書き）

御意見・ご感想などがありましたらお待ちしております！！

## 第二十七話：（前書き）

では、本編をどうぞ！

## 第二十七話：

「そうです。そのまさかです」

まさかのボケに俺はものすごくツツコミを入れたかった。

ええ、それはもう本当に。

でも、ツツコミを入れることはしなかった。

だってツツコミを入れると何だか負けた気がして悔しいのです。

これこそ、秘技ボケ殺し！

「どうして貴方がこの場にいるのかしら？」

そんな俺の心情とは天と地ほどの違いがあったのだろう。

マーちゃんがシリアスモードへと移行する。

「ふ．．．」

軍服姿に顔を黒いフェイスガードで覆い隠した、見るからに怪しい人物は余裕の笑み（顔が見えないから笑ってるか分からないけど、声でそう判断）を見せている。

「何も言わぬということは、殺されても文句はない　　ということだな？」



グリシーヌはグリシーヌで、人間の姿のまま、刃物のように長く切れ味のよさそうな爪を出している。

言葉を発した口からは、炎の余熱だと思われる熱気が漏れ出ている。

「ふふ・・・」

うん？

あれ、もしかしてコイツ？

「・・・なんだかおかしい」

黒崎さんも俺と同じ違和感を感じたらしい。

そう。

以前俺たちを襲った軍服姿に顔を黒いフェイスガードで覆い隠した、見るからに怪しい人物と、目の前の人物とが同じ人物だとは思えない。

気のせいというわけでもない。

コイツからは、殺気というか何と云えばいいかわからないが、そういう危険なものは一切感じない。

むしろ・・・。

「ふふふ・・・つぐす」

泣いたー！！

今コイツ泣いたよね！？

「なんだよー！」

そしてキレたー！！

「私が何したって言うんだよー！！」

うわーん！

と泣きながら、桜子の中々に成長しているお胸様に顔を埋めて泣き始めた。

なんだか可哀想になってきた。

「あ、あれ？　ちょ、ちょっと、泣かないでー！　お姉さんたち、貴方に泣かれると何だか調子狂っちゃうよー」

マーちゃんも目の前の事態にかなり戸惑っているようだ。

「う、うむ。なんというか・・・すまん。その、まさか泣くとは・・・」

グリシーヌは爪を元の長さに戻し、泣いている赤子の対応に困る子供のようにしどろもどろになっていた。

だけど、一番対応に困っていたのは誰あろう、桜子である。

桜子、我が家へ来る。

軍服を睨む俺たち。

突如泣きだす軍服。

軍服、桜子の胸に顔を埋める。

桜子、オロオロとし出す。

という訳の分からないことに。

そりゃ、困るわな。

と、そんなどうしていいか分からないことになっている空気を変えてくれる救世主が現れた。

「はいはい、もうそこまで！ 皆一回深呼吸をしましょう！ はい、深呼吸開始！ すうー、はあー、すうー、はあー。はい、どう落ち着いた？」

母さん。

あなたはなんて凄い人なんだ。

「どうも、取り乱してしまいすみませんでした」

そう言って軍服姿の怪しい人物は頭を下げる。

以外に礼儀正しい。

そこに驚くというのは失礼か。

「今さらですが初対面の皆さまに、自己紹介をさせてください。  
私の名前は、エドアルド・クリスティーと言います」

初対面。

やっぱり人違いだったのか。

そんなクリスティーというらしい男は、黒いフェイスガードを被ったまま俺たちに頭を下げた。

「桜子お嬢様の護衛のようなことをしています」

うわゝ、知ってはいたけど、桜子って本当にお嬢様だったんだな  
！。

第三者の口から改めて『桜子お嬢様』なんて聞くと、なんだか変な気分だが。

「そうなんだ～。ごめんね～。お姉さんたちすっかり勘違いしちゃってたよ～」

「いえ、誤解が解けて何よりです」

「実は、少し前にね、かくかくしかじかで」

「そんなことがあったのですか。それは、紛らわしいものを被っている私にも責任がありますね」

「そんなことないよ」

「そうですか？　そう言っていたらと少し気が楽になります」

うふふ。

あはは。

と笑いあうマーちゃんとクリスティー。

はい、ここでちょっとストップ。

今の会話おかしいよね？

つーか、『かくかくしかじかで』でよく会話が成立したな！？

びつくりしたよ！

（それはですニャ、愛の力ですニャ！）

ニャン吉つつぁん！

（相手のことを思う魔王様の愛の力が、言葉という壁を乗り越え相手に伝えたいと思うことを伝えられるのです！）

すまん、ニャン吉。

俺にはお前が何を伝えたいのか良くわからないのだけど。

（・・・実はボクも自分が何を言いたいのか良く分かっていないのですニャ）

そうか。

（はいですニャ）

・・・。

（・・・）

・・・。

（そ、それじゃあボクはこの辺でドロンしますニャ）

ドロンで。

まあ、マーちゃんのことだからまた魔法で何とかしたんだろうな。

便利だね、魔法って！

「しかし不思議ですね？」

クリスティーは俺のことを見ながら言う。

「竜也くんは本当に魔法が使えないのですか？」

「あ、ああ。まあ、はい」

「うーん、おかしいですね」

「えっと、何が？」

「桜子お嬢様」

無視ですか！？

話を振っておいて無視されるのですか！？

「竜也くんが魔法を使えないというのは本当なのですか？」

そして全く信じて貰えない俺！！

少しは信じてくれてもいいと思うよー！！

「そうよ。竜也は魔法を使えないわ。で、でも、そんなことなんて関係なく私は竜也のことが、その、す、好きだし・・・魔法が使

えなくて将来就職出来ないってことになったら私が養って上げることも……」

と、後半は声が小さくなったため桜子は何を言っているのかは分からなかった。

そんな俺の脇腹を、イリーナはひじで小突いてくる。

「マスターも隅に置けませんねー」

何のことでしょうか？

イリーナはたまにわけのわからないことを言うな。

「竜也くん、本当は貴方、魔法が使えますよね？」

「はい？」

思わず素っ頓狂な声を出してしまった。

だって、クリスティーがいきなり変なことを言いだすから。

「ふむ、召喚術も広義の意味では魔法といえば魔法といえるからな。それと勘違いしているのではないか？」

「いえいえ、そんなことは………って!! ええー!!  
竜也くん召喚術が使えるんですか!？」

「そ、そっなの竜也!？」



クリスティーと桜子が同時に驚く。

アレ？

クリスティーはともかく、どうして桜子が驚くんだ？

もしかして、俺言ってなかった？

「いやー！ それは本当にびっくりです。おめでとうございます」

「あ、はい。ありがとうございます」

「あ、でもでも！ 私が言っている魔法というのは、召喚術とは違うものことなんですけど。でもー、うーん何て言うのかな？ 私が竜也くんから感じる魔法の力はですね、うーん、本当に何と伝えればいいのか・・・その存在しないんですよー」

俺、今、俺の存在自体を否定されてしまいましたか？

うそー。

今さっきあった人に存在を否定される俺ってどうなんだ？

魔法というものは、七つの元素によって成り立っている。

生き物の命を守り、時に奪う、火。

草花を育て、時に暴風となりあらゆるものを薙ぎ倒す、風。

全ての生命の源である、水。

その昔は、神と崇められたこともある自然の脅威、雷。

生命が豊かな心を手に入れるきっかけとなった、音。

生命の命綱、生命が立つために必要不可欠である、土。

緑を守り、星を豊かに育て上げるための、木。

魔法とはこれらの七大元素によって成り立っている。

以上！

出張陵聖学園授業、イン我が家でした！

「ねえ、クリスティーさん」

イリーナがクリスティーを怖がらせないようにと、優しい声音で問いかける。

「もしかして、それって・・・」

俺がイリーナの声を聴けたのはそこまでだった。

そう、このときの俺が、この後どうなるかなんて分かる筈もなかったんだ。

突如、辺りは白く光る。

何も見えなくなった。

そして、次に俺が感じたもの。

それは　。

「竜ちゃん!!」

「竜也！！」

マーちゃんと桜子の叫び声が聞こえてきた。

痛い。

胸が突然痛み出した。

右胸の辺りに何か激しい痛みが……。

死。

そんな言葉が俺の脳裏を過った。

「貴様っ!!!!!!!!!!!!!!」

グリシー 又は誰に向かって怒ってるんだらう？

あ、  
ヤバイ。

目の……前が・真つ……暗……に……

## 第二十七話：（後書き）

ご意見・ご感想などがあればお待ちしております!!

第二十八話：あー、なんか超展開？　つか、オデ・・・（前書き）

あー、前回のタイトルはつけ忘れというわけではなく、無題的な感じのタイトルですことよ。

それよりも、かなり更新が遅れてしまいました！

ごめんなさい！

では、さっそく本編をどうぞ！！！！

第二十八話：あー、なんか超展開？　つか、オデ・・・

私が竜也くんから感じ取れた力は、世界に満ちている七大元素には含まれない力でしたのよ！

つかね、なんか召喚術を使えるってだけでも怖いのに、さらに得体の知れない力を秘めているってどういうことよ？

桜子お嬢様も難儀な相手に恋をしてしまいましたね。

とかなんとか考えている時でした。

いきなり藤堂家が寒くなりまして。

いくら夏真つ盛りだからってちょっとクーラー強すぎない？

まあね、気持ちは分かります。

だってクーラーといえば人類が発明した至高の宝だしね！

魔法を使って涼しくすることも出来るけど、それにしたって魔力を使うわけですから。

というより、正直面倒くさい。

クーラーなら、ボタンを押すだけで快適な生活を私たちに提供してくれるわけですから。

ああ、クーラー最高！

「竜ちゃん!!」

「竜也!!」

ん？

クーラーに想いを馳せている間に何かが起こったようですね。

それも、桜子お嬢様がかなり切羽詰まった叫び声を上げるような  
何かが。

とりあえず、事態の把握に努めるとしましょう。

竜也君の胸に氷の槍が突き刺さっていました。

何があっただんでしょう？

はい、事態の把握なんて無理ですよ。

「貴様っ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

褐色の肌の絶世の美女で、何故かフォーマルなスーツを着用して



いる完璧な男装の麗人なんだけど、それでいてお色気むんむんという美と美のケミストリー日本語で言うところと化学反応を起こしちゃってる人が、何やら尋常ではない様子で外を睨みつけていました。

藤堂家は趣がある匠の手が掛かったような家、悪い言い方をすればボロ家。さらに竜也君の胸に突き刺さっている氷の槍が藤堂家に飛来したことにより、藤堂家は壊滅の危機に陥っていたりするわけです。

「何故？」

ミステリアスさが魅力的な大人しそうな美少女さんが、そうポツリと言いました。

「ど、どうしてこんなことをしたんですか？」

笑顔が似合いそうな美少女さんはとても驚いた御様子。

外に顔を向けて震えております。

「どうして竜也を攻撃した、美紀」

褐色の肌の絶世の美女で、何故かフォーマルなスーツを着用している完璧な男装の麗人なんだけど、それでいてお色気むんむんという美と美のケミストリー日本語で言うところと化学反応を起こしちゃってる人は、さっきよりもいくらか冷静さを取り戻したかのように見えますが、それはそう見えるだけでした。

今にも怒りで世界を破壊しつくしそうなオーラが体中から漲って

います。

「え？」

問われた美紀なる人物は、攻撃が成功したというのに何故か茫然としております。

てか、あれに見えるは『氷の女王』の二つ名を持つ、柊美紀さんではないですか！

よし、後でサインを貰おう。

とか思いましたが、さすがにサインを貰えるような空気ではないですね。

「りゅ、竜也・・・くん？」

壊れたおもちゃのようにたどたどしい足取りで藤堂家へと踏み込もうとしている美紀さんを、

「竜也に近づくな！！！！！」

という怒声が、美紀さんの足を止めました。

声の主は、まさかの桜子お嬢様でした。

桜子お嬢様がこのように声を荒げる様を私は見たことはありません。

姉さん、事件です。

ちなみに私に姉はおりません。

いるのは根性のねじ曲がった兄が一人。

まあ、兄と言っても双子なので、あいつを兄と認識したことなど一度もありませんが。

そんなことを考えていると、だんだんと氷の霧みたいなのが晴れていき、美紀さんの後ろに人がいることが判明しました。

男の子と、女の子。

そのうちの女の子は桜子お嬢様と似たような雰囲気を持つ方でした。

そして、私を一番驚かせたのは……。

「何故ここに竜也くんが……。というか、何故皆が？」

ハリウッドの名優、モーガンフリーンがそんなことを言っていました。

やっべー！

本物！？

ミー、大ファンなんだけどー！！

美紀さんのサインは無理でも、モーガンなら大丈夫だよね！？

「あのサイ」

「胸に穴が開いてるが、これはどういうことだろう？ そう疑問に思うのは当事者として当然のことだと俺は思う訳だ。そして、俺の胸に穴を開けたのが、俺の彼女つてのも重要なポイントな訳だ。あー、なんか気持ち悪い。やっべ、今すぐ世界を破壊したくなってきた！ というわけで、今から世界を破壊します！！」

まさかの竜也くん復活！！

そのせいで私はモーガンにサインを貰えない・・・。

ていうか、なんだか竜也くんてば雰囲気変わったように思うのは気のせい？

「竜也くん！！」

と、復活した竜也くんの胸へと美紀さんはダイブ。

いつの間にか、突き刺さっていた氷の槍は掻き消えていました。

「おいおい、人を刺し殺す寸前にまでしてどうして抱きついてきてんだよ！ てか、うぜえ。近づくな」

「え？」

「え？ って何が？ 何でそんな信じられないみたいな顔してるわけ？ つかこれ当然の反応だろ？ どうして俺を殺そうとした相手に優しくしてやんなきゃいけないの？」

「りゅ、竜也くん？」

「気安く人の名前を呼ぶな。それよりいつまでくっついてるつもり？ そろそろ離れてくれないか？ 邪魔。熱い」

そう竜也くんが言うと、

「きゃああああっ！！」

美紀さんの体が突如、後方へと飛ばされた。

「うおっとっ！」

飛ばされた美紀さんを、背後にいた男の子が抱きとめる。

「おい竜也！ お前何してんねん！」

「は？ 何って何？ つーか、お前誰に口聞してるか分かってる？ 殺すぞ？」

ブンッ。

そんな鈍い音が聞こえたかと思うと、美紀さんを抱きとめた男の子の目の前の地面が一瞬で抉り取られていた。

「何故？」

さっきと同じ台詞を、ミステリアスさが魅力的な大人しそうな美少女さんが言う。

だけど、さつきとは違いその後にはまだ続きがありました。

「どうしてあなたが魔法を使えるの？」

え？

今の魔法なの？

全然気付きませんでした。

それにしてもこんな魔法は見たことも聞いたこともありません。

しかも、何の属性の魔法かも分かりません。

「・・・そんな」

「・・・マスター」

「・・・竜ちゃん」

とても明るそうな美人さん。

褐色の肌の絶世の美女で、何故かフォーマルなスーツを着用している完璧な男装の麗人なんだけど、それでいてお色気むんむんという美と美のケミストリー日本語で言うところの化学反応を起こしちゃってる人。

黙っていても大人の魅力溢れる美人さん。

その三人は同時に声を漏らした。

あーたたち何か知ってるのかしらん？

第二十八話：あー、なんか超展開？　つか、オデ・・・（後書き）

ただ今、実家のPCで更新しております。

未だに引つ越し先のPCはネットに繋がっておりません。

いえ、そんなことよりも・・・。

大変お待たせいたしました！！！！

本当にごめんなさい！！！！

こんな私ですが見捨てないでやってください！！

それと、感想ばっちこーい！！



第二十九話：新キャラ登場！ 皆、次も絶対見てくれよな！！ あれ？ これぞ

お待たせ致しましたー！！

やっとネットが繋がり小説をアップ出来ます！！

私、帰る！！

え？ なんで？

はい、私現在ネットが出来る喜びで少々頭のネジが緩くなっております！！

まあ、そんなことはさておき、早速本編へまいりましょう！！

第二十九話：新キャラ登場！ 皆、次も絶対見てくれよな！！ あれ？ これぞ

話は美紀が竜也を刺し貫く少し前に遡る。

「いや、厄介なことになったよ」

とは、車で絶賛逃亡中の牛丸普利男。

「やっぱり彼が動いていたんですか？」

助手席に座る美紀の言葉に牛丸普利男は重々しく頷いた。

「ああ、柊くんの想像通りだったよ。『風の王』ジェイハン・シュトリームだった」

「はああ、そうですか。それで、彼の狙いは何ですか？ まあ、聞かなくても大方予想は付きますけど・・・」

美紀は呆れたように大きく溜息を洩らして言う。

「うむ、彼は日本政府と日本の魔法界に全面降伏を促してきたみたいなんだよ」

『風の王』ジェイハン・シュトリーム。

美紀たちと同じく、王の二つ名を持つ男。

年は二十三。

アメリカに籍を置く彼は、アメリカ軍の魔法大隊隊長という肩書を持っている。

彼の操る風は、時に立ちふさがる者全てを切り刻み、時に風によって自由に世界を移動する。

ジェイハン・シュトリームという男は、良くも悪くも思い込みが激しく、自分の目的の為なら手段を厭わず目的遂行に当たる。

そんな彼、ジェイハン・シュトリームは、日本のとある女性に恋をしている。

一年前、ジェイハンが日本の王（美紀とすもも）の下を訪れた時に、ジェイハンはその女性を前にして恋に落ちた。

いわゆる一目惚れである。

ジェイハンは、挨拶もそこそこにいきなりプロポーズを申し込むという大胆な行動に出たが、結果は・・・。

「あのときは本当に驚いたわ。まさか初対面でいきなりプロポーズをするなんてね」

そう言い、今度は先ほどよりも更に深い溜息を吐く美紀。

そんな美紀に後ろの席に座っていた虎之助が声を掛けた。

「そんでプロポーズの結果はどうなったんや？」

「もちろんジェイハンは振られたわ。でもね、そこから厄介なこと

になっちゃったのよね」

当時のジェイハンの台詞を思い出しているのか、美紀は静かに目を閉じながら言う。

『そうか！ やはり君のように美しい女性には相応のプレゼントが必要だというわけだね！ わかったよ！ 次に君に会いに来るときはこの日本を丸ごとプレゼントしよう！』

美紀の話を聞いて虎之助は、

「何でそういう話になったんや？」

「それが分かれば苦労しないわよ」

心の底からそう思っているのか、本日三度目ともなる溜息を美紀は吐いた。

今度の溜息は今までで一番深いものであった。

元々魔法というものは西洋から伝わった神秘である。

魔法というものが日本に伝わるまで、日本の神秘は陰陽道であった。

しかし、時代が進むにつれて陰陽道は廃れていき、代わりに魔法という神秘が日本に溶け込むことになる。

馬鹿げた話ではあるが、そういう昔の事情があり日本政府と日本の魔法界は西洋国の魔法界に頭が上がりず、何でもかんでも言うことを聞いてしまうのである。

そして、今回日本の魔法界に圧力とも言つべきものを掛けてきたのは、間違いなくジエイハンである。

「はあ、なんやジエイハンって奴は想像してたよりもアホなやつやねんな」

『アホとはなんだ』

と、突然どこからか虎之助にツツコミが入った。

『アホではない！ これは愛！ 愛する女性に対する至上の愛！』

声が聞こえてきたかと思うと、次に牛丸・・・モーガン・フリ  
ンが運転する車が急停止をする。

タイヤは摩擦により甲高い悲鳴のような音を立てた。

「・・・ジエイハン」

言ったのはすももだった。

車に乗ってから初めて喋ったと思えば、すももはフロントガラスの  
向こう側を見て言う。

すももの視線の先には銀髪灼眼の男前が立っていた。

彼は満面の笑みを浮かべて言った。

『やあ！ 約束通り君を迎えに来たよ！ すもも！ でも、まだ完全はこの国を掌握してはいないんだ……。まだこの国には『神王』がいる。『氷の女王』は見逃そう。なんせ女の子だからね。でも、『神王』は殺しておこうと思うんだ！ 君に相応しい男の『王』は僕一人で十分だからね！ それじゃあ！』

そして、現れた時と同じように一瞬で姿を消す。

風が彼を運ぶ。

『そうそう、『神王』の胸には僕からのプレゼントを埋め込んであるから！ いやー、楽しみだよ！』『王』が『王』で無くなる瞬間がさっ！』

『風の王』ジェイハン・シュトリム。

彼は文字通り風の魔法を極めた存在である。

そして、同時に彼は優秀な呪術師でもある。

ジェイハンは遠く離れた相手であろうとも、自分の呪術を風に乗せて相手を呪うことが出来る。

どんな呪いを風で運んだのか定かではないが、

「竜也くん！」

美紀は今にも泣きそうな声で恋人の名前を叫んだ。

『でも、『神王』は美紀の恋人なんだって？ 愛しいすももの親

友の恋人を殺してしまうのは僕も忍びないから、特別に解呪の方法を教えてあげるよ。でも本当は解呪じゃなくて発動だったりしてね！ さあ、どっちでしょう！ まあいいや！ 美紀の氷で『神王』を体内から凍らせて仮死状態にすればいいよ！ なんとって呪いは死ねば消えるからね！

あ、それが単純に僕を殺しても呪いは解けるよ？ でも僕を殺すのは難しいと思うよ？ それじゃあ〜ね〜！』

それきり声は聞こえなくなった。

美紀はジェイハンの声が消えてすぐに、ジェイハンの魔力を辿り、モーガン・フリーンに車で追跡させた。

そして魔力を辿った先にジェイハンを見つけ、氷の槍をジェイハン目掛けて全力で投擲した。

だが、そこにいたのはジェイハンではなく・・・。

第二十九話：新キャラ登場！ 皆、次も絶対見てくれよな！！ あれ？ これぞ

お待ちいただいていた皆さまこんにちは。

お初にお目にかかる皆さま、ようこそ。

御意見、御感想、クレーム、罵詈雑言。

何でも受け付けております。

ただし、クレーム、罵詈雑言は用法用量を守り正しく御送信下さい。

あまりに多すぎると、私が気持ちよくな・・・いえ、なんでもありません。

それでは！！



第三十話：君の瞳に・・・完敗（前書き）

ということがあったんですよ！！

どういふことかって？

それは本編を見ていただければ・・・嘘です。

別に何もありません。

では、本編をどうぞ！！

### 第三十話：君の瞳に・・・完敗

「今から世界を破壊します！！」

竜也の世界壊滅宣言より三日後、日本、中国、北朝鮮、アメリカ、イギリスが壊滅した。

この五力国を破壊したのは紛れもなく、竜也一人の力で行ったものである。

竜也が行った破壊工作に、グリシーヌ及びイリーナは一切関知していなかった。

魔法が使えない、竜也が何故たった三日間という短い期間で五力国も破壊することができたのであろうか。

そんな不可思議な現象を調べるべく、私たち次期陵聖学園生（希望入れたらいいな）非公認新聞部の二人が完全アポなし、体当たり取材を敢行して得た情報をここに記そうと思う。

え？

私たちって誰かって？

それは・・・。

あー、それはねー。

え？

何？

巻きで？

了解！

それじゃあ、私たちの正体はまた後ほどということぞ！

「俺は神様なのです」

アメリカに現れた竜也が最初に発した言葉である。

その言葉と共に、自由の女神があることで有名なニューヨーク、そしてワシントンが陥没した。

文字通り陥没したのである。

アメリカ政府は突然のことに、何の対応も出来ないまま機能を停止した。

だが、奇跡にも等しいことだが、このような大惨事の中で死傷者は一人も出なかった。

このときの様子をハンバーガーショップの店長、デイビット氏はこう語る。

「俺は今まで色んな悪事を働いてきた。ハンバーガーにケチャップじゃなくマヨネーズを混入させたり、立ちションもした。ガキの頃はママの言いつけを破って夜十時まで起きてたこともある。今までの俺には怖いことなんて何にもなかった！　だがよ、そんな俺にも怖いものが一つ出来た。それが、アイツだ！　リュウヤ・トウドウ！　奴はあんな大惨事の後に俺の店に来て、こう言っただ！」

「マスタードたっぷりのハンバーガープリーズ」

「わかるか！？　ケチャップでもなく、マヨネーズでもなく、第三の選択肢マスタードを選びやがったんだよ！　奴の言葉に俺は震えが止まらなかった！　奴は紛れもなく神様だよ？　神様に逆らおうなんて、流石の俺でも無理ってもんなんだ！」

その後、デイビット氏は一時間強もの時間、竜也は何故神なのかということについて、自身の見解とカオス理論を交えて披露した。

どうして一ハンバーガーショップの店長がカオス理論なんてものを扱えるのかは聞いてはいけない。

「俺は神様アル」

中国は北京に現れた竜也が最初に発した言葉である。

竜也は広大な土地を持つ中国の半分を地に沈めた・・・という。

実際の光景を見ていないため、どのようにしてそんな大それたことをやってのけたのかを、  
このときの光景を実際に見ていた、自動車整備工場長のチンさんに話を聞いてみようと思う。

『この整備工場が設立されたのは実に百年前。百年前といえば……うんたらかんたら』

工場長が工場の話ばかりするので、何故かこの工場を見学しにやってきた日本人観光貨客の女性二人組に話を聞いてみようと思う。

そして何故かこの二人組は某紫色の大きな人造人間が活躍する、エルフという発音に似た組織の某女性二人組に似ていた。

『そうね……あの時のことを簡単に言っと……』

『パターン青！ 間違いありません！ 使 ですよ！』

『まさかこんなタイミングでやってくるなんてね』

『こ、この反応は……』

『まさか……暴走？』

もう中国は飛ばすことにします。

ですが、これはこれで竜也の凄さが伝わったのではないのでしょうか？

ないでしょうね・・・。

「俺は神様なんだぜ！」

韓国はソウルに降り立った竜也の最初の言葉。

「俺は明洞ミョンドンに来てみたかったんだぜ！！ ナンタって舞台を見てみたかったんだぜ！ 今から見てくるんだぜ」

約二時間後。

「ナンタ・・・最高なんだぜ！！ 観なきや絶対損するんだぜ！！ だから、韓国は潰さないんだぜ！」

壊滅の危機からよく分からない理由で免れた韓国であった。

「俺マンセー！」

その言葉の直後、北朝鮮は消滅したらしい。

イギリス・・・は、もう書くの止めてもいいよね？

どうせ壊滅してるんだし。

え？

何？

書くのが面倒くさいだけだろって？

違う違う！

何て失礼な！！

もういい！！

私帰る！

突撃リポーターが帰ってしまったため、今回の取材はここで断念することに。

だが、これで竜也の偉大さが皆さまにも伝わったものだとなんは確信するものである。

それでは、諸君らに栄光を！！

そんな動画を藤堂家では、美紀、すもも、虎之助、モーガン・フ

リン、マリン、グリシーヌ、イリーナ、桜子、クリスティー、  
竜也ママの計一人が鑑賞していた。

「えへへへ」

件の動画を持ちこんだ、人懐こい瞳の、未だ幼さを残した同じ顔の  
少女たち二人は褒めて褒めて、というオモチャを持ってきた子犬  
のような顔で桜子を見ている。

「三日掛けて調べたんだよ？」

「う、うん・・・」

桜子は困ったような笑いを浮かべながら、少女たち二人の頭を撫  
でる。

「やつぶー！」

少女たちにとっては望外の喜びだったようである。

「つか、その子ら誰なん？」

藤堂家に集う誰もが思っていた疑問を、虎之助が言う。

「あれ？ まだ紹介してなかったかしら？」

そんな竜也ママの発言に、全員の視線は自然と竜也ママに集まる。



竜也ママは同じ顔の少女たち二人を背後から愛情いっぱい込めて抱きしめて言う。

「紹介します！ 我が家の天使です！！ 藤堂家のツインエンジェルです！ 天使さまのご降臨や〜！」

「初めまして。いつも竜也兄さんがお世話になっています」「

第三十話：君の瞳に・・・完敗（後書き）

ご意見・ご感想などがありましたら是非お願い致します！！

第三十一話：目覚めの時は来た・・・かな？（前書き）

今回の話は、今までと違って少し・・・。

ストーリー上

仕方がないとはいえ、今までと温度差が・・・。

### 第三十一話：目覚めの時は来た……かな？

「神に祈る間をやるう」

初老の男性から発せられた重低音が、暗闇の中に響き渡る。

「……………」

男性と相對している人物は闇に紛れており、その姿を確認することとは叶わなかったが、彼には、自分が今誰と戦っているのか分かっていった。

「情けない。お主はそれでも王を名乗りし者か！」

初老の男性の名は、ゾルドック・アイバーン。

イタリアに籍を置いている彼は、『土の王』として、世界に名を馳せているが、彼は土の魔法を滅多なことでは使わない。

例えば、先日異界の魔獣がロンドンの街に出没した際、ゾルドックに救援要請が出たが、その時でさえも、彼は己の最も得意とする土の魔法を一切使わず、己が拳一つを武器に魔獣を討伐するという異業を達成させている。

そんな彼は今、普段から私服としても好んで着ている修道服がボロボロに破けて、上半身は裸体を晒し、下半身はつい先日ユニフォームで購入した新品のジーンズが、文字通りダメージジーンズと化して

いる。

ゾルドックは筋骨隆々とした歳に似合わぬ肉体を裂傷させられ、もはや虫の息状態であるにも関わらず、不敵な笑みを相手に向けた。

「王の名が泣くぞ。若き神王よ。あの魔女が貴様を育て上げていると聞いて、どのような者かと思えば、何のことはない。ただの小僧だったとは・・・」

そう言って、ゾルドックは一度目を閉じ、意識を集中させ始まる。

「我が双腕の宿れ、土の精よ。汝たちの猛る息吹を我が肉体へと化せ」

大きく両腕を宙に翳し、ゾルドックは土の魔法を唱えた。

「お主の意識を、この私の魔法で覚まさせてやろう！」

ゾルドックは両腕を黄金色に染め上げる。

片腕だけで黄金十トンはあるつかという重量だが、直に全身全てが黄金色の輝きに染まりあがった。

「行くぞ！」

『土の王』ゾルドック・アイバーンが意識不明の重体に。

その報は全世界に衝撃をもたらした。

『王』の名を冠する魔法使いが、ということもあるが、その事態を引き起こしたのが同じく『王』であり、少し前までは全世界の人間が認める世界最弱の落ちこぼれであった藤堂竜也がもたらしたことが原因であったからだ。

『王』の一人が重傷という事態を重く見た『世界』は残る『王』たちへと召集を掛けることに。

『氷の女王』

『炎の女王』

そして、

『魔王』

この三人が籍を置いている、日本という小さな島国。

そこに、『世界』は『王』たちを集めることにした。

『闇がたゆたう。混沌は生と死を生む。我、名を神王。我が司りし力は闇。闇を払しょくせしめる力はこの世には存在せん』

藤堂竜也は『世界』を敵として定めた。

第三十一話・目覚めの時は来た・・・かな？（後書き）

ご意見・ご感想などお待ちしております!!



第三十二話：真実はいつも……とは限らないように見えて実はいつも……

前回は引き続き……

第三十二話：真実はいつも一つ・・・とは限らないように見えて実はいつも一つ

美紀、すもも、マリン。

三人が『世界』から召集を受ける少し前のこと。

「どうして、藤堂くんが魔法を使えるの？」

そう言ったのはマリアである。

誰に問うでもなく、ただ疑問を口に行っているだけなのだが。

「赤色と青色を混ぜるとどんな色になる？」

唐突に、グリシーヌは言う。

「なんやの突然？」

それに答える虎之助は心底不思議そうに首を傾げて聞き返す。

「何色って、紫色ちゃうん？」

「ああ、そうだな」

「せやろ？」

「うむ。では、その紫色に白色と緑色、茶色、黄色とそれからそうだな・・・肌色を足すとどういった色になると思う？」

「えーと・・・何色になるん？　なんやごちゃまぜになりすぎ取ってよーわからんわ」

「そうだな。私もよくわからない。実際にやってみればどんな色になるのかはわかるのだろうが、そんな面倒くさいことをしようとは思わない」

「あの・・・結局グリシー又さんは何が言いたいんですか？」

そう聞くきぬに、グリシー又は、

「白色に赤を混ぜるとどうなると思う？」

「え？　うーん、えーと、白っぽい赤色ですか？」

「そうだな」

そう言ったグリシー又は美紀を指さして、

「美紀は青色で、竜也は白色。さて、この場合は？」

「え、え？」

急に話を振られた美紀は軽く混乱する。

「えーと、白っぽい青・・・ですか？」

「そうだな。それがただの色であるならば何の問題もない。竜也は魔法が使えない。魔法が使えないということは、魔法の素養がな

ということだ。産まれたての赤子でも、何かしらの魔法の素養を持っている。だが、一切の魔の素養を持たない竜也がその身に同時に二つ以上の魔を受けたとするならば　そうだな、色ならば先ほどのように互いに混じり合うだけで終わるが、竜也は人間だ。そして人間には限界値ともいうべき許容量がある。『風』と『氷』。二つの魔、それも互いが『王』の名を冠する魔法使いが放った魔法をその身に浴びれば、良くて死、悪ければ存在が消滅してしまってもおかしくはない」

グリシーヌのその言葉に、

美紀、すもも、虎之助、そして・・・

モーガン・フリー　ンが凍りついた。

四人の脳裏に、『風の王』ジェイハン・シュトリームの楽しげに笑う声が蘇る。

『そうそう、『神王』の胸には僕からのプレゼントを埋め込んであるから！ いやー、楽しみだよ！』『王』が『王』で無くなる瞬間がさっ！』

そして、美紀が放ち、竜也の胸を貫いた氷の槍。

「マスターの中に宿る『神王』が、マスターを生かそうとその力を覚醒させた結果」

「竜ちゃんの自我は眠り、『神王』が目覚めたのよ」

ここで久々登場のシリアスモードなマリンさん。

いつものような柔らかい表情はなりを潜め、真剣な声で語る。

「『神王』の力は闇。全てを飲み込み、全てを壊す凶悪な力」

「そう、今の彼には魔法は通じないよ」

エドアルド・クリスティとは違う、軍服姿に顔を黒いフェイスガードで覆い隠した怪しい人物が低く、笑いを押し殺したような声で言った。

第三十二話・真実はいつも一つ・・・とは限らないように見えて実はいつも一つ

ご意見、ご感想お待ちしております!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8776j/>

---

世界最強の落ちこぼれ

2010年10月12日13時36分発行